

日本橋

泉鏡花

青空文庫

篠蟹 檜木笠 銀貨入 手に手 露地の細路 柳に銀
の舞扇

河童御殿 栄螺と蛤 おなじく妻 横槩賦詩 熊の筒袖

縁日がえり サの字千鳥 梅ヶ枝の手水鉢 口紅 一重

桜

伐木丁々 空蟬 彩ある雲 鴛鴦 生理学教室 美拳

怨霊比羅

一口か一挺か 艸冠 河岸の浦島 頭を釘 露霜

彗星 綺麗な花 振向く処を あわせかがみ 振袖

篠蟹

一

「お客に舐めさせるとよ。」

「何を。」

「その飴あめをよ。」

腕白とおものの十とお九ツ、十一二なのを頭かしらに七八人。春の日永なに生なで集った。手に手に紅だの、萌黄もえぎだの、紫だの、彩いろつた螺貝ばいの独こ

欠伸まあくびで鼻の下を伸のしている、四辻よつの飴屋あめやの前に、押おしくら競まんじ饅頭じゅう

楽。^ま日本橋に手の届く、^{とお}通一つの裏町ながら、^{まきみず}撒水の跡も夢のように白く乾いて、^{かげろう}薄い陽炎の立つ^{のどか}長閑さに、彩色した貝は一枚々々、^{かんば}甘い蜂、香しき蝶になつて舞いそうなのに、ブンブンと^{うな}唸るは^{あぶ}虻よ、^{やかま}口々に喧しい。

この声に、^{みみもと}清らかな耳許、^{はか}果敢なげな胸のあたりを飛廻られて、^{ひなた}日向に^あ悩む花がある。

^{ぼたん}盛の牡丹の^{としごろ}妙齡ながら、^{しまだ}島田鬘の^{もつ}纏れに影が映す……^{かさり}肩揚を^と除つたばかりらしい、^{くろしゆす}姿も大柄に見えるほど、^{かすり}荒い^{かさり}紺の、いささか^ゆ身幅も広いのに、^{くろしゆす}黒縹子の襟の掛つた^{しまおめし}縞御召の一枚着、^{うぜん}染の^{まえだれ}前垂、^{おんなじ}同一で^{ひがのこ}青い帯。緋鹿子の^{しよいあげ}背負上した、^ゆそれしやと見えるが^{あどけ}仇気ない^{ふうう}娘風俗、^さつい近所か、^さ日傘も翳さず、可愛

い素足すそに台所穿ぼきを引掛けたのが、紅と浅黄で羽を彩る飴あめの鳥と、打切飴ぶつきりの紙袋を両の手に、お馴染なじみ染おやしの親仁おやじの店。有りはしないが暖簾のれんを潜くぐりそうにして出た処を、捌さばいた棲つまも淀むまで、むらむらとその腕白うでしろ共に寄つて集たかられたものである。

「煮てかい、焼いてかい。」

「何、口からよ。」

と、老成ませた事を云つて、中でも矮小ちびが、鼻まで届きそうな舌を上舐うわなめにべろんと行やる、こいつが一芸。

「まあ、可笑おかしい。」

若い妓こは、優しく伏目に莞爾にっこりして、

「お客様が飴なんか。大概御酒ごしゆをあがるんですもの。」

で、ちよつと紙袋を袖で抱く。

「それだつてよ、それでもよ、髯ひげへ押着おっつけやがるじやねえか。」

「みずてんさん不見手様。」とまた矮小が、舌をべろんとひるがえ翻す。

若い妓はおとな柔しかつた。むつともしそうな頬はなお細つて見えて、

「あら、おおき大な声をするもんじやないことよ。」

「だつて、看板に掛けてやがつて。」と一人が前を遮るように、

独楽の手繰たぐりをずるりと伸す。

「違つたか。雪や氷、おべた冷い氷よ。そら水の上に、チョンなんだ。」

「不見手様。」と矮小があじ頤でしやくる。

「矮小やい、舌を出せ。」

「出せよ、畜生。」

「ううん、ううん、そう号令を掛けちゃ出せやしませんさ。」

と焦つて頭突ずきに首を振る。

「馬鹿、咽喉のどぼとけを掴つかんでいやがる。」

「ほほほ。」と、罪の無い皓齒しらはの荅つぼみ。

「畜生、笑つたな、不見手。」

と矮小は、ぐいと腕まくを捲つた。

「可厭いや、また……大おおな声おきをして。」

「大な声がどうしたんでえ。」

と、一人の兄哥にいさん、六代目の仮声こわいろさ。

その若い妓は、可愛い人形を抱くように、胸へ折った片袖で、
おもておほ面を蔽う姿して、

「堪忍して下さいな。」

と遣瀬やるせなさそうに悄しおれて云う。

「やあ、謝罪あやまるぜ、ぐうたらやい。」

「不見手よりか心ところてん太たいだい。」

またしてもこの高声、はつとしたらしく袖を翳かざして、若い妓は
 隠れたそうに、

「内証ないしよなのよ、ねえ、後生よ。姉さんに聞えると腹を立ちます
 わ。」

「何を云つてやんでえ。」

「分るもんか。」

矮小が抜からず、べろん、と出して、

「お前とこン許とこの姉さんは、町内の狂人きちがいじゃねえかよ。」

「其奴そいつも怪しいんだぜ、お夥間なかもだい。」

と背後うしろから喚わめくと、間近まぢかに、（何。）とか云う鮫屋すしやの露地口。

鼬いたちのようにちよろりと出た同一腕白おなじ。下心あつて、用意の為に引

込んでいたらしい。芥溜ごみためを探したか、皿から浚さらったか、笹ツ葉

一束、棒切さきの尖さきへ独楽なわで引括ひっくくった間に合せの小道具を、さ

あ来い、と云う身で構えて、駆寄ると、若い妓の島田の上へ突着

けた、ばさばさばツさり。

が、黙つて、何にも言わないで、若い妓は俯向うつむいて歩行あるき出す。
頸うなじ摺すれに、突着つけ、突掛つかけ、

「やあ、おいらんの道中々々！」

「大高、旨うまいぞ。」と一人ひとりが囃はやす。

「おつと任せの、千崎弥五郎やごろう。」

矮小わいせうが、心得、抜衣紋ぬきえもんの突袖つっそでで、据腰すゝこの露あ。早速さそくに一人

が喜助と云う身で、若い妓の袖そでに附着くつく、前あ後とにずらりと六人

列れつを造つて練りはじめたので、あわれ、若い妓の素足の指は、爪つ

まへに紅べにが震えて留とどまる。

こいつ此奴こいつ不見手みえんて、と笹の葉の旗を立てて、日本橋あたり引廻ひまわしの、

陽炎揺るる影法師。

ひなたに蒸れる酢の臭に、葉も花片も萎えんとす。

引切の無い人通りも、およそ途中で立停つて、芸者の形を

見物するのは、鰻屋の前に脂気を嗅ぐ、奥州のお婆さんと同じ

恥辱だ、という心得から、誰も知らぬ顔で行違う。……もつとも

対手は小児である。

世渡やここに一人、飴屋の親仁は変な顔。叱言を、と思う類

辺を窺めて、もぐもぐと吞込んで黙言の、眉毛をもじや。若

い妓は氣の毒なり、小児たちは常得意。内心痛し、頗る痒しで、

皺だらけの手の甲を顚の下で摺つてござつた。

「川柳にも有るがね、（黙然と辻斬を見る石地藏。）さね。……

俺も弱つたよ。……近い処が、西河岸にござらつしやる、ね、あ

の、目の前であつたらうずりや、お地藏様はどうお扱いなさりよ
うかと、つくづく思つていましたよ、はい。……」

と後で人にそう云つた。またこの飴屋が、喇叭らっぱも吹かず、太鼓
をトンとも鳴らさぬかわりに、いつでも広告の比羅びらがわり、赤い
涎よだれ掛かけをしていゝる名代の菩薩ぼさつでなお可笑おかしい。

「笹や、笹々笹や笹、笹を買わんせ煤竹すすだけを——」

大高うまい、と今呼ばれた、件くだんの（鼬うたみめよし）が、笹をわざ
と、島田の上で、ばさばさと振りながら、足踏うたをして唱出うたした。
声を揃えて、手拍子で、

「笹を買わんせ煤竹を——」

ここで三音諧張きざ上げる。気障きざな調子で、

「大高源吾は橋の上ええ。」

檜木笠

三

「あら、お止しなさいよ、そんな唄。大^{だい}嫌^{きら}だわ。二階に寝ている姉さんが、病気で疝^{かん}が立つておいでだから、直ぐに聞きつけて、沢山^{たんと}加減を悪くするからね……ほんとうに嫌^{きら}なのよ。」

と若い妓^こは頭^{かぶり}を振るように左右を顧^みる。

「何が嫌^{きら}だい。」

「生意氣云うない。」

「^{ざま}状あ！ 女郎奴^め、^{てめえ}手前に嫌われて幸^{さいわい}だ。好かれて堪^{たま}るかいは。」
と笹を持ったのが、ぐいとその棹^{さお}を小脇に引くと、^{やあ}呀、斜に構えて前に廻った。

「嘘よ、お前さんじゃないのよ。その大高源吾とか云う、ずんぐりむつくりした人がね、笹を担いで浪花節^{なにわぶし}で步行^{ある}いては、大事な土地^{けが}が汚れるって。……橋は台なし、堪らないって、姉さんが云うんだわ。」

「知ってらい！」

と矮小が、ペロペロと舌を吐いて、

「不断、そう云^いやがるとよ、可^{いい}いか。手前^{とこ}ン許^{きちが}の狂女^{がい}がな、不

断そう云やがる事を知ってるから、手前てめえだつて尋常ただは通さないんだぜ。僕がな、形を窶やつしてよ、八百屋の小兒こどもに生れてよ、間者まにやになつて知ってるんだ。行軍将棊こうぐんしょうぎでもな、間者は豪えらいぜ、伴ばん

内阿魔いあま。」

商あきゆうど人ど

人はもとより、親が会社員にしろ、巡查にしろ、田舎の小悴こせがれでないものが、娘を苛いじめる仔細しさいはない。故あるかな、スパルタ擬もどきの少年等が、武士道に対する義憤なのである。

「忠臣、義士の罰が当らあ。」

「勿論よ。」

ひよろ竹と云われる瘠やせたのが、きいきいと軋きしむ声で、

「疾とうに罰が当つて、気の違つた奴なんか構わねえや。……此奴に

笹葉を頂かせろ。」

「噫をさしたれ。」

と、含羞んだ若い妓の、揃った目鼻の真中を狙つて——お
 蝮の虫が、もじやもじやもじや。

「へつくしよ。」と思わず唐突に陽炎を吸つて咽せた……飴屋
 の地藏は堪らなそうに鼻を撫でる。当の狙われた若い妓は、はッ
 と顔を背けたので、笹葉は片頬外れに肩へ這つて、手を払つて、
 持ったのを引払われて、飴の鳥はくしやんと潰れる。

「可哀相に、鶯を。」

とつい、衣紋が摺つて、白い襟。髪艶やかに中腰になった処を、
 発奮で一打、ト颯と鳥の翼の影、笹を挙げて引被る。

「ああ、少時しばらく。」

慌あわただしく声を掛けて、白足袋のしよぼけた草鞋わらじで、つかつかと寄

ろうとした、が、ふと足を曳ひいて、手甲掛けた手を差伸ばして、

「もしもし、大高氏うじ、暫時しばらく、大高氏。」と大風おおふうに声を掛けて

呼んだのは、小笠おがさを目深まぶかに、墨こくもの法衣きやはんばき。脚絆きゃはん穿きで、むかし愧かいら

儡いし師しと云った、被蓋きせふたの箱こぶを頸くびに掛けて、胸むねへ着けた、扮装いでたち

は仔細しさいらしいが、山の手の台所でも、よく見掛ける、所化しよけか、勧

行ゆか、まやかしか、風体ふうてい怪あやしげなる鉢坊主はちぼうず。

形かたちだけでも世棄人よすてびと、それでこそ、見得も外聞しやれも洒落しやれも構かまわず、

変徹へんてつも無く、途中で芸者げいしやを見ていらるる。——斜しやめに向むかう側がはの土

蔵くらの白壁しろかきに、へまむし、と炭団たどんの欠かけで楽書たたくをしたごとくたたくで、

熟じつと先刻さつきから見詰めていた。

小笠のふちに、手を掛けながら、

「源吾どの、ちよつと、これへ。……」

四

「そりや、（かな手本。）の御連中、あすこで呼んでいさつしやる。」

潮を踏んだ飴屋は老功。赤い涎よだれ掛かけを荷の正面へ出して、小
児はけくちの捌は口へ水を向ける。

「僕の事かい。」

と猶たぬら予いながら、笹たけざおツ葉の竹棹たけざおを、素直まっすぐに支ついた下に、鬢びんのほつれに手を当てて、おくれを搔かいた若い妓の姿は、願ねがいの糸を掛けた状さまに、七夕らしく美しい。

「お前様方でのうて、忠臣蔵がどこに有るかな。」と飴屋うなずは頷あづえように頷あづ杖を支さいて言う。

「一所においでよ、皆みんな。」

「おい。」

義士にんずの人数、六人の同勢は、羽根のように、ぽんぽんと発奮はずんで出て行く。

坊主は、笠ながら会釈して、

「貴殿は大高源吾どの？」

笹を持ったのが、（気を付け。）の姿勢になった。

「ええ、そうです。」

「こなたはな。」

見向かれた、ひよろ竹は、なぜか、ごしごしと天窓あたまを搔いた。

「僕は赤鞆あかさやの安兵衛てんです。」

「ははあ、堀部氏うじでおいでなさる。」

「千崎弥五郎だよ。」

矮小ちびは唇を、もぐもぐと遣やる。

「成程——その他いずれもお揃いでありますな。」

と、六人をずらりと見渡し、

「いや、これは誰方どなたも、はじめまして御意を得ます。」

ここで更あらためてまた慇懃いんぎんに挨拶あいさつした。小児等はきよとんとする。

中に大高源吾が、笠を覗のぞきこ込んで、前かがへ屈かがみ、

「坊さんは誰なんです。」

「伶俐りこうだな。何、天晴あつぱれ御会釈。いかさま、御姓名を承りますに、

こなたから先へ氏素姓を申上げぬという作法はありませんだ。

しかし御覧の通り、木の端はし同然のものでありますので、別に名告なの

りますほどの苗字とでもありません。愚僧は泉岳寺の味噌摺坊主みそすり

でござる。」

事実元禄義士扱ていい。で、言葉も時代に、鄭重ていちょうに、生真面目きまじめ

な応あいしらい対。小児等は気を取られて、この味噌摺坊主に、笑うこ

とも忘れて浮りうつかでいる。

「ええ、さて各自おのおのには、すでに御本望をお遂げなされたのでありまするか。それとも、また今夜こよいにも吉良邸へお討入りに相成りますかな。」

小児等は同じように顔を合せて、猿ざるまなこ眼まなこに、猫の目、上り目、下り目、団栗目どんぐりめ、いろいろなのがぱちくるのみ。

自ら名告なのつた味噌摺坊主は、手甲の手の腕組して、

「ははあ、御思考最中と見えますな。いや、何にいたせ、貴方あなたがたを義士の御連中とお見掛け申して、ちと折入つて、お話し申したい事があります。余り端近。な、ここは余り端近で、それぞれ通りがかりの人目も多い。もそつとこれへ、ちよつと向うへ。あ

の四角よっかどの処まで、手前と御同道が願いたい。

決して悪いことではありません。さあさあ誰方も。」

と云うより早く、すたすたと通りの方へ。

松屋あたりの、人ひと通とどおり。どっちが（端近。）なのかそれさえ

分らず、小児等は魅せられたようになって、ぞろぞろと後に続く。

電車が来る、と物をも言わず、味噌摺坊主は飛とび乗のりに翻然ひらり、と

乗った。で、その小笠をかなぐって脱いだ時は、早や乗合の中に

紛れたのである。——白い火が飛ぶ上野行。——文明の利器もこ

う使うと、魔術よりも重宝である。

角店の硝子窓がらすの前に、六個むつつの影が、ぼやりとして、中には総毛

立って、震えたのがあった。

銀貨入

五

地に碎けた飴の鳥の鶯には、どこかの手飼の、緋の首玉した小
猫が、ちろちろと鐸すずを鳴らして搦からんで転戯じやれる……

若い妓この、仔細しさいなくそこを離れたのは云うまでもない。

と自おのから肩の嬌態しな、引合せた袖をふらふらと、台所穿ばきをはずま
せながら、傍見わきみらしく顔を横にして、小走りに駆出したが、帰
がけの四辻を、河岸の方へ突切ろうとする角に、自働電話と、一ひ

棟火とむねの番小屋とが並んでいる。……

ものも、こう、新旧相競うと、至つて対照が妙で、どうやら辻番附の東西の大関とでも言いそうに見える。電話の方が（塗立注意。）などと来るといよいよ日当りに新味を發揮するが、油障子に（火の番。）と書いたお定りの屋台は、昼行燈あんどろと云う形。屋形船が化けて出て河童かっぱが住居すまう風情がある。註に及ばず、昼間は人氣ひとけ勢はいもあるのではない。

その両方あわいの間の、もの蔭に小隠れて、意氣人ひとがら品ちりめんな黒縮緬ちりめん、三ツ紋の羽織なでがたを撫なで肩かたに、縞大島しまの二枚小袖かき、襲かさねて着てもすらりとした、瘦やせぎすで脊せいの高い。油氣あぶらの無い洗髪かんざし。簪つつこの突込み加減かも、じれつたいを知つた風。一目にそれしやとは見えながら、

衣紋つき端正しやんとして、薄い胸に品のある、二十七八の婀娜あだなのが、玉のような頸うなじを伸して、瞳を優しく横顔で、熟じつと飴屋の方を凝視みつめたのである。

「あら、清葉姉きよはさん。」

と可懐なつかしそうに呼掛けて、若い妓はバツタリ留つた。

「お千世ちせさん。」

と柳の眉の、面正おもてしく、見迎えてちよつと立直る。片手も細りほっそ、色傘を重そうに支ついて、片手に白塩瀬しろしおぜに翁格子おきなごうし、薄紫の裏の着いた、銀貨入を持っていた。

若い妓はお千世と言う、それは稲葉家いなばやの抱妓かかえである。

「お出掛け、姉さん。どちらへか。」

「いいえ、^{かえり}帰途なの。ちよつと浅草へお参りをしたんです。——
今ね、通りがかりに見ただけけれど、お前さん、飛んだ目にお逢
いだったわね。」

「ええ。」

「でも、^よ可かったこと。私ね、見ていてどうしようかしら、と思
つたのよ。——お千世さん。」

「は、」

と顔を上げて、甘えたそうに、ぴつたり寄る。

「そして……あの坊さんは知った方。何なの、内へ^{かんげ}勸化にでも来
たことのある人なの。」

「いいえ、ちつとも知りませんわ。」

「そう。」

「笠を被かぶつておいでなすつて、顔はちつとも見えなかつたんですもの……でも、そうでなくツても、まるツきり、心当りはありませんよ。」

「そうね、それはそうだともね。」

清葉はなぜか落着いて頷うなずいた。

若い妓は、気が入つて口早に、せいせいと呼吸いきをしながら、

「でもね、私、いじめツ兎こを、皆引張みんなつて電車通りの方へ行つて下すつた後姿を見て拝んだんですよ。私お地藏様かと思いました。……ええ。」

六

お千世は、ぱつちりとした目を瞬いて、

「飴屋の小父さんは、鶯が壊れたから、代りを拵こぎえて、そして持つて行ゆけッて云ったんですよ。……私、それどころじゃないんですもの。帰つて姉さんにそう云つて、あの西河岸のお地藏様へお参りに行くか、でなけりや、直ぐ、あの、お仏壇へお燈明をあけて拝みましょうと思つて駆出して来た処なんですわ。」

「まあ、お千世さん。お前さん、大な態度おおきななりをして飴なのかね。私は蜜豆屋かと思つたよ。」

と細ほっそりした頬ほに靨えくぼを見せる、笑顔のそれさえ、おっとりして品

が可い。この姉さんは、渾名あだなを令夫人と云う……十六七、二十はたちの頃までは、同じ心で、令嬢と云った。あえて極きまった旦那にんが一人、おとつさんが附いている、その意味を諷するのではない。その間のしようそくは別として、しかき風采たを称たえたのである。

序ついでにもう一つ通名とおりながあつて、それは横笛である。曰く、清葉

曰く令夫人で可いものを、誰たが詮索せんさくに及んだか、その住居すまいなる檜ひものちよう

物町ものがきこに、磨みがきこ込んだ格子戸こしがらに、門札打かどつた本姓ほんせいが（滝口）は

お誂あつらえで。むかし読本よみほんのいわゆる（名詮みやうせん自称じしやう）に似た。こ

の人、日本橋つまに棲すまを取つて、表看板うしろの諸芸しよぎん一ひと通と恥ちかしからず

心得こころえた中なにも、下方したかたに妙たぎを得て、就な中なか、笛ふえは名譽なごの名取なとりで

あるから。

「あら……清葉姉さん酷いこと、何ぼ私かつて蜜豆を。立つて、往來で。」

「ほほほ、申過しました、御免なさいよ。いえね、実はね、……小児衆が、通せん坊をして、わやわや囃はやしているから、気になつてね、密そつと様子を見て案じていたの。……あの、もつとこつちへお寄んなさいよ。」

と、令夫人は仲通りの前後あとさきを、芝居気の無い娘じみたみまわし方で、件くだんの番小屋の羽目を、奥の方へ誘い入れつつ、

「別にね、お前さんと話をして見られて悪い事は無いんだけれど、人が通つて極きまりが悪いから。」

で、忍んだ梅ヶ香、ほんのりとするおもかけ倂……勤めする身の、夏

は日向、冬は日陰へ路を譲つて、真中まんなかを歩行あるかぬことと、不断心得た女である。

「もう、あれだわ。誰か竹棹でお前さんの鬘まげを打ぶとうとした時は、どうしようかと思つてねえ。くずしたお宝がちつと有るから、駆出して、あの中へ撒まこうかしら、とすんでの事……」

為に銀貨入を手にしたので。

「口で留めたつて、宥なだめたつて、云うことを利くんじやなし、喧嘩するにも先方さきは小児だし、と云う中うちにも、私は意気地が無くつて、そんな気にはなれないし、お宝を撒まくに限る。あんな児こに限つて、そりやきつと夢中になつて、お前さんの事なんざ落おっことして、お宝を拾うから、とそのお前さん謀はかりごと、計略？」

と打微笑^{ほほえ}み、

「そりや、お千世さん、可いけれど、私にや手が出せなかつた。意気地が無くつて自分ながら口惜^{くやし}いのよ。……悪い事をするんじやなし、誰に遠慮が、と思つても、何だかねえ、派手過ぎたようで差出たようで、ぱつとして、ただ恥しくつて、どうにも駆出せなかつたの。」

まあ、極りの悪い。……銀貨入を握つた手が、しつとり汗になりました。」

とその塩瀬より白い指に、汗にはあらず、紅宝^{ルビイ}玉の指環^{ゆびわ}。点滴^{したた}るごとき情^{なさけ}の光を、薄紫の裏に包んだ、内気な人の可懐^{なつか}しさ。

七

清葉は、きれの長い清すずしい目で、その銀貨入の紫を覗のぞいて見つ
つ、

「お前さんの姉さんに聞かせたら、さぞ気が利かないってお笑い
だろう。」

「いいえ、姉さん。」

傍わきめ目も触ふらず、清葉を凝視みつめて聞いたお千世が、呼吸いきが支つかえた
ようにこう云った。

「でもね、娑婆しゃば気げだの、洒落しゃれだの、見得だの、なんにもそんな
態わざとでなしに、しようと思つて、直ぐあの中へ、頭からお宝を撒

ける人は、まあ、沢山なんとほかには無い。——お孝ごうさんばかりなんだよ。」

稲葉家の主あるじ、お千世の姉さん、暮から煩わづつて引ひいている。が、

錦にしき絵のお孝とて、人の知しつた、素足すそを伊達だてな婦おんなである。

「折角お前さん、可いい姉さんを持つて幸しあ福あだったのに、」

と清葉は、もの寂さびしそうに、

「困るわねえ、病氣びやうきをして。」

「ええ。」

お千世は引ひ入れられたように返事こたへして、二人の目めの熟じつと合あう時、

自働電話自動電話に備そなえつけ付けの番号帳ばんごうちやうがパタリと鳴なる。……前まへに繰くつて見

たものが粗ぞんざい雑ざいに置おいたらしい、紐ひもが摺ずつて落おちた音ね。

ちよつと目を遣つて見返しながら、

「そして、どんななの、やっぱりお孝さんは相あい不かわ変らず？」

「ええ、困るのよ。二日に一度、三日に一度ぐらい、ちよつと気がつくんですけれど、直すぐに夢のようになってしまいますわ。」

「そうだつてねえ。」

「時々、嬰あかんぼ児ごのようなことなんか。今しがたも、ぶつきり飴と

鳥とりが欲しいいつて、そう云つて、………」

と莞にっこり爾りするのが、涙ぐむより果敢はかなく見られる。

「ああ、それで飴を買いに。」

と云いかけて、清葉は何か思出した面おも色もちして、

「お千世さん、今の、あの、味方をして下すつた坊さんね、………」

「ええ。」

「お前さん誰かに肖にていたとは思わなくって、」

「肖でいて。誰に、ええ？……姉さん。」

「ちよつとあの……それだと、お前さんも、お孝さんも、私も知つている方なんだがね。」

「そうでしょう、ですから、私もきつとそうでしょうと思ひましたわ。」

「まあ、やっぱり、そうかねえ。気の迷いじやなかつたかねえ。」

と清葉は半ば独ひとりごと言ことに云うと、色傘を上へ取つて身繕まいをす

る状さまして、も一度あとを見送りそんな氣構きくまえに、さらさらと二ふた一か

返えし、棲すまを返して、火の番の羽目を出たが、入いれ交かわつて、前へ通

そうとするお千世と、向を変えてまた立留まった。時も過ぎたり、いかにしても、今はその影も見えないことを心付いたらしいのである。

「では、あの、姉さんはお顔を見たことがあるんですか。」

「私は、ここで遠いもの。顔なんてどうして? ……お前さんは見たんじゃない? もつとも笠を被^{かぶ}つていなすつたけれどもさ。」

お千世はしきりに瞬した。

「あら、姉さん、肖ていたつて、西河岸のお地藏様じゃないんですか。私は直接^{じか}に見たことはありませんけれど、……でしょうと思いましたが。で、なくつて、誰に肖ていましたの、姉さん。」

「まあ、お千世さん、肖たつてのはその事なの。……じゃ、やつ

ぱり、気の迷だったんだよ。」とうっかりしたように色傘を支く。
「いいえ、気の迷いじゃありません。私はまったく。」
「そうね、……折があつたら、お千世さん、一所におまいりをし
ようねえ。」

手に手

八

「成程、蜜豆屋じゃなかつたわね。」

飴屋が名代の涎よだれかけ掛かけを新しく見ながら、清葉は若い妓こと一所

に、お染久松がちよつと戸迷いとまどをしたという姿で、火の番の羽目を出て、も一度仲通へ。どつちの家へも帰らないで、——西河岸の方へ連立ったのである。

けれども、いずれそのうち、と云つた、地藏様へ参詣さんけいをしたのではない。そこに、小紅屋こべにやと云う苺いちごが甘うまそうな水菓子屋がある。二人は並んでその店頭みせさき。帳場に横向きになつて、拇指おやゆびの腹で、ぱらぱらと帳面を繰つていた、肥ふとつた、が効かい性しょうらしい、円まるま鬚げの女房が、莞爾にっこりむか目迎むかえたは馴染なじみらしい。

「いらつしやいまし、……唯ただいま今お坊ちゃんがお見えになりましたよ。」

「おや、そうですか、小婢ちびがついて。」

と小さな袱紗ふくさづつみをちよつと口へ、清葉は温容しとやかなものである。

「いいえ、乳母ばあやさんに負おんぶをなすつて、林檎りんごを両個ふたつ、両手へ。」

と女房は正面へ居直つて、膝にちやんと手を支ついて、わざと目を円くしながら、円々ちい括くくりあご頤うなずで、頷うなずくように襟おきを圧おさえて、

「懐中ふところへ一つ、へい。」

と恍とぼけた顔。この大業おおぎようなのが可笑おかしいとて、店に突立つたつた出額おでこの小僧は、お千世の方を向いて、くすりと遣る。

女房は念入りにも一つ頷うなずき、

「お土産みやげの先廻り。……莞爾にこにこ々々お帰りでございました。ですからもう今日こんにち日は、お持ちになるに及びません。ほんとお坊ちや

んは、水菓子がお好きでいらつしやいます事！

お宅様の直じき御近所に、立派な店がございませうのに、難ありがた有たい
事に手前どもが御ごひいき鼻ひき眞まで。……小いお娘あねえさま様もその御縁で、学

校のお帰りなんぞに、（小母さんお水ひやを一杯。）なんて、お寄り

なすつて下さいますし、土地第一の貴あなた女がた方に御心安く願います

ので、房州出のこんな田舎ものも、実まことにねえ、町内で幅が利きま

すんでございますよ。はい。」

「飛んでもない、女房おかみさん、何ですか、小娘こどもまでが、そんなに心

安だてを申しますか、御迷惑でございませうこと。」

「勿体ない、お蔭さまで人気を立てて大景氣でございませうよ。」

「お世辞が可いのねえ、お千世さん。」

「はあ、ほんとうに評判よ。」

「いいえ、滅相な、お世辞ではございませんが、貴女方に誉められます処を、亡くなった亭主やどに聞かしてやりとうございます。そういたしましたら、生きてるうち邪慳じゃけんにしましたのをさぞ後悔することでございます。しかしまた未練が出て、化けてでも出ると大変でございますね。」

お千世が襦袢じゆばんの袖口で口をおさ圧えて、一昨年おとしの冬なくなつたその亭主の、いささか訛なまりのあるこわいろ仮声を使う。

「松蔵どんやあ。」

「わい。」

と叫んで、飛上ると、蜜柑みかんの空箱からばこを見事に一個ひとつ、がた、がた

んと引転覆ひっくりかえして、松小僧は帳場口へどんと退さがつて、

「女房おかみさん！」

「ああ、驚いた。何だい。」

不意打に吃驚びっくりして、女房かみさんもぬツと立つて、

「何だねえ、お前、大袈裟おおげさな。」と立身たちみに頭から叱られて、山姥やまばに逢つたように、くしゃくしゃと窘すくんで、松小僧は土間へ蹲しゃがむ。

「見たか、弱虫。」

お千世は白い肱ひじをちらりと見せ、細い二の腕を軽く叩いて、

「可愛い気味さ。」

「何だね、お前さん。」と、余所よその抱妓かかえでも、そこは姐ねえさん、他

人に気兼で、たしなめる。

「だって、いつも人魂の土蔵の処じや、暗がりて私を威すんですもの。」

九

「まあ、貴女方、どうぞ、まあ。」

女房は立かみさんった序ついでに、小僧にも吩い附いけないで、自分で蒲団ふとんを持出

して店端みせばなの縁台に——夏は氷を売る早手廻しの緋毛氈ひもうせん——余

り新しくはないのであるが、向う側が三間ばかり、忍返しほこりの附いた黒板塀つやなのと、果物の艶かぶを被かぶせたので、埃ほこりも見えず綺麗である。

「いいえ、すぐにお暇いとまを。——お千世さん、何が可よかろうねえ。」

「済みません、姉さん。」

とお千世は瞬きで礼を言う。

清葉はいまし方、火の番小屋から、直ぐに分れて帰ろうとして、その銀貨入を、それごとお千世の帯の間へ挟みつつ云うのに——

「あの、極りが悪いんですがね、お前さんのために使おうと思つたのを、使わないで済んだんです。お金子かねだと思わないで、お千世さん。」

「まあ、なぜ？」

「小児こどもに苛いらめられたお見舞に。」

お千世は、生際の濃い上へ、俳優やくしやがあいびきを掛けたように、

その紫の裏を頂いたが、手へ返して、清葉のその手に、すが縋るがごとく顔を仰いで、

「姉さん、このお宝で、私をお座敷へ呼んで下さいな。……ちつとも私、この節かかって来ないんですもの。」

土地の故参で年上でも、はなあやめ花菖蒲、かきつばた燕子花、同じ流れの色である。……生意気盛りが、我慢も意地も無いまでに、身を投げ掛けたは、よくせき、と清葉はしみじみあわれ可哀に思った。

「菊家へ行ゆこうよ、私がお客で。大したお大だいじん尽だわね、お小遣もちあつかを持扱もちあつかって。」

とわざと銀貨入を帯に納めて、

「途中で我ままな馴染に逢って無理に連れられたとそうお云いな。」

目と鼻の前さきだつて、一旦家へ帰うちつてからだど、河岸の鮎あしは立食しても、座敷にはきちょうめんな、極きまりの堅いお孝さん。お化粧だの、着換だので、ついそのままではお出しであるまい。……私も五時からお約束が一つある。早いが可いわね。ちよつとこの自働電話で、内へ電話をお掛けなさい。一所に行つて御飯を食べよう。

「姉さん。」

と、いそいそしながら、果敢はかなそうに、

「もうね、内に電話は無いんですよ。」

清葉は思いがけず疑いの目を睜みはつて、

「どうして、ねえ。」

「お孝姉さんはあんなでしょう。私は滅多に御座敷はありませんし、あの……」

とお千世は言淀んだが、

「鑑札のお代だつて余計なものなのに、電話なんか無駄だからつて、それで、譲つてしまつたんでしよう。一昨日おとといから、内にはボンボン時計も無いんでしよう。ですから、チンリンと云う音もしないで、寂ひっそり寞ぽかんとしているんですわ。

方々、お茶屋さんだの、待合さんへ、そう云つておいでつて云うんでしよう。——私はずツと廻りましたの。

姉さん。——はじめてお弘めに連れられました時よりか、私極りが悪かつたんです。……だつて、ただ、（ああそうですか御苦

労様。）ってお言いなさる許とこは可いんですけれども、中にはねえ、
 （どうして。）って。……いいえ、冷評ひやかすんじゃないやありません、深
 切うちで聞いて下さるお家では、（私がちつとも出ませんから。）
 そう言わなけりやありませんもの。しよう事なしに、笑つて云
 うにや云いましたが、死ぬほど辛うござんしたわ。」
 と指を環にしつ、引ひきなび靡なびけつ。

十

寐起ねおきの顔にも、鬢びんの乱れは人に見せない身み躰たなみ。他人たにんの纏もつれ
 毛も気になるか、一つ座敷の年下など、小蔭で撫着けてやる外に

は、客はもとより、からだ身体に手なんぞ、触った事の無い清葉が、この時は、しかと頸筋くびすじでも抱きたそうに、お千世の肩に手を掛けた。

「まあ、お孝さんが廻れと云って？」

「いいえ。」

と驚いたように頭かぶりを振って、

「私の姉さんが、そんな事！……病氣から以来こつち、内の世話をしている叔母さんのいいつけなんですよ。」

稲葉家のお孝が、そうした容体になってから、叔母とは云うが血筋ではない。父親は台湾とやら所在分らず、一人有つたが、それも亡くなった叔父の女房で、こんにやくしま蒟蒻島で油揚の手曳てびきをしてい

た。余り評判のよくない阿婆おばあが、台所だいどころから跨またぎこ込んで、帳面を控えて切盛する。其奴そいつの間夫まぶだか、田楽でんがくだか、頤髯あごひげの凄まじい赤ら顔の五十男が、時々長火鉢の前に大胡坐おおあぐらで、右の叔母さんと対さしむかい向むかひになると、茶棚ちやわ傍わきの柱の下に、櫛卷くしまきの姉さんが、棒ぼうじ縞まのおさすり着もの、黒縹くろしゆす子の腹合せで、襟へ突込んだ懐手、婀娜あだにしよんぼりと坐っているのが毎度と聞く。可哀かわいそうに、お千世は御飯炊から拭掃除、阿婆が寢酒の酌までして、ちびりちびりと苛いじめられる上、収入みいりと云つては自分一人の足りない勝で、すぐにお孝の病氣の手当に差響くのに気を揉もんで、言い憎かろう。我が口から、

「若干金いくくらでも。」と待合の女中ささやに囁く。

不思議な事は、禍わざわいだか、幸さいわいだか、お孝の妹分と聞いただけで、その向きの客人は一目を置き、三舎を避けて、ただでも稲葉家では後あとあと日ひが、と敬遠すること、死せる孔明活ける仲ちゆうたつ達だつを走らすごとし。従つてちつとも出ない。その為に、阿婆の寝酒はなおあくどい。あわれがつて、最いと惜しがつて、住替を勧めても、

「私が出ますと姉さんが。」

とお孝を案じて辛抱する。その可愛さも知れている。それなのに、お千世に口の掛からない時は、宵から、これは何だ、と阿婆が茶の缶の鉞ブリキ力を、指で弾はじいて見せると云うまで、清葉は聞伝えているのであつた。

電話さえ無い始末、内証も僣しのばれる。……あの酒のみが、打ぶつき

切飴りあめ。それも欲しい時は火のつくばかり小児こどもになつて強請ねだるのに、買つて帰ればもう忘れて、袋を見ようともしないとか。病気が病気の事であるから、誰の顔の見さかえも有るまいが、それにしても大分だいぶんの無沙汰をした。……お千世のためには、内の様子も見て置きたい、と菊家へ連れようとした氣を替えて、清葉はお孝を見舞いに行くのに、鮎あなというのも狂乱の美人、附属つぎものの笹の氣が悪い。野暮な見立ても、萎しおるる人の、美しい露にもなれかすと、ここに水菓子を選んだのである。

小紅屋の女房もみで揉手をして、

「稲葉家さんへ。ええええ、直すぐに、お後から持たせまして。」

小僧がつてん合が点てんして、たちまち出額おでこに蛸たこ願ちまき卷まき。

ひきず
引摺るほどにその奴が着た、半纏はんてんの印に、稲穂いなほの円の着いたまるのも、それが有らぬか、お孝が以前の、派手を語つて果敢はかなく見えた。

二人は引返して、また、あの火の番の前へ出たが、約束事でも有るごとく、揃つて立停たちどまらなければならなかつたのは、一町たらず河岸寄りの向う側、稲葉家のそこが露地の中から、蜥蜴とかげのように、のろりと出て、ぬつと怪しげな影を地に這はわした、服装みなりはしよびたれ、薄汚れて、広袖どてらかと思う、袖口も綻ほころびて下つたが、巖がんじょう乗まづくりの、ずんと脊の高い、目深に頬ほお被かぶりした、草わらじ鞋穿ばきで、裾を端折らぬ、風体の変な男があつて、懐手で俯向うつむいて、こなたへのさのさと来掛つた、と見ると、ふと頬被かむりの裡うちの

目ばかり、……そこに立留まつた清葉たちを見るや否や、ばねで弾かれたかと思う、くるりと背後向^{うしろむき}。方角をかえて河岸通へ、しかもそのそと着流しのぐなりとした、角帯のずれた結^{むすびめ}目をしやくつて行く。

出て来た処が稲葉家の露地であるだけ、お孝に憑^ついたあやかしと思う可^い厭^やな影の、角の電信柱で、フツと消えるまで、二人は、ものをも言わず見送っていたのである。

露地の細路

昔と語り出づるほどでもない、殺された妾の怨恨で、血の流れた床下の土から青々とした竹が生える。筍の（力に非ず。）凄さを何にたとうべき。五位鷺飛んで星移り、当時は何某の家の土蔵になったが、切つても払つても妄執は消失せず、金網戸からまざまざと青竹が見透かさる。近所で（お竹蔵。）と呼んで恐をなす白壁が、町の表。小児も憚るか楽書の痕も無く、朦朧として暗夜にも白い。

時々人魂が顕れる。不思議や鬼火は、大きさも雀の形に紫陽花の色を染めて、ほとほと軒を伝う雨の雫の音を立てつつ、棟瓦を伝うと云うので。

小紅屋の奴やつこたいら、平の茶目が、わツ、と威おどかして飛出す、とお千世が
 云つたはその溝端。——稲葉家は真向うの細い露地。片側立だて四軒
 目で、一番の奥である。片側は角から取廻した三階建の大おおがまえ構くわ
 な待合の羽目で、その切れ目の稲葉家の格子向うに、小さな稲荷いなり
 の堂がある。傍わきに、総井戸を埋めたと云う、扇の芝ほど草の生え
 た空地くうちがあつて、見切みきりは隣町の奥の庭。黒板塀の忍返しで突当る。
 そこに紅梅の風情は無いが、姿見に映る、江一格えいちごうし子の柳ひともが一
と本。湯上りの横櫓は薄暗い露地を月夜にして、お孝の名はいつ
 も御神燈ごじんとうに、緑点滴したたるばかりであつた。けれども、ここの露地
 口と、分けて稲葉家のその住居すまいとに、少なからず、ものの陰気な
 風説うわさがある。

以前、仲之町の声妓で、お若と云った媚かしい中年増が、

新川の酒問屋に旦那が出来たため色を売るのは酷い法度の、その頃の廓には居られない義理になつて場所を替えた檜物町。

廓に馴れた吾妻下駄、かろころ左、棲を取つたのを、そのま

まぞろりと青畳に敷いて、起居に蹴出しの水色縮緬。伊達巻で

素足という芸者家の女房。むかし古石場の寄子ほど、芸者の数を

二階に抱えて、日本橋に芽生えの春。若菜家の盛を見せた。夏の

素膚の不断の紹明石、真白に透く膚とともに、汗もかかない帯

の間に、いつも千円束が透いて見える、と出入りの按摩が目

を剥いたのが、その新川の帳尻に、柳の葉の散込むのが秋風の立

つはじめ。金氣蕭条としてたちまち至る殺風景。やけでお若

は浮気をする。紐がつく、蔦つたが搦からむ、蜘蛛くもの巣が軒にかかる、且
 那は暴れる、お若は遁にげる。追掛おっかけ廻まわして殺すと云う。

手切話しに、家うちを分けて、間夫まぶをたてひく三度の勤めに、消え
 際がまた栄えた、おなじ屋号の御神燈を掛けたのが、すなわちこ
 の露地で、稲葉屋いんばの前ぜんがそれである。

お若と云うのは、一輪の冬牡丹ふゆぼたんを凧こがらしに咲かす間もなく、その家うち
 で煩わづらいについて、いわゆる労症らうしやうの、果はどつと寝て、枕も上らない
 ようになると、件くだんの間夫まぶの妹と称する、いずくんぞ知らん品川の
 女郎上り。女で食う色男を一度食わせたことのある、台の鯨くじらのく
 され縁ゆかりが、手扶てだすけの介抱たなと称いえて入り込んで、箆たんす笥ひきだしの抽斗ひきだしを明
 けたり出したり、引解ひきほどいたり、鉢はさみを入れたり。勝手に台所を搔か

廻きまわした挙句が、やれ、刺身が無いわ、飯が食われぬ、醤油が切れたわ、味噌が無いわで、皿小鉢を病人へ投打ち三昧さんまい、摺鉢すりばちの当り放題。

十二

お若の身は火消壺、螢ばかりに消え残った、可哀あわれに美しく凄すごい瞳に、自分のを直して着せた滝縞たきしまお召の寝々衣ねんねこを着た男と、
 … 不断じめのまだ残る、袱紗ふくさおび帯を、あろう事か、メ《し》める
 はまだしも、しやら解どけさして、四十歳宿場の遊女おいらんどの、紅べにい
 入友染りゆうぜんの長襦袢ながじゆばん。やっぱり、勝手に拝借ものを、垂たらり々と見

せた立膝で、長火鉢の前にさしむかいになつた形を、世に有るものとも思わなかつた、地獄の絵かと視めながら、涙の暗闇のみだれ髪、はらはらとかかる白い手の、搦んだ拳に俯伏せに、魂は枕を離れたのである。

が、姿は雨に、月の朧おぼろに、水髪の横櫛うなじ、頸白く、水色の蹴出し、蓮葉はすはに捌さばく裾すそに揺れて、蒼白あおしろく燃える中に、いつも素足の吾妻下駄。うしろ向になつて露地口を、カラカラと踏んで、五つばかり聞えてフツと消える。

も一度からからと響くと思うと、若菜家の格子のカタンと開く音。

極きまつて、同じ姿が、うしろ向きに露地口へ立って、すいと入る

と途中で消えて、あとは下駄の音ばかりして格子が鳴る。

勿論、開いたでもなければ、誰も居ない。……これを見たもの、聞いたもの。

やがて風説うわさも遠退とおのいて、若菜家は格子先のその空地に生える小お草ぐさに名をのみ留とどめたが、二階づくりの意気いきに出来て、ただの住居すまいには割わりに手広い。……ここで、一度待合まちあになつた処、開みせ店びらきの晩に、酔よつて裏二階から庇ひあわい合へ落ちて、黒塀くろべいの忍返しのへしにぶら下つて、半死半生に大怪我をした客があつて、すぐに寂れて、間もなく行方知れずそれは引越す。

一度、勤人の堅気が借りて、これは無事。ただし商館通いであつたが、旅順とやらの支店の方へ勤がえになつて、貸家札。

時に二割方家賃をあげた。近所では驚いた。差配の肚はらは大きかつた。

すぐに引越し蕎麦そばを大蒸籠おおせいろで配つたのが、微醉ほろよいのお孝であつた。……抱妓かかえが五人と分わけが二人、雛妓おしやくが二人、それと台所と婢ちびの同勢、蜀しよく山兀さんこつとして阿房宮、富士の霞に日の出いきおいの勢、紅いしちよ白粉おしろいが小溝あふに溢れて、羽目から友染がはみ出すばかり、芳よしちよ町うの前の住居ぜんすまいが、手狭となつて、ここに鏡台の月を移して、花の島田まとを纏めたものが。

三年にして現時の始末。

もつとも中頃、火取虫が赤いほど御神燈に羽たたきして、しきりに蛞蝓なめくじが敷居はを這う、と云う頃から、傍はたでは少なからず気に

したものの、年月過ぎたことでもあり、世間一体不景気なり、稲葉家などは揚りのいい方、取り立てて言出して、気にさせても詮ない事と、土地で故顔ふるがおのお茶屋の女中、仕上げて隠居分の箱屋なども、打出しては言わなかつた。

かえつて河岸の客などに、場所も所説いわれもよく知つて、——中には見たのが有ると云う——酒の座敷おどで威かし半分、

「歸りに摺違ぶちまうよ、露地口で。」

とまで打撒ぶちまけるものは有つても、勝気きがさ氣嵩きかの左棲、投遣りの酒機嫌。

「評判な人ね、あやかりたいよ。」

で、粹すいな音ね《ねじめ》と聞えた美声。

露地の細路……駒下駄で……

と得意の一節寂寞とする。——酔えば蒼くなる雪の面に、月が
さすように電燈の影が沈むや。

「肖然。」

と、知った同士が囁き合つて、威した客の方が悚然とする。：

：

露地の細路、……駒下駄で……

「お孝、それだけは堪忍しな。」

つむじ曲りが、娑婆気な、わざと好事な吾妻下駄、霜に寒
月の冴ゆる夜の更けて帰る千鳥足には、殊更に音を立てて、カラ
カラと板を踏む。

顔の見える時はまだしもである。

朽ちた露地板は氣前を見せて、お孝が懐ふところ中で敷直しても、飯め盛しもりさえ陣屋ぐらいは傾けると云うのに、芸者だものを、と口惜くやしがつても、狭い露地は広くならぬ。

車は通らず、雨傘も威勢よくポンと轆轤ろくろを開いたのでは、羽目へ当つて幅つたいので、湯の帰りにも半はんびらき開、春雨捌さばきの玉川

翳ざし。

美たおやめ人のこの姿は、浅草海苔のりと、洗髪と、お侠きやんと、婀娜あだと、

(飛んだり芻はねたり。)もちよつと交つて、江戸の名物の一つであるが、この露地ばかり蛇目傘じやのめの下の柳腰は、と行逢うものは身の毛を悚よだ立てて、鶯の声なまめの媚なまめいて濡れたのさえ、昼間も時ほととぎす鳥

の啼^なく音を怪む。

柳に銀の舞扇

十三

鐘さえ霞む日は闌^{たけなわ}に、眉を掠^{かす}める雲は無いが、薄^{うつつ}りとある陽^{かげろ}
 炎^うが、ちらりと幻を淡く染めると、露地を入りかけた清葉は、
 風説^{うわさ}の吾妻下駄と、擦違^{ぞつ}うように悚然とした。

清葉は實際、途中でも、座敷でも、廊下でも、茶屋の二階の上
 り下り、箱部屋などでも、ちようど、袖袂^{たもと}の往通いに、生きてい

た頃の幽霊と、擦違つて知つたのであるから。――

ここまで引添つたお千世は、家の首尾うちを見る為か、あるじもうけの心附けか、ものも言わないで、一足前さきへ、袖を振つて駆出した。格子の音はカラカラと高く奥から響いたけれども、幸に吾妻下駄の音ではなくて、色気も忘れて踏鳴らす台所穿ばきの大な跽音あしおと。それさえ頼母たのもしい気がするまで、溝板どふいたを辿たどれば斧の柄の朽ちるばかり、漫そぞろに露地が寂しいのである。

並んで四軒、稲葉家の隣家となりは目下空家いまで、あとの二軒も、珍しく芸者家ではない。

片側の待合のその羽目に、薄墨でぼかしたように、ふらふらと、一所あるに歩行あるいて附いて来る影法師。

清葉は例の包ましやかに、色傘を翳かざしていた。その影と分れたが、フト気になるので、そこで窄つぼめて、逆上のぼせるばかりの日射ひざしを除よけつつ、袖屏風そでびょうぶするごとく、怪あやしいと見た羽目の方へ、袱紗ふくさづつみを頬にかざして、徐しずかに通る棲すまはずれ、末濃すそごに藤の咲くかと見えつつ。

さて音訪おとずるる格子戸は、向うへ間を措おいて、そこへ行く手前が、下に出窓、二階が開いて、縁が見える。

「お孝さん。」

と無遠慮に心易く、それなり声を掛けるのには——二人の間は疎遠でないが——いずれも名取りの橋の袂、双方対ついの看板主、芸者同士の礼儀があるので。

ひとあし
 一歩とまつて、二階か、それとも出窓の内か、と熟と視めて、
 こう、仰いだ清葉の目に、色糸を颯と投げたか、とはらりと映つ
 て、稲妻のごとく瞳を射つつ沈んで輝く光があつた。

驚いた鬢のほつれに、うしろの羽目板で、ちらちらと一つ影が
 添つて、重つた蒼い影。

優しいながら、口を緊めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人
 の云う——若衆質の細面の眉を払つて、仰向いて見上げた
 二階の、天井裏へ、翻然と飛ぶのは、一面、銀の舞扇である。

十四

きらりと光ると、扇は沈んで影は消えた。

……が、またひるがえ翻つて颯さつと揚羽。輝く胡蝶こちようの翼一尺、閃ひらめく風に

柳を誘つて、白い光も青澄むまで塵ちりを払つた表二階。

露地も温室のような春の中に、そこに一人月のごとき美人や病む。

扇に描かいたは、何の花か、淡うすい絵具も冷たそうに、床の柱に映るのが見える。

落ちると、トンと幽かすかな音。あの力なさは足拍子でない。……畳すべにかなめにかになつた要の響。日ざしの白い静かさは、深山桜みやまざくらが散るようである。

障子を左右に開け放して、見透かされたるその座敷に、櫺れんじ子が

隠れの肩も見えず、欄干てすりにこぼるる裳もすそも見えぬ。

お孝はまさしく寝ているのである。

寝ながら、舞扇のお手玉して、千鳥に投げて遊ぶのであった。

「ああ、多日ながく逢わない……」

清葉は、また可懐なつかしさが身に染みた。……軒の柳の翠みどりも浅い、

霞のような簾すだれ一枚、じきそこに、と思うのが、気の狂った美人で

ある。……寝ながら扇を……

また飛ぶ扇、閃めく影、影に重る扉の影。

なぜか渾名あだなの（錦絵。）に、魂の通う不思議な友に、夢現うつつに相

見る気がして、清葉は軽く胸が轟く。

さてこう云うも咄嗟とっさの事。

直ぐに格子を音ずれかけたが、歩みも運ばないで、立淀んだ。清葉は途端に、内で、がみがみと喚く声を聞いたから。

「遅いじゃないかね。」

と云う、嗚がれた中に痰の交じった、冷飯に砂利を嚙む、心持の悪い声で、のつけに先ず一つくらわせた。

続いて、

「真昼間、……お尻を振廻して歩行いたって、誰も買手は有りはしないや。……鳶、鳶、」

と茶色な歯、尖った口も見えるところと、

「鳶につつかれるくらいが落なんだよ。どこ、何、お茶、お茶、どこへお茶を買って来、」

とちよつと途絶える。

お千世は飴を買つたのに。

「何だ、飴だえ。私はまたお前さんの身のものは、売買うりかいともにお茶だと思つた。……そう飴を、お茶うけに、へへん、」

と笑い上げたは、煙草たばこを吹いたぞ。

「やつぱりお茶に縁が有らあね、……世間じやお天道様と米の飯は附いて廻ると云うけれど、お前さんにや、貰もらいみず水とお茶がついて廻るんだ。お茶の水は本郷の名所だつけ。日本橋にや要らないもんだ。

ええ、姉さんのだ、嘘をお吐き。……いいえ、姉さんがまた吩咐いっけたつて、口ばかりさ、直ぐに忘れて、きよとんとしている事

は知ってるじゃないか。そして、食べさしちや悪いんだ。狂女きちがいに食ものツてね、むしやむしや食散らかされて堪たまるものかな。

食むくむべると水膨むくむんだよ。……あの上水膨むくまれちや、御当人より傍はたのものむくむが助からないよ。人が乾ほしころ殺しでもするように、陰へ廻むつちや出過ぎたがる。姉さんもまた、人間きの悪いほど、何だかだつて食べたがる。精々何にも当飼あてがわないで、咽喉のど腹を乾しとかないと、この上また何かの始末でもさせられるようじやどうすると思うんだ。―

清葉は睫毛まつげに露を押えて、二階の陽炎の光るのを見た。――扇は澄まして舞うのである。

十五

清葉は格子へ音訪れ兼ねた。

自分と露地口まで連立つて、一息前へ駆戻つたお千世を捉えて、
 面まのあたり前喚くのは、風説うわさに聞いたと違いない、茶の缶たたを敲く叔母
 であろう。

悪戯いたずら児ごっこの悪関係こたわりから、火の番の立話、小紅屋へ寄つたまで、

ちよつと時間が取れている。昼間近所へ振売だ、と云う。そんな
 お尻は鳶つづの突つくが落だ、と云う。お茶と水とは附いて廻る、駿するが
 河台だいに水車みずぐるまが架かつたか、と云う。

お千世さんは私が一所にここへ来たことを云つたのだらうか。

……言つて、そして聞えよがしに、悪体を吐くとすると、私に喧嘩を売るのはかしら。何の怨みも無いものが、煩う人の見舞に来たのに、いかに分らずやの叔母だと云つて、まさかそうした事ではあるまい。露地から急いで、……あのお千世さんが心づかい、台所から長火鉢、二階を股に掛けて、眼張つている、ものがもの。姉さんは姉さんゆえ、客に粗末の無いように、と先触れに駆込んだ処を、頭から喚き立てて、あの妓が呼吸を吐いて、口を利く間も措かず、立続けて饒舌るらしい。

それにしても、汚い口から出過ぎた悪体。お千世も同じ、芸者はお互い。筆がしらでも中軸なかじくでも一味についた連名の、昼鳶がお尻を突く、駿河台の水車、水からくりの姉さんが、ここにも一

人と、飛込もうか。

それには用意がなければならず、覚悟もしないじや出来まいが、自分へ面つらあて当なら破れかぶれ。お千世へだけの事だったら、陰でほころび綻を縫うまで、と内気な女が思直す。……

またその時、異おつう悪黙りに黙ってしまったて、ふと手の着けられぬまで、格子の中が寂ひっそり寞して、薄気味の悪いほど静まった。

これぞ、お千世の客が来て、門かどに近いのを、やっと囁ささやき得た事をうなず頷かせる。

「ええ。」

咳しわぶきを優しくして、清葉が出窓際の柳の葉の下を、格子へ抜けよ
うとする、とあたかもその時。

はらりと音して、寝ながら投げた扇が逸れたか、欄干を颯と掠めて、蒔絵の波がしら立つごとく、浅翠の葉に掛つて、月かと思ふ影が揺ぐと、清葉の雪のような頬を照らす。……と思わず、受けたは袱紗の手。我知らず色傘を地に落して、その袖をはつと掛けて、斜めに丁と胸に当てた。

清葉は前刻から見詰めた扇子で、お孝の魂が二階から抜けて落ちたように、気を取られて、驚いて、抱取る思いがしたのである。潜つて流れた扇子の余波か、風も無いのにさらさらと靡く、青柳の糸の纏れに誘われた風情して、二階にすらりと女の姿。

お孝は寢床を出た扱帯。寛い衣紋を迂るよう、一枚小袖の黒繻子の、黒いに目立つ襟白粉、薄いが顔にも化粧した……何

の心ゆかしやら——よう似合うのに、朋輩が見たくても、松の内
でないで見られなかった——潰島田の艶つやは失せぬが、鬢つむぎのほつれ
は是非も無い。

生際曇る、柳の葉越、色は抜けるほど白いのが、浅黄に銀ぬの刺いとり
繡いとりで、これが伊達の、渦巻と見せた白い蛇の半襟で、幽かすかに宿す
影あおが蒼あおい。

十六

と……思ったほどは寔やつれも見えぬ。

病気のために失心して、娑婆も、苦勞も忘れたか、不断年より

長^ふけた女が、かえつて實際より三つ四つも少ないくらい、ついに
 見ぬ、薄化粧で、……分けて取乱した心から、何か気紛れに手近
 にあつたを着散したろう、……座敷で、お千世がいつも着る、紅
 と浅黄と段^{だんぞめ}染の麻の葉鹿^かの子の長襦袢を、寝衣^{ねまき}の下に棲浅く、
 ぞろりと着たのは、——かねて人が風説^{うわさ}して、氣象を較べて不思
 議だ、と言つた、清葉が優しい若衆^{わかしゅだち}立で、お孝が凜々^{りり}しい娘形^{がた}、
 ——さながらのその娘風の艶^{えん}に媚^{なまめ}かしいものであつた。

お孝は弛^{ゆる}んだ伊達巻の、ぞろりと投遣^{もすそ}りの裳^ひを曳^ひきながら、
 ……踊で鍛えた棲は乱れず、白脛^{しろはぎ}のありとも見えぬ、蹴^{けだ}出^し捌^{さば}き
 で、すつと来て、二階の縁の正面に立つたと思うと、斜めにそこ
 の柱^{もた}に凭^たれて、雲を見るか、と廂^{ひあわい}合^あを恍^{うつ}惚^{とり}と仰^ういだ瞳^{とら}を、蜘蛛

蛛に驚いて柳に流して、葉越しに瞰下し、そこに舞扇を袖に受けて、見上げた清葉と面を合せた。

「ああ、お孝さん。」

と声を掛ける。

上で見詰めたなり、何にも言わず、微笑むらしいお孝の唇、紅をさしたように美しい。

そこへ、あとも閉めないでおいたと見える、開けたままの格子を潜つて、顔を出したお千世は、一杯目に涙を湛えている。

乱れて咲いた欄干の撓な枝と、初咲のまま萎れんとする葉がくれの一輪を、上下に、中の青柳は雨を含んで、霞んだ袂を扇に伏せた。――

「清葉さんは楽勤め。」と茶屋小屋で女中が云う。……時間過ぎの座敷などは、（お竹蔵。）の棟瓦に雀が形を現しても、この清葉が姿を見せた験ためしが無い。……替りには、刻限までだと、何時なんどきに口を掛けても、本人が気にさえ向けば、待つ間が花と云う内に、催促に及ばずして、金屏風きんびょうぶの前に衣紋あらいを露す。

但し約束は受けていても、参詣まゐりかえりの帰途かえりみちに眩暈めまいがすると、そのまひきこもま引籠ひきこもること度々で、この眩暈と、風邪と、も一つ、用達ようたしと云う断りが出る、と箱はこ三さんの札は、裏返らないでも、電話口あきらの女中が矢継早ゆんづるの弓弦ゆんづるを切つて、断念あきらめて降参する。座敷くやしで口惜くやしがるもの曰く、

「旦那だんなが来ているのだらう。」

勿論である。

時に説を為すものあり。

「そのくらいなら商売を止めれば可い。」

難じ得て妙だと思つと、たちまち本調子の声がして、

「芸者が好きな旦那でしょうよ。」

一言簡潔にして更に妙で、座客ぐうの音も出ず愕然としてこれを見れば、蓋し三味線が、割前の一座を笑つたのである。

そうまで我儘が通る癖に、附合が綺麗で、朋輩に深切で、内気で、謙遜で、もの優しい。おくれた座敷は、若い妓の背後に控えて、動く処は前へ立つて目立たないように取り廻す、というのであるから、お茶屋の蔵の前に目の光る古狸から、新道の塀を巢

立ちの雛ひよっこ児まで、

「ああ、いい姉さん。」

とのつけに云う。……続いて頭かぶりを振る所科しぐさありと知るべし。少わかいもの慌てまい。その頭を振る事たるや、今のは嘘だと云う打消しではない。

十七

向うへ対手あいてに廻しては、三味線の長刀ながなた、扇子おうぎの小太刀こだち、立向う敵手あいての無い、芳町育ちの、一步を譲るまい、後おくれを取るまい、稲葉家のお孝が、清葉ばかりを当の敵かたきに、引くまい、退くのまい、と

氣を揉んで、負けじとするだけ、かねてこなたが弱身なのであつた。

張も、意地も、全盛も、芸ももとよりあえて譲らぬ。否、較べては、清葉が取立てて勝身は無い。分けてむこうは身一つで、雛お妓しやく一人抱えておらぬ。

こなたは、盛りは四天王、金札きんさつ打った独武者ひとりむしや、羅生門よし、土蜘蛛よし、※々《ひひ》、狼ももつて来なで、萌黄もえぎ、緋緘ひおどし、卯の花緘、小桜を黄に返したる年増交りに、十有余人の郎党を、象牙ばちの撥ばちに従えながら、寄すれば色ある浪に碎けて、名所の松は月下に独り、従しよ容ようとして名を得る口惜くやしさ。

弱虫の意気地なしが、徳とやらをもつて人を懐なける。雪の中を

草鞋わらじ穿はいて、蓑みの着きて揖讓おじぎするなんぎ、惚のろけ気けて鍋焼かまぼこを奢おごるより、資も本とでのかからぬ演劇しばいだもの。

「字あざなは玄徳め。」

と、所好すきな貸本かきほんの講談こうたんを讀よみながら、梁山泊りやうざんぱくの扈三娘こさんじやう、

お孝たかが清葉ののしを詈ののしる、と洩もれき聞きいて、

「その気こだから、あの妓こは、(そんけん)さ。」

と内証うちしやれで洒落しやれた待合まちあひの女房おかみがある由よし。

却説さて、言うがごとく、清葉しやれの看板かんばんは滝たきの家いへにただ一人ひとりである。

母親ははがある。それは以前いぜん同じ土地ちに聞きえた老妓らうこで、清葉しやれはその実まこと、養女やしやうである。学校がっこうに通かう娘むすめが一人ひとり。これには表おもてむき、おつかさん、とおおびらに自分おれを呼よばせて、誰たれに、遠慮えんりょも気きづかいも無ない。

なお水菓子が好きだと云う、三歳みつになる男の児この有ることを、
前さきの条きにちよつと言つたが、これは特に断つて置く必要がある、
捨児すてごである。夜半よなかに我が軒のに棄てられたのを、拾い取つて育てて
いる。その児こに乳母にを選んで、附けて置く裕ゆたかな身しん上しょう。
土蔵くらがある、土蔵には、何かの舞に使つた、能の衣裳まで納ま
つたものである。

かつて山から出て来た猪ししが、年の若さの向う不み見み、この女に恋
をして、座敷で逢えぬ懐ふところ中の寂しさに、夜更けて滝の家の前を
可なつか懐なつかしげに通る、とそこに、鍋焼が居た。荷の陰で引飲ひっかけながら、
フトその見事な白壁を見て、その蔵は？

「滝の家で。」

「たきの家？」

「へい、清葉姉さんの家うちでげすよ。」

や、これを聞くと、雲を霞と河岸へ遁にげた。しかも霜冴えて星の凍いてたる夜よに、その猪が下宿屋の戸棚には、襲かさねる衾ふすまも無かつたのであつた。

と、何の苦勞も、屈託も無さそうなその清葉が、扇子おうぎとともに、身を震わした。

声もうるんで、

「お千世さん、姉さんが。」

と、二階たたずにゐんで物言わぬお孝を、その妹に教えながら、お千世の泣顔を、ともに誘つて、涙ぐんだ目で欄干てすりを仰いで、

「私、……私よ、お孝さん。」

と二度目に呼んで声を掛けるや、

「葛木さん。」

と、冴えた声。お孝が一声応ずるとともに、崩れた棲は小間を落ちた、片膝立てた段鹿の子の、浅黄、紅、露わなのは、取乱したより、蓮葉とより、薬玉の総切れ切れに、美しい玉の緒の纏れた可哀を白々地。萎えたように頬杖して、片手を白く投掛けながら、

「葛木さん。」

二度まで、同じ人の名を、ここには居ない人の名を、胸を貫いて呼んだと思うと、支えた腕が溶けるように、島田髻を頂せて、

がつくりと落ちて欄干てすりに突伏つつぶしたが、たちまち反そり返るように、
 衝つと立つや、蹠踉々々よろよろとして障子に当つて、乱れた袖を雪なす肱ひじ
 で、しっかりと胸にしめつつ、屹きと瞰みお下ろす目に凄味すじみが見えた。

「ああ。」

「危いわ、姉さん。」

端近な低い欄干、虹が消えそうな立居たちいの危さ、と見ると、清葉
 が落した色傘を拾っていたお千世が、小脇に取つたまま慌あわただしく駆
 込んだのは、梯子はしごを一飛びに二階へ介添。

「何だい、盗人猫どろぼうねこのように、唐突だしぬけに。」

と摺違いに毒気を浴びせて、ぬつと門口のぞを覗いた、遣手面やりてづらの
 茶缶阿婆ちやかんおばあ。

「えへへ。」と笑う、茶色な前歯、金の入歯と入乱れて、窪んだ頬おしろいに白粉かすの残滓。

「まあ、滝の家のお姉様、どうぞこちらへ。……まあ、御全盛な貴女様が、こんな怪物ばけもの屋敷見たような処へ、まあ、どうした風の吹廻しで。」

清葉はきりりと、扇子おうぎを畳んで、持直して、

「ちよつと、お茶を頂きに。」

河童御殿

「ははあ、葛木ですかね、姓じゃね、苗字であるですね。名は何と云わるるですか。」

「晋しんぞう三ぞうです。」

オウバアコオト

上オウバアコオト外套コオトを着ながら、なお蒲柳やせの見える、中脊なかつせの男が答える。

三月四日の夜よの事であった。宵に小降りこぞりのした雨上り、月は潜おぼろんで朧おぼろ、と云うが、黒雲くろぐもが浸にじんで暗い、一石橋いちこくばしの欄干際。

一方は口つきでも知れる、言うまでもなく警官である。

「新はどう書くですかね、……通例新の新ですか？ あるいは。」
 「晋すすむと云う字です。」

と男は声を低うした。ここに事故ことありと聞きつけて、通行ひの人

とだか 集りを憚はばつて、さりげなく知合が立話でもするごとく装おうと
 したらしい。

さして気遣う事は無い。近間に大おおな建た築ての並んだ道は、崖の
 下行く山道である。峰を仰ぐものは多いけれど、谷を覗のぞくものは
 沢山たんない。夜はことさら往來ゆきが少い。しかも、その夜よは、ちよう
 ど植木店だの執持とりもち薬師様と袖を連ねた、ここの縁結びの地藏様、
 実は延命地藏尊の縁日で、西河岸で見初みそめて植木店だで出来る、と云
 つて、宵は花はな簪かんざし、蝶々まげ鬘まげ、やがて、島田、銀杏いちようがえし返かへ、怪けし
 からぬ円鬘えんまじり、次第たばに鬘まげの出た、襟脚えいの可いいのが揃そろつて、派
 手に美しく賑にぎわうのである。それも日本橋寄から仲通へ掛けた殷にぎわ
 賑いで、西河岸橋を境にしてこなたの川筋は、同じ広重の名所で

も、朝晴の富士と宵の雨ほど彩色が變つて寂しい。もつともこの一石橋の夜の御領主、名代の河童が、雨夜の影を潜めたのも、やつと五六年以来であるから。

初夜も過ぎた屋根越に、向う角の火災保険の煉瓦に映る、縁結びの紅い燈は、あたかも奥庭の橋に居て、御殿の長廊下を望んで、障子越の酒宴を視める光景！ 島田の影法師が媚めくほど、なお世に離れた趣がある。

偶にこぼれて出て来るのは、小姓梅之助に手を曳かるる腰元の青柳か、密と外して酔ざましの椎茸鬘。いずれも人目を忍ぶ色の、悪くすると御手討もの。巡査と対向に立ったのなんぞ、誰も立停まつて聞くものは無い。

夜は、間遠いので評判な、外濠そとぼり電車のキリキリきし転んで通るの
 さえ、池の水に映って消える長廊下の雪洞ほんぼりの行方に擬まがう。

が、名を憚はばかった男の、低い声に、（ああん。）と聞えぬ振して、
 巡査が耳を傾けたのは、わざとらしく意地悪く見えた。

「すすむ、いわゆる、進歩ですかね。」

「いや——高杉晋作の晋なのです。」
 と向直る。

巡査の背がぐつと伸びて、じろりと行やつて、

「維新創業の名士、長州第一の英傑じゃね。ああ、豪えらい名前であ
 りますな。ふん。」

「親がつけたんです。」

と、にがわらい苦笑したらしい。

「成程、大きにそこもあるですね。」

と取つても附けないけぶり気振をしながら、

「で、晋三の蔵の字は？……いや、名刺をお持ちじやろう、と考
えるですがね。」

「確か……有りました。」

その時、角燈をぱつと見せると、その手で片手の手袋を取つて、
めさき目前へ、てのひらずい、と掌。目潰めつぶしもくわせるかまえ構。で、葛木という男は、
ハツと一足さがった。

「差上げますので？」

「何、拝見をしますので、はあ、ああ。」

十九

巡査は、持替えた角燈に、頬骨高く半面暗く、葛木の名刺を指の股に挟んで、

「これは非常に皺しわになつとる名刺じゃねえ。」

「つい突つっこ込んで置いたもんですから。」と袖の下に、葛木はその名刺入を持ってゐる。

「ああ、非常に大事の物と見えるですね。」

巡査は鼻の先でニヤリと薄笑。

この意味が受取れなくって、

「ええ？」と云う。

「深くその、囊のうてい底に秘して置くですね。」

「何、そういう次第ではないんです。いけ粗ぞんざい雑なんです。」

「粗略に扱うですか。わざとですかね、名刺を。」

「わざと、と云うのじゃありません。皮肉じゃありませんか。」

「あえてそうでないです。が、貴下あんたの言語が前後不揃であるから

じゃね。」

「何が不揃です。」とちよつと忙せきこ込む。

「お黙りなさい。」

と、低いが唐突だしぬけに一喝して、けろりとまた静しずかに、

「反問をすることは要らんです。……ただ、質問に対して答え

れば可よいのです。」

ぐい、と名刺入を突込んだが、葛木は事を好まぬらしく、そのまま黙る。

「巡查はじろりと四辺あたりを見た。

「早く願ねがいたいです。」

「順序があります。——一体この名刺はですな、……更あらためて尋ねるですが、確に、これは貴下あなたのですな。」

「名が書いてありましよう、葛木晋三と。」

「本郷駒込が住所で。」

「相違ありません。」

「すると……皺だらけになった、この一枚のみではありませんまい。」

他に幾枚か持合せがありましたよう、有る筈はずじやがね。」

「はあ。」と、浮うっかりした返事をする。

「それをお見せにならないけりや不可いかんね。」

「あいにく、持合せがありません。」

「無いと云う法は無い。有るべきですね。」

葛木は、これさえあれば、何事もない、と自覚したのに、実際
無いのを口惜くちおしそうに、も一度名刺入を出して、中を苛いらだ立つて搔か
廻きまわしたが、

「まったく、一枚になつていたので。」

「成程……非常に交際がお広いですね。」

「いいえ、狭いんです。」と投げたように言下に答える。

「ここに医学士、と記してあるですな。」

巡査は魔を射る赤い光を、葛木の胸にぴたり。

その髻ひげの薄い頤あごを照した。

「お職掌がら、特に御交際の狭いと云うのは、……ですな。なぜ
ですかね。」

「開業はしておらんです。」

いくらか、頷うなずいたらしかつた。と更まつた態度で、

「どこへお帰りですな。」

「学校へ。」

「何、」

「……その寄宿へ帰ります。」

「ははあ、学士の寄宿舎が。それは唯今ありますか。」

「医局に居おります。」

「今時分。」

「そこに寝泊りをするんです。」

「すると、この駒込千駄木は？」

「籍が有るんです。」

「なぜですか、籍だけお置きになるは、……ですね。」

「妹の縁附いた家なんです。」

「御令妹の、ふん。」

と、一つ呼吸いきを入れたが、突附けた燈あかりも引かず。

「で、唯今まで、どこにおいでで有ったのかね。」

「この辺に、ちよつと飲んでおりました。」

そこへ、二人ばかり通抜けたが、誰も立停たちどまつても見なかつた。

二十

「何屋です、何屋ですかね。」

「……それは言わなければならぬでしょうか。勿論、是非と
なら申すんです。」

「いや、それは先ず。……しかし御愉快でしたな。」

「何、苦痛です。」

と向を替えて、欄干もたに凭もたれて云う。……

「苦痛、……成程。道理で、顔がんしよく色が非常に悪いな。」
 たちまち乱暴な言ものい語しながら、横ざまにその瘦やせた形を照して、

「真まつさお蒼じゃね、はははは。」

と笑棄てたが、底に物ある、薄気味の悪い事。

その時間えた。糸より細い忍しのび音の……

——露地の細路、駒下駄で——

「ああ……可いや厭な……姉さん。」

と若い女の声がすると、かたかたと駆出す音、呉服橋を、やや離れた辻のあたり。薄墨色の河岸を伝つて、雲より黒い線路に響いた。とも一人笑つた女の声。悪巫山戯わるふざけに威おどしたらしい。登あしおと音

は続いて響く。

葛木は撈むしるように顔を撫でて、

「蒼まっさお青ですか。……そうですね。客が野暮だから、化物に逢かえりつた帰途でしょうよ。」

「それは、唯今のそれは、いやしくも行政官の一員たる、すなわち本職に向つての言語であるのですね。」

「いや、実は性分です。」

と焦じれつたそうに言い切つた。葛木は衝つと行ゆこうとした。表裏ひょうり、反覆、とにかくながら、対手あいてが笑つたから、話は済んだ、と思つたのである。

「お待ちなさい、お待ちなさい。待たんか、おい。」

「何です。」

「ずかずか行つちや不可^{いか}んじやないか。尋問はこれからなんだ。」

「僕は帽を取るよ。更めて挨拶をします。可^いい加減にしなくつちや困るじやありませんか。夜分、我々が通行するのに、こういう事は間々あります。迷惑でも御職務に対して敬意を表する。それにしてもです。唯今までさえ、立入過ぎたお尋ねのなさり方ですが、単に御熱心であるからだ、と思つたんです。」

この上何を聞くんです。まったく可^いい加減にして下さい。……用が有るなら住所へお尋ねを願いましようかしらん。」

「さよう、当方の都合に因つては住所へもお尋ね出来ませぬ、また……都合によつては、本署へ御同行も出来得るですであらう。」

「ええ。」

さすがに葛木は一驚を喫した。余の事である。

「けれども、御答弁に依つて、そこまでに立到らない事を、紳士のために、本職は欲するでしてな、はあ、ああ。」

「早くお尋ねを願います。何です、とにかく、困りました。僕は不安に堪えません。」

「すると、むしろここで埒を明ける事を御希望になるのですね。」

「勿論、是が非でも連れて行こうと思えば、それが出来ない貴下じやないんだから。」

「さよう。しからは反抗をなさらんで、柔順にお答えをなさるが可い。」

と入交いれちがいになった向を直して、巡査は半身を反そるがごとく、肩そびを聳そびやかして衝つとまた角燈かくとうを突附つけた。

葛木は、その忌いわしさと、癩かん癩しゃくにぶるぶるする。

「貴下ひどは太ひどくその顔がん色しよくが悪いですね。」

「……寒いのです。」

「寒さいふい！ 化物かぶつに逢あつたのが、性分せいぶんになって、そして今は寒さいふい。

いろいろな変化へんげしますな。」

「まあ、君は、」と、足踏あしづみで橋はしを刻きんで焦じれると、

「御都合ごごうで署しよへ御同行ごどうぎょうを願ねがつても可よいのです、が、御答弁ごたべんによつて、それまでに立到たつとらない事を、紳士しんしのために希望きぼうしますでなあ

。」

「……………」

栄螺と蛤

二十一

「なにしろじゃね、本職の前で顔色が悪うて、震えておらるるのは事実じゃね、それはしかし寒^{さむ}いでも構わんです。

その寒^{さむ}いのにじゃね……先^{さつ}刻^きから、水に臨^まんで、橋の上に、ここに暫^{しば}時^{らく}立^たっていたのは、ありやどうい^うわけですか。

勝手だ、酔^よ覚^さし^じやと言^わる^るかも知^れん。けれどもし^じゃね、

見ておつたぞ、どぶん！ と音のした……」

水の面おもては暗かった。

「どぶん。」

ぎりぎりと靴を寄せつつ、

「川の中へ放棄ほかし込んだ、……確に、新聞紙に包んだ可なり重量の有るものは、あれは何ですか。」

「ああ。」

前の世の罪でもある事か、と自ら危おそぶみ、惶おそれ、惑い、且つ怪あやしんでいた葛木は、余りの呆あっけ気なさにかえつて驚いたのである。

「その事ですか。」

「先ずそれを聞かんとならんですね。」

「あれは榮螺さざえと蛤はまぐりですよ。」

これがまた少なからずこの行政官を驚かした。……その答が余り簡単で明瞭めいりようでおまけに平凡であつたから。……けれども、この場合の平凡たるや、世間の名詞は、巡査のためにはことごと尽く、平凡であつたらう。

巡査に取つては、魚河岸の侠男いさみが身を投げたよりは、年の少いわか医学士と云う人間の、水に棄てたものは意外であつた。

「榮螺と蛤。」

問返す、鼻柱かけて著しく眉をひそ顰めて、疑惑の眼はまなこ異変に光る。

「貝類の……です。」

「いや、それはいや、それはしかしながら初めは妖怪ばけものの符牒ふちよう

でももあるかに聞いたのですが、再度繰返して説明をされたで、貝類である事は分つたです。分つたですが、……あなた貴下は妙なものを棄てましたなあ。」

「放したのです、私は、」

「成程、でそれはまじない禁厭にでもなるですかね。」

「……ひな雛に、雛壇に供えたのを、可哀相だから放したんですよ」

「ははあ、あるいは煮、あるいは焼いたやつを。」と、わざと空そらとぼ

惚けた事を云う。

うっかり引入れられそうだった。が、あいて対手が巡査である事に、彼はようやくな馴れたのである。

「生のままですとも。」

「何等の目的ですかね。」

「目的は有りません。」

「人間が、紳士が、いやしくも学士の名称御所有の貴下が、目的なしに、目的なしに事を行うという理由はあるまいかに考えるです。ね。」

医学士は思わず激した。

「根、根掘り葉掘り。」

「御都合に因ればです、本署へ御同行を願うことも出来るですが、紳士として、御名誉の為にですな。」

「分った。……分りました。が、別に目的と云つては無い。可哀相だからそれでなんです。」

「……蓋しけだ非常な慈善家でおありですな。成程、いわゆる、医は仁術であるですかね。」

「私をあえて、あえて仁者とは言いませんまい。妹の、姉の。」

「あ！」と一つ握拳にぎりこぶしを口に突込むがごとく言を遮ることば。

トややしどろの体で、

「姉さんの志です。」

「姉さんの志。ははあ、君は姉のために、嬰兒あかごを棄てたんじゃね

。」

「何！」

「前刻さきには御令妹であつたかに、ああ、本職は記憶するですな。」

「そうです、そうなんです。」

「何か、年上の妹かね。」

「いや、姉です。」

「答が明瞭を欠いてて不可いかんねえ。……為にならんぞ、君。」

「ですから僕の妹です。」

「ははは、駄目じゃね、君、どうも変じゃね。」

「何が変ですか。」

「都合に因おっしやつては本署へ、ですな。」

「馬鹿を仰おっしや有あい！」

「けれども、紳士のために、あえてそれは望まんですなあ。」

「実に、貴下は。」

「誰が雛を飾ったのですか。」

「それは僕だ。」と赫^{かつ}となる。

「おい、」

と云う語調が變つて、

「しつかり答弁をせんと不可^{いか}んねえ。君は、今しがた、……某大
学ですかね、病院に寄宿をすると云ったではなかつたか。……大
学、病院の宿舍内で、雛を飾って遊ぶのですな。栄螺、蛤を供う
るですな。」

「いかにも。」

「事實は、……本職が、貴下を疑うよりも、むしろ奇怪じゃないですか。」

「それが姉の志ですから。」

「御令妹は、」

「妹は縁附いて、千駄木に居るのです。」

「分りました。」

はじめてわずかにうなず頷きながら、

「姉と云うのは、ですな。」

「それまで、そんなことまですべて言わなければならんのですか。」

……しかた詮方がない、災難と思う……御都合に因つては、それはどこ

へでもお供をする。が、打明けてお聞かせ下さい。一体、何から

起ったお疑いなんですか。」

「聞かせましょう。川へお棄てになつたものを、明かにお話しが願いたい?……」

「それは、」

「ははは、やはり（栄螺と蛤）か、そいつは困りましたな。」

「お信じ下さらない。」

「強いて信じたくないとは願わんです、紳士のために。なぜ、

そんなら貴下は、その新聞包みを棄つるに際して、きよろきよろあたりみまわ四辺をうろうろゆききしたり、胡乱々々往来をしたんじやね。」

「そりや何です、人が怪みはしまいかと思つたからです。」

「ははあ、人が怪むという事を。それじや……御承知であつたで

すな。」

「ものが、ものだからですから。」と大おおにまごつく。

「何も貝類を川に棄つるに、世間を憚はばる事は無いように思われる

……ですね。」

「ですが、……また……貴下のような。」

「すると、本職がです、警官がそれを怪む事は御承知の上ですか。」

「僕には分らん。」

「本職はです、貴下のために御答弁の拙劣なのを惜むです。」

「……勝手にしたまえ。どうしようてんだ。」

「……紳士のために望まない事ですな。」

「煩い、勝手になさいよ。」

「為にならんぞ！」

「旦那。」

と暗がりに媚かしく婀娜な声。ほんのりと一重桜、カランと吾妻下駄を、赤電車の過ぎた線路に遠慮なく響かすと、はつと留楠木の薫して、朧を透した霞の姿、夜目にも褙を咲せたのは、稲葉家のお孝であつた。

——一昨年の春である——

おなじく妻

二十三

「もし、ちよいと。」

右側の欄干際に引添った二人の傍へ、すらりと寄つたが、お端折の褌を取りたそうに、左を投げた袖ぐるみ、手をふらふらと微酔で。

「旦那、その方のお検しらべはまだ済みませんか。」

と斜めに警官を見て、莞爾にっこり笑う……皓齒しらはも見えて、毛筋の通つた、潰島つぶし田は艶麗あでやかである。

警官は二つばかり、無意味に続けざまに咳しわぶきした。

「お前は何かい、ああ。」

「はあ、お次に控えておりました、賤しずの女めでござんすわいな。」
とふらふらする。

分ったか、分らないか、別に心にも留らない様子で、

「何が故に、ああ、出子来たかい、うむ？」

「はいはい、御意にござりまする。」

と妙に可愛い声して、

「このお方の、」

流なが晒しめに、ト心あつてか葛木を優しく見ながら、

「お検べが済みませんと、後つが支えますのでござんすわいな。」

「何が支える、何が。」

「だって——ああ焦じれりたい。この方は何じやありませんか——御お

あねえ

姉さんの志だつて、お雛様に御馳走なすつた、お定りの（榮螺と蛤。）——

でもお儀式よ。それを貴下、川ン中へお放しなすつたつて、それがでしょう、怪しいつて事なんでしょう。

もし、榮螺も蛤も生きていますわ。中でもね……お雛様に飾つたのは、ちらちらろうそく蠟燭の煮えます時、春雨の静かな晩は、口を利くものなんですよ。クク、」

と酸漿ほおずきを鳴らすがごとく、

「なんて。——可哀相に、蒸したり焼いたり出来ますかつて貴下——おまけにお雛様んでしよう——この方の心意気は、よく分つてるじゃありませんか。

私だつて放しに來ました、見て下さいいな。」

片手を添えて、捧げたのは、錦にしきで手の中皿の、半月形なりに破われたのに、小さな口紅三つばかり、裡紫うちの壺二個ふたつ。……その欠皿も、
白魚しらおの指に、紅猪口べにちよくのごとく蒼く輝く。

巡查も葛木も瞳を寄せた。

「あら、小さいんで極りの悪い事ね……お価あしが高いもんですから、賤しんの女でござんすわいな。ほほほほほ。」

桃の花片そこに散る、貝に真珠の心があつて、雛ひいなを懐したう風情かな。

「お座敷がえり帰かえりに、我家うちの門かどから、奴やつこに持たして出たんですがね。途中おどで威おどかしたもんだから、押放おっほりだ出して遁にげたんですもの。ヒヤ

りとしたわよ、真まつぶた一二つ。身上おおいたごと大痛事。これを拾う時の拙者が

心中、心持というものは、御両所、御推量下されい。

それでも、孝の字おおたてひき大達引。……ねえ、そんな思いをして迄だ

つて、放しに来たんじやありませんか。ねえ、現在。」

と左右を見つつ、金魚鉢を覗くごとく、仇気あどけなく自分も視みつめて、

「お分りになつて、旦那。……お許しを受けないと、また叱られるとなりません……もう可いいでしょう、ちよいと、放しますよ。」

巡査の、ものも言わない先、つかつかと欄干越。

「一石橋に桃が流れる。どんぶりこ。」

ばつと鳴つて、どどんと水の音。

両手を縫すがつて、肩を細く乗出しながら、

「河童や、悪戯いたずらをおしでないよ。」

向う岸がしに鷺が居て、雲はやや白くなつた。

「失礼しました。」

名刺を返して、

「悪しからず……お名前だけ記憶します。」

と、鉛筆で手帳へその名を。……振向くお孝に見向むかつて、

「お前の名も？……何と云うかい。」

「おなじく妻、とかいて頂戴。」

二十四

「実に難有かつた、姉さん。」

巡査の靴音が橋の上に留んで、背後向のその黒い影が、探偵小説の挿画のように、保険会社の鉄造りの門の下に、寂しく描出された時、歎息とともに葛木はそう云つた。

「お庇さまで助かつたんだよ。」

「恐入ります、御慇懃で。」

並んでイんで見送つていたのが、微笑んで見向いてお孝。

「でも、驚いたでしょう、貴方。」

「驚いたつて、はじめは串戯だと思つたし、半頃じゃ、わざと意地悪くするんだと思つて癩にも障りましたがね、段々真面目なのに気が付いたんです。確に嬰兒でも沈めたと思つたらし

い。^{さき}先方が職務に忠実なんだと気がつくほど、一度は警察か、と覚悟をしてね——まあ、しかしそれでも活きた証拠に、同じものの放生会^{ほうじょうえ}があつて、僕が放生会に逢つたようだ。で、ほんとうに不思議な位だ。」

「私は毎年放すんですわ。」

「それにした処で、ちようど機会^{おかり}よく、……私は姉の引合せか、と思う。」

「御馳走様。」

と横を向いた、片頬笑みの後毛^{おくれげ}を、男に見せて、婀娜^{あだ}に払い、
「清葉姉さんの、でしようちよいと。」

「ええ？」

「お驕おごんなさいよ、葛木さん。」

「驕おごる。……そりやきつとお礼をするがね、どうしてお前さん、私の名を。」

「知っていますよ。」

吾妻下駄をからりと鳴して、摺ずり下さがる棲こを上衣オトの下に直した気け勢はい。

「今お帰り？ 清葉さんの葛木さん。」

彼は退いて片手を振った。

「止してくれ、先方さきが迷惑をするんだから。」

「酷ひどく御謙遜ね。」

「いや、まったく。」と、慌あわしく中折ただをぐいと被かぶる。

お孝は覗くようにしながら、

「それとも、これからお出掛けなさるの。……宵にして下さいよ。

そうでないと、私たちが見たくつても廊下で御目に掛れない。」

「串じょうだん戯ごを云つちや困る……これから行つて逢えるようなら、

橋の上で巡査につか捉まる、そんな色消しは見せやしない。……

なんのツて暢のんき気らしく云うけれども、實際行掛けに流した方が

無事だった。雀と違つて、ものがものだし、ちよつと嵩かさは有るし

するから、宵の人目をはばか憚つたのが、虫が知らしたのかも知れんの

だね。ほんとうにこれから帰るんだよ。」

「じゃ、やつぱりお帰りがけね、お待ちなさいよ。」

と拔出かんざしていた簪かんざしを、反てのひららした掌てのひらで、スツと留めて、

「そうね……姉さんの御志で、お雛様の栄螺と蛤を、一石橋から流すと云うのに一人ぼっち。それまで檜物町に差向いでいた芸者が、一所に着いて来ない意気じゃ、成程出来ていませんね。」

「勿論。」と オウバアコオト 外 套 の襟を立てる。

「それじゃ風説うわさの通りだよ。」

「や、専ら風説をするのかい。」

「評判さ。お前さん。」

「それはいささか情ない。」

「意気地なし……」

と袂たもとを投げた手を襟に、眉を明るく屹きつと見て、

「男の癖に。」

「これは手酷い？」

二十五

「だけでも、可い^い気味ねえ。」

「何の怨みだね。」

「可いものの好みをするからさ。」

「相済みません。」

葛木は寂しく笑って、

「猛烈なる事巡査以上だ。」

「処へ……私でなく、清葉さんに出て貰いたかったわね。」

「その人でさえ、可いかね、都合のいい時でない、容易に顔を見せちゃくれない……」

「沢山よ。」と一転くるりと背後うしろ向く。

「いや、見得も外聞も無しにさ。分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判で聞いている。……この頃に一度挨拶、と思うけれど、呼んでも……ちよつとじや見えんのだろうな。」

「見えるも見えないも、葛木さん、御挨拶なんて要るものですか。」

「きつとそう云うだろうと思った。勿論、たかだか更めて、口で云う礼ぐらい。」

「かえって迷惑。」

「御迷惑。」と口も足も、学士は蹴躓けつまずいたようであつた。

お孝は澄まして、

「ええ、真平まっぴら。」

「それじゃ時節を待つて下さい。」

「可い厭やです。」

学士は決然たる態度で、ちよつと帽を取つて、

「名は忘れませんよ、いずれ。」と二ツ三ツ塵ちりをはじきながら、附穂なく線路を斜めに、見えない電車に追わるるごとく。

と顧みて、そこで、ト被かぶりなお直ステッキして、杖をついた処、お孝は二

つばかり、カラカラと吾妻下駄を踏鳴らした。

「ただ別れるの。……不意ぶいき気だねえ、——一石橋の朧おぼろ夜に、」

四辺あたりを見つつ袖を合せた、——雲を漏れたる洗髪。

「女と二人逢いながら、すたすた（かねやす。）の向うまで、江戸を離れる男ツてのがお前さん江戸にありますか。人目にそうは見えないでも、花のようなほろよい微醉で、ここに一本ひとつ咲いたのは、稲葉家のお孝ですよ。清葉さんとは違えますわ。」

「違うから、それだから、」

学士は、つかつかと引返して、

「なおの事、忙しくつて、逢つてはくれまいと言うんじやないか。」

「ええそうよ、……違えますとも。……清葉さんと違うのはね、今時分から一人じや貴方を帰さない事なのよ。」

「お孝さん。」

「葛木さん、もう遅いわ。……電車も無し……巡査に咎められたりなんかして、こんな時はつけが悪い、山の手の夜道だもの、無理をすると追剥おいはぎが出来ますよ。」

「もつとも、直ぐにも、挨拶もしたくないんだけど、遅い、ね、何しろ遅いからどこと云って……私は働はたらきが無いのでね。」

「附いてるのが私です。——箱を出たお嬢さんだわ。お座敷はどこにでも。……ちよつと……一所にいらつしやいな。」

と取つて引いた外套がいとうの脇を離すと、トンと突いて、ひらりと退のくや、不意に蹠よろ踏めく葛木を、すつと立って、莞爾にっこり見て、

「その時、きつと御挨拶なさいまし。ほほほ。」

と花やかなものである。

「姉さん。」と抱附くように腰にひつたり、唐突だしぬけに駆寄つたは、若い妓この派手な態度なり——当時一本になりたてだった、お孝が秘蔵のお千世なのである。

「まあ、千世ちいちゃんか、……ああ、吃驚びっくりするじゃないか、ねえ」

二十六

「だって、姉さん。」

「姉さんじゃないよ、……唐突だしぬけに何だねえ、お前、今しがた河

岸の角から駆出したじやないか。」

——露地の駒下駄——は、この婦おんなで、怯おびえた声はその妓であつた。

「緩ゆつくり歩ある行おついても追おつ着ついても来おつないから、内へ歸おつつたろうと思おつつたのに。」

「だって、姉おとさんが威おどすんですもの。私おど吃おど驚かして遁にげ出だしましたけれど、（お竹蔵。）の前まへでしよう、一人ひとりじや露地へ入いれませんもの、可こ恐おそくつて、私……」

「煙草屋たばこの小母おさんに見みてお貰もらいなら可いいものを。」

「もう閉しりましたの。」

と、小腰こを屈かめて、欄干かの上うで、ふふつくりした鬢びんを庇かつた透すし

て見る手、——橋の側は……変っていた。

「……覗いたけれども、真暗まつくらで、もう寝たんですもの。」

「それで何かい、また出掛けて来たのかい。」

「ええ、一人じゃ可恐いんですもの、……でもこつちがまだしもですわ。」

「なんて、お前、お約束だもんだから、帰りに縁日へ廻って、何か買わせようと思つてさ。さあ、行ゆこうよ……ねえ、貴方一所に——千世ちゃん御挨拶をおしでないか。」

「——失礼。……お初に、」

「お初じゃないよ。……貴方、この妓は御存じだわね。」

「両三度——千世ちせちゃんだっけ。」

「あら、済みません、……誰方^{どなた}。」

とすが継り寄るように、外套の襟を覗いて、

「まあ、清葉姉さんに岡惚れの、」

「謝まる。」

と俯^{うつむ}向けに、中折帽^{なかおれ}ぐるみ顔を^{おさ}圧えて、

「何とも面目次第も無い！」

「……清葉命……と顔に書いてあるようだわね、口惜^{くやし}いね、明^{あかる}い

処でよく見てやろうや。」

「どこへ行く気なんです。」

「縁結びに……西河岸のお地藏様へ。」

肩でトンと寄添いつつ、

「分つたでしょう、貴方、この妓には遠慮は要らない。千世ちゃん、御覧、似合つたかい。」

「あら、姉さんは？」

「お孝さん。」

「（同じく妻。）だわ。……雛の節句のあくる晩、春で、朧おぼろで、

御縁日、同じ榮螺と蛤を放して、巡査の帳面に、名を並べて、女房と名告なのつて、一所に詣まいる西河岸の、お地蔵様が縁結び。……これれで出来なきや、日本は暗夜やみだわ。」

肩に掛つた留南奇とめきの袖。

お孝を掠かすめて腕車わんしゃが一台。

「あぶね
「危え。」」

矢のごとし。

「おや、おいでなすつたよ……」

——露地の細路、駒下駄で——

細く透とおつて凄すげい声する。

「可いや厭、姉さん。」

「それ、兄さんにおつかまり。」

飛つくお千世を葛木に縋らせて、ひとり褻つまを挙げて、悠然ささきと前へ立って、

「大丈夫、そうすりや、途中で、誰かに逢つても安心でしょう。」

葛木は、扱あしらい兼かねたか、わざと不答こたえず。

「千世ちゃん、お前寒くはないかい。」

果せる哉、かなこの一行は、それから参詣を済まして帰りがけに、
 あの……仲通りで、一人軒伝いに、包ましく来かかる清葉に、ゆ
 くりなく出逢ったのである。

ほこをよこたえてしをふす
 横 槩 賦 詩

二十七

「今晚は……清葉姉さん。」

「清葉姉さん、今晚は。」

そうした事も、あだな渾名を令夫人などと呼ばれるる箇条であろう、柔

かな毛皮の襟巻を、雪の細ほそ面おもて蔽おほうまで、深々と巻いている。
 ……コオト上衣無しで、座敷着の上へ黒縮緬くろちりめんの紋もん着つきの羽織を着て、
 胸へ片袖、温しとやか容つまに棲すまを取る、襲かさねた裳もすそしつとりと重そうに、不
 断さえ、分けて今夜は、何となく、柳を杖に支つかせたい、すんな
 りと春の夜風に送られて、向うから来る姿。……手を曳ひかれたり、
 三人つれたり、箱屋と並んで通るのだの、薄うす彩さい色しきした陽かげ炎ろうが
おぼあらかわ臙あわいに顛あわいれた風情の連中が、行違ったり、出会ったり、大勢の会積
 するのが、間あわいの隔あわいつた時分から——西河岸の露店の裸火を、ほん
 のりと背後うしろにして軒燈明の寝静まった色の巷ちまたに引返す、——この
 三人の目に明かに見えたのである。

「あれだ、玄德……」

見ても分る。清葉のその土地子とちっこに対して、徳と位と可懐味なつかしみの有るのに対して、お孝は口の中うちつぶやに呟いた。

「千世ちゃん、お放しでないよ、……葛木さん、横町へなんか躲かわしては卑怯だことよ。……」

「何が可恐こわくつて遁にげるものかね、悪い事をした覚おぼえは無ない。」

「ただ、口説いて見たばかりだつてね。」

「そしてだ、見事に刎はねられたから可いじやないか。」

「嘘うそばかり、口説けもしないんじやありませんか。」

「それも、評判かい。」

「まずね。」

「いや、破れかぶれ、何を隠そう。言出いすまいとは思おもつたけれど

も、凡夫の浅間しさに、つい、酔った紛れに。」

「おや。」

「が、酒の勢を借りて、と云うのが、打明けた処だろう——しかも今夜——頭から恐入らされたよ。」と、もう一呼吸、帽子を深草、蓑より外套は見窄らしい。

これは蓋し事実なのである。

お孝は、一足前立った、身を開いて、鈴を張ったような瞳に一目凝視めてちよつと頷きながら、

「隠さず、白状をなすつたから、私がつかまって行くのは堪忍して上げます。……打棄つた清葉さんも豪いけれども。……」

で、立直つて凜とした声、

「拾い手が立派です。……威張っていらつしやい。そんなに可恐こわがる事は無いわ。」

「いや、恐れはせん、が、面目ないのだよ。」と窘すくまるばかり襟うつむに俯向うつむく。

齊ひとしく俯向うつむいて、莞爾にこにこ々々と笑つてばかり、黙つて、ついて歩あ行るいた、お千世が、衣きぬの氣勢けはいにそれと知つて、真先まっさきに、

「今晚は、」

「おお、千世ちいちゃん。」

いわゆる口説はいて刎はねられたと云う恋人に、しかも同じ夜よ。突落なされた丸木橋ながれの流ながれに逆らつて出逢つたのである。葛木は次の瞬間きづかを憂慮きづかつて、靴きの先から冷ひやくなつた。

お孝が、横合から、

「御参詣おまいりですか、清葉姉さん。」

「は……」

と、行違つて、温容しとやかに見返りつつ、

「姉さんて、可厭いやですよ、ほほほ、人が悪いわ。」

と、すつと通つた。

知らぬ振か、実際それとも、面おもてを蔽おおうたので認めなかつたか、

心付かない様子で通過ぎたの、トお千世ちよとが袂たもとを曳いたのに、葛木は宙を行くように、うかうかと思わず別れた。

——お孝——

「姉さんて、可厭ですよ、ほほほ、人が悪いわ。」

二十八

「ちよツ、玄徳め。」

と、投げたように、袖を払って、拗すねみ身に空の雁かりの聲。臙おぼろを仰いで、一人立たちどま停とつた孫権を見よ。英氣さつそう颯さつ爽そうとしてむしろ槩ほこを横よこたえて詩を赤壁に賦ふした、白面の曹そう操そうの概がいがある。

前へ行く二人の影に、その通る声で、こつちから、

「通越し。」

と浴びせたのは、稲葉家の我家うちへ曲る火の番の辻であつた。すぐに、カタカタと追お継いつて、

「千世ちゃん、清葉さんの長襦袢ながじゆばんを見たかい。」

「ええ、可いわねえ。」

「色が白くて、髪が黒い処へ、細りほっそしてるから、よく似合うねえ。年とし紀よりは派手なだけけれど、娘らしく色気が有つて、まことに可い。葛木さん、ちよいと、あすこへ惚れたんじやないこと。」

「馬鹿な。」

「でも可いでしよう。」

「長襦袢なんか、……ちつとも知らない。」

「まあ、長襦袢を見ないで芸者を口説く。……それじや暗夜の礫やみよつぶてだわ。だから不可いけないんじやありませんか。今度、私が着て見せたけれど、座敷で踊るんでないとちよつと着憎い。……口惜くやしいか

ら、この妓こに拵こしらえて着せましようよ。」

やがてお千世が着るようになったのを、後にお孝が気が狂つてから、ふと下に着て舞扇もてあそを弄んだ、稲葉家の二階の欄干てすりに青柳の糸とともに乱れた、纏もつる玉の緒の可哀あわれを曳ひく、燃え立つ緋ひと、冷い浅黄と、段染だんぞめの麻の葉鹿かの子は、この時見立てたのである事を、ちよつとここで云つて置きたい。

ついで序に記すべき事がある。それは、一石橋からこの火の番の辻に来る、途中で清葉に逢つた前。

縁日はもう引汐ひきしおの、黒い渚なぎさは掃いたように静まった河岸かわの側で、さかり場からはずツと下さがつて、西河岸たもとの袂たもとあたりに、そこへ……その夜よは、紅い涎よだれ掛かけの飴屋あめやが出ていた。

が、それではない。

桜草をお職にした草花の泥鉢、春の野をひとかき一欠かいて来たらし
 く無造作に荷を積んだのは帰り支度。かかとしり踵を臀の片膝立。すべりと
 元はげた坊主頭へ縞目しまめの立つた手拭てぬぐいの向むこう願はちまき卷。円顔ほおじわで頬皺
 の深い口おおきの大きい、笑うと顔一杯になりそうな、半白眉ふつせの房りした
 爺じいさま一人、かかんてらの裸火の上へ煙管きせるを俯うつむ向け、灰吹から狼煙のろし
 の上る、火氣かきに翳かざして、スパスパと吸すつて、涎掛よだかの飴屋と何か云
 つて、アハハ、と罪も無なげに仰あや向むいて笑わらつた、……その顔かほをこつ
 ちで見ると、葛木くずきに寄よ継つつて、一石橋いしはしから来きたお千世ちよが、
 「ああ、お爺おぢさんが。」と云いうと斉ひとしく、振ふ払はうようにして駆出かけだ
 したのであつた。

「可愛いわね。」

それを透かして、写絵の楽屋のごとき、一筋のかんてらに、顔と姿の写るのを、わざと立淀んで、お孝がなが視めて、

「ねえ、ちよいと。……生意気盛りの、あの時分じや、朋輩の見得や、世間への外間で、かかえぬし抱主の台所口へ、見すぼらしい親身

のものの姿が見えると、つんと起たつて、行きゆもしないお稽古だの、寝坊が朝湯へ行き兼ねないのに、大道さなか、（お爺さん。）——
 —ええ、お千世はあの人の孫なのよ、——可愛ツちやないのねえ
 。

羆の筒袖

二十九

「阿爺おやじどの、阿爺おやじどの。」

「はい、私わしかねえ。」

橋から橋へ、河岸の庫くらの片暗がりを遠慮らしく片側へ寄つて、

売残りの草花の中に、蝶の夢には、野末の一軒家の明あかり窓まどで、

かんでらの火を置いた。荷は軽そうなが前まえ屈かがみに、てくてく帰

る……お千世が爺じいの植木屋じんべい甚平、名と顛はちまき卷まきは娑婆しやば気けがある。

背後うしろをのさのさと跟つけて来て、阿爺おやじどの。——呼声しゆざやは朱鞞しゆざやの

大刀だんびら、黒羽二重、五分月代ごぶさかやきに似ているが、すでにのさのさであ

る程なれば、そうした凄味すこみな仲蔵ではない。

按あんずるに日本橋の上へは、困った浪花節の大高源吾が臆おく面めんもなくあらわ顛あれるのであるが、いまだ幸に西河岸へ定九郎の出た唄を聞かぬ。……もつともこのあたり、場所は大日本座ひのきの檜舞台であるけれども、河岸は花道ではないのであるから。

変な好みもえぎの、萌葱もえぎがかった、釜底形かまぞこがたの帽子をすツぽり、耳へ被かぶさつて眉の隠るるまで低のめずらした、脊かたのずんとある巖がんじ乗しようづ造くり。かてて加えて爪皮の掛った日和下駄で、見上げるばかり大

いのが、もくもくとして肩も胸も腹もなく、ずんぐり腰の下まで着込んだのは、羆ひぐまの皮を剥むいた、毛をそのままにした筒袖である。これがもし対ついたけ丈で、赤皮の靴はを穿けば、樺太の海賊であるが、

腰の下の見すぼらしさで、北海道の定九郎。

見よかし羆の袖を突出し、腕を頤のあたりへ上げ状に拱いた、
手首へ面を引傾げて、横睨みにじろじろと人を見る癖。

「帰るのかあ。」と少し訛る。

「はい。」

むかし権三は油壺。鯨蔵から出たよな男に、爺さんは、き

よとんとする。

羆は件の横睨みで、

「おい、帰るのかあ。」

「家へかね。」

「うむ。」と頷く。

「帰りますよ、はい。」

「帰ると……ふん。どこか道寄りはせんのですかい。」と、悪く横柄な癖に時々変徹に丁寧なり。

「道寄りとおっしゃりますと?……」

「何よ、あれだ、お前、今あすこで。」

と人指ひとさし一本、毛の中へちよいと出し、

「あれよ、芸者と少い男わかと三人連に逢うたでしようが。」

「はい、はい。」と大な口おおきを開けて続けざまに頷なきながら、目はかえつて半ば閉じて、分別したは老功也。

「知ってるだろうが、姉さんはお孝と云うのだ。少い妓こはお千世よ。」

「さようでございます、はい。」となお胡散らしく薄目で見上げる。

「阿爺どのは、どうやら大分懇意らしい様子ですな。」

「ええ、いいえ、些少の。何、お前さま。何かその、私に用事で。」

「火を一つ貸してくれ。」

と云う、煙草より前に、蔵造りの暗い方へ、背を附着け、ずんぐりと小溝を股に挟んで大きく蹲み、帽子の中から、ぎろぎろと四辺を見た。が、落こぼれたような影もまばらで、開いているのは、地藏尊の門と、隣家の煙草屋の店ぐらいに過ぎなかった。

爺さんは遁腰に天秤を捻って、

「さあ、お点けなさりました、だが、お早く願いますので、はい。」

三十

「聞くだけ聞けば用は無いだ。」

例の訛った下卑た語調。圧おしは利かないが威おどかすと、両切の和煙

草ろうまきを蠟卷ろうまきの口に挟んで、チュツと吸って、

「な、阿爺おやしどの、お孝が今だ、お前に別れて帰り際に、（待つて
るからおいで、きつとだよ。）と言うたではないですかい。……

違やせまいが、な。」

爺さんは、面かお中じゆうの皺しわへ皺しわを刻んで、

「ええ、ええ、さような事もござりましたよ。」

「秘かくさずとも可いい。な、阿爺どの。お前は何だ、内の千世の奴の親身でしようが。孫娘に用が有つて逢いに来たことが二三度あるです、で、俺は知つとるですわい。お前は何か、しかし俺の顔は知らんですか。」

と釜底帽、一名（のつぺらぼう。）とも云わるる、青ぺらの鰐つばを撈むしり上げて、引傾ひきかたげて剥はいで見せたは、酒気さかけも有るか、赤ら顔のずんぐりした、目の細い、しかし眉の迫つた、その癖、小児こどものような緊しまりの無い口をした血氣ざかりおのこ壯の漢である。

「へい、いいえ、お顔は存じておりますほどもござりませんが、その上うわつぱり被うわつぱりの召ものでござります、お見事な、」

こう云つたのはひぐま熊の筒袖。

「稲葉家様の縁起棚の壁でござりますよ、縁側などに掛つていて
 拝見したことがござりますよ。はい。何でござりますか、それで
 は旦那様は、」

「うむ、内のもの同然だ。」とあご頤を撫でる。

界かいわい隈では、且つ知つて且つ疑う。土地に七不思議が有ればそ
 れはその第一に数えて可い。一石橋の河太郎、露地の駒下駄、お
 竹蔵などとともに、この熊の皮がそれである。湿しつぷか深あぶらそうあぶらな膏あぶらぎ
 ったちよんぼり目をおつとせい膾おつとせい膈せい、毛並の色で赤熊とも人呼んで、い
 わゆるお孝の兄さんである。……本名五十嵐いがらし伝吾、北海道産物商
 会主とある名札を持つから、成程膾膈膈も売るのであろうが、他

に何を商つて、どこに住むか、目下の処いまだ定かならずである。それ、後家の後見、和尚の姪めい、芸者の兄、近頃女学生のお兄様もつと新しく女優の監督にて候ものは、いずれも瓜うりの蔓つるの茄子なすである。この意味において、知るものは、お孝における熊の皮を一方ならず怪あやしむのであつた。

赤熊は指揮さしずする体に頤しやくで掬くつて、

「な、阿爺あやじどの、だから俺には何も秘かくすことは要らんですわい。」

「ええ、ええ、別に秘すではござりません、（これからお茶屋へ行つて一口飲むから、待つてるからきつとおいで。）と、はい、そのきつとでござりますが、何の、貴下様、こんな爺おやじに御一座が

出来ますもので。姉さんがただ御串戯ごじようだんにおつしやつたのでござりますよ。」

「串戯ではなかったがい。俺はな、あの、了しまいかけた見世物小屋の裏口に蹲しゃがんで聞いとつたんだ。」

赤熊のこの容態では、成程立聴たちぎきをする隠れ場所に、見世物小屋を選ばねばならなかつたろう、と思うほど、薄気味の悪い、その見世物は、人間の顔の彪犬むくであつた。

「それは、もし、万ヶ一ほんとうに仰有おつしやつて遣わされたにしました処で、私てまえは始めからその気では聞きませなんだよ。」

「どうでも可い。それは構わんが、俺が聞きたいのは、お前まに後から来い、と云うて、先へ行つたその家の名ですわい。自分の

内でない事は知れておる。……そりやどこですかい、阿爺どの。」

「……………」

「ああん、阿爺い。」

「さあ、何とか云うお茶屋であつた。」と、ひとりごと 独言のように云つて、はちまき 鬮卷をそ反らして仰向く。

三十一

赤熊は、チエと俯向けうつむの股へ唾つばを吐いて、

「今時分、どこの茶屋が起きておろうで。待合に相違ないがい、阿爺い、かく秘さんと云え、阿爺い。自分が来いと云われた先の名を

忘れると云うがあるもんですかい。悪くすると為にならんですぞ。」と、教員らしい口も利く。

「さあ、何か存じませんが、待合さんかも、それは分りませんが、^{てまえ}てんで私の方で伺う気はござりませんで、^{かしらじ}頭字も覚えませぬよ、はい。」

「で、何か。」

とちよつと睨^ねめつけた、^{あらたま}が更つて、

「あの、野郎は何かい、あれは、ついぞ見掛けぬ奴だが、阿爺は知つとるのですかい、奴をですがい。」

「ええ、^{てまえ}私も今までお見掛け申しはしませんので、はい、いずれお客様でござりましょう。」

「客には違わんで、それや違わんで。どっちの客だ知つとるだろ
うが。」

「それは、もし、お尋ねまでもござりません、孫めがお附き申し
ておりましたよ。で、（旦那様、お初に。どうぞ何分。）と私御
挨拶をしました処で、爺の口から旦那様が嬉しい、飲ましてやろ
う、と姉さんが申されたのでござりましたよ。」

跡方も無い嘘は吐^つけぬ。……爺さんは実に、前刻^{さき}にお孝にもそ
の由を話したが……平時^{いつも}は、縁日廻りをするにも、お千世が左棲
を取るこの河岸あたりは憚^{はばか}っていたのである。が、抱^{かかえぬし}主の家
へは自分の了^{りようけん}筒でも遠慮をするだけ、可愛い孫の顔は、長者
星ほど宵から目先にちらつくので、同じ年^{としごころ}齡の、同じ風俗^{ふうう}の若

い妓こでも、同じ土地で見たさの余り、ふとこの夜よに限つて、西河岸の隅へ出たのであつた。

帰りがけの霞の空の、真まんなか中おおを蔽おほう雲を抜けて、かんでらの前へ、飛出したお千世の姿は、爺さんの目には、背後うしろの蔵くらから昨夜ゆうべの雛ひなが抜出したように見えて、あつと腰を抜いて、ぺたんと胡坐あぐらを搔かいて、ものを言うより莞爾にこにこ々々としていたのである。

その間にお孝は、葛木と二人で参詣を済まして、知らぬ振して帰るも可い、が、かえつて気まづく思わせよう。

(お爺さんけしぼうず虞美人草はないの、ぱつと散る。)桜草の前へ立つた時、……お孝に挨拶をした爺さんが、(これは旦那様。)とその時葛木にお辞儀をしたので、

地蔵様へお参りして、縁を結んで来た矢前やさき——旦那様は嬉しいね——で、それから引上げる、待合の名をそこで教えて、旦那様に見立ててくれた礼心にお爺さんには今夜一晚、……私が玉をつけて可愛いお千世を抱かして上げよう。……来て一所にお寝、
串じょうだん戯しじゃない、きつと待つてる。……と云つた。

仔細しさいはそうした事なのである。

赤熊あらかわが顛あれた。

この毛むくじやらを、稲葉家の縁起棚わきの傍わで見た事があるとい
うだけ、その血相と、意気込みで、様子を悟つて、爺さんは、や
がて、押おくり返し何と言われても、行つた先を饒舌しゃべらなかつた事
は言うまでもない。

「御自分、ついて行つて見なさりや可よかつた。」

何か知らぬが、お千世が世話になる稲葉家に退のかぬ中の男、と
 思うだけ、虫を堪こらえて飽くまで下手に出た爺さんも、余りの押問
 答、悪執わるしつこ拗おさに、こう言つて焦じれたほどである。

知らぬ知らぬで、事は済む、問われる方が焦これたくらい、言ことば
 数かずを尽すだけ、問う方の苛いらだ立ち加減は尋常よのつねではない！
 「この業突張ごうつくばり、何だとツ。」

縁日がえり

「まあ、お前さん、怪我をしやしませんか。」

植木屋の布子ぬのこの肩に、手を柔かに掛けた、弱腰も撓たわむと見える帯腰に、もの優しい羽織の紋の、藤の細いは清葉であつた。

「拷問ごうもんしてやる。」

赫かつとなつた赤熊が、握にぎりこぶし拳かぶを被ると斉ひとしく、かんでらが飛ん

で、真暗まつくらに桜草が転げて覆かえると、続いて、両手で頬を抱えて、

爺さんは横倒れ。

苦あつとも言わせず、踏のめす気が足を挙げた赤熊は、四辺あたりに人は、

邪魔は、と見る目に、御堂みどうの灯ともに送おまらるるように、参詣まいりを済まし

て出た……清葉が、臃おぼろの町に、明あかるいばかりの立姿。……それと見

て、つかつかと、小刻みながら影が映す、衣の色香を一目見ると、じたじたとなつて胴震いに立窘むや否や、狼狽加減もよつぽどな、一度駆出したのを、面喰つて逆戻りで、寄つて来る清葉の前を、真角まっかくに切つて飛んで遁げた、赤熊の周章あわてた形は、見る見る日本橋の袂たもとへ小さくなつて、夜中に走る鼯いたちに似ていた。

そつちは見返もしないのである。

「お年寄を、こんなこと、何て乱暴なんだろう。」

「はいはい。」

爺さんは居ざり起きて、自分がたしなめられたごとく、畏つて、やつと口を利く。……

「恐入りましたござります、はい。」

「音がしましたわ、串戯じょうだんではありません。さぞお痛かつたで

しようねえ。怪我をしたんじやありませんか。」

前刻さつきから響きこいていた、鉄棒かなぼうの音が、ふツと留やむと、さつさつ

と沈おちめた鞋わらじの響きこき。……夜廻りの威勢の可いのが、肩を並べてず

つと寄よつた。

「どうした、」

「どうしたんだえ。——やあ、姉さん。」

「頭かしらたち、御苦勞です。……今、そこへ駆出おおきして行つた大な男な

んだよ。」

「膾おつとせい膾せい臍せい。」

「赤熊。」と二人は囁ささやいて、ちよつと目配めくばせ。

「姉さん、こりや何かい、お前さんお係かかり合あいなんですかい。」

「いいえ、私はただ通りかかったばかりなんです。でもまあ遁げ
てくれて可むかかったけれど、抵むかつて来たらどうしようかと思つたよ。

……可哀相に、綺麗な植木の花が。」

清葉は桜草の泥鉢を、一鉢起して持ちながら、

「手伝つて、そして、よく見て上げて下さいな。遅うござんすか
ら、私は失礼ですが。」

一人は組合の看板を、しやん、と一ツ膝に控えて、

「御心配にや及びません。見てやりますとも。」

「では、お爺さん、お大事になさいまし。お気をつけなさいまし
よ。」

「はいはい、あなた方の御志、孫も幸福しあわせ。それが嬉しゆうござります。」

とツちて、着きも無いことを云うのを、しんみりと聞いて、清葉はなぜか、ほろりとしたが、一石橋の方へ身を開いて向返った処で、衣紋をつくつて、ちよつと、手招まねく。

鉄棒小脇に搔込みたるが一人、心得てつかつかと寄つた。

「ええ……え、腕車くるまに、成程。ええ可うがす、可うがすとも。そりや仔細わけえ有りやしません。何、私わつしたちに。串戯わづらじゃありません。姉さん、串じよ……、そうですかい、済まねえな。」

そのまま見送つて小戻りする。この徒てあいも清葉が戻もどり路みちの方かたを違たがえて、なぞえに一石橋の方へ廻つたのは知らずにいたろう。

サの字千鳥

三十三

「何だか、唐突だしぬけに謎見たような事だけれど、それが今夜の事の抑々そもそもというのだから、恥辱はじも忘れて話すんだがね……

上野から日本橋へ来る電車——確か大門だいもん行だったと思う——品川行にした処で、あの往復切符、勿論乗換札じゃないのだよ。……その往か復ゆきかえりか、どっちにしる切符の表に、片仮名の（サ）の字が一字、何か書いてあると思いますか。」

葛木は卓ちやふだい子だい台だいに乗せた寄鍋に着けようとした箸はしを、（まだ。）とお孝に注意されて、そのまま控えながら話す。

お孝は時に、猪口ちよこを取って、お千世の酌を受けたのである。

「サの字。」

「考えるに及ばないよ、そんな字は一つも無い。ところが、松坂屋の前を越して、あすこは、黒門町を曲ろうとする処だ。……ふつと！ 心から胸へ、衣きものの襟へ突通るような妙な事を思ったのが、その（サ）の字、左の手に持っていた切符を視みて、そこにサの字が一字あつたら、それから行つて逢うつもり。」

「清葉さん。」と薄目で見越して、猪口は紅を嚙かんだかと思う、
微笑ほほえみのお孝の唇。

「……止そう、そんな事を云うんなら。」と葛木は苦笑して、棒
 縞お召の寝々衣ねんねこを羽織った、胡坐あぐらながら、両手を両方へ端然きちんと置
 く。

つぶし 潰島田を正まっすぐ的に見せて、卓子台の端にぴたりと俯向うつむき、

「謝罪あやまった、謝罪あやまった。たつて手前の方から願いましたものを。
 千世ちいちゃん、御免なさい、と云つて、お前さんもおややまり。」
 と言憎いから先繰りに訛なまつて置く。

「あら、姉さん、私は何にも。」とお千世は熱かった銚子ちょうしを持
 添えた、はつと薰る手巾ハンケチを、そのまま銚子を撫でて云う。

「だつて、今、（行つて逢うつもり。）と、こちらがお言いなす
 った時は、直ぐに清葉さんとお思いだろう。」

「ええ、そりや思つてよ。」

「そら御覧、思つたつて饒舌しやべつたつて、罪は同じくらいだよ。それに、謝罪あやまするには、お前さんの方が役者が上だからさ、よう、ちよいと。」

「貴方、御免なさいまし、ほほほ。」

葛木はしかし考えさせられた様子が見えて、

「成程、思つたつて饒舌つたつて、違いは無いか。いや、そうまでは、なかなか悟れない。……と云うのはやはり色気なんです。

……極きまりは悪いがね。

そのサの字なんだ。切符の表に、有るべき理由あきらの無い一字が、もし有つたら、いつも控え控え断念あきらめて引退ひきさがる、その心がきつ

と届くぞ！……想が叶う。打明けて言えば清葉が言う事を肯きいてくれる。思切つて打ぶ着つかろう。サの字が無ければ、今夜も優柔おとなしく、と言えれば体裁よが可よい、指くわを銜くわえて引込もうと、屹きつと思つて熟じつと視ると、波打つ胸の切符に寄せる、夕日に赤い渚なぎさを切つて、千鳥が飛ぶように、サの字が見えた。」

「ああ。」とその千鳥を見るように、引入れられて、屏風はずれに前髪まぶたを上げた、瞼まぶたの色。お孝の瞳うっとりは恍惚うっとりと、湯気おぼろの朧おぼろに美しい。

葛木も連れられて、夢を見るように面おもてを合せて、

「明あかるいね、ここの電燈は何燭あかるだろう。」

「五燭よ、ほほほほ。」とお千世が花やかな笑声。鍋は暖く霞ん

だのである。

三十四

「あれ……この妓こが笑う。」

と葛木も笑いながら、

「客がこれだからその筈はずの事だけれども、私の行く家うちが、元来甚だ立派でないのだ。ね、座敷の電燈が五燭なんだよ。平時いつもは、そんなでもなかったが、過般このあいだ中、連があつて、二人で出掛けた、その時、その千世ちゃんが出来たんだね。確か……」

お千世うなずが頷く。

「覚えてゐる、それを知つて、笑うんだ。私のような、向う見ずに女に目の眩くらんだものに取つては、電燈の暗いなんぞちつとも気にはならないがね、同伴つれの男は驚きましたぜ。何しろ火鉢つかに掴つかまつて、しばらく気を静めてゐると、襖ふすまや障子が朦朧もうろうと頭あらかれるけれども、坐つた当座は、人顔も見えないという始末だからね、余り力を入れて物を見るので、頭が痛いと言うんだよ。その妓こも知つてるけれども、同伴つれの男が。

客の無い閑ひまな家うちだし、不景気だし、いづれ経済上の都合だろうから、余分な御祝儀の出ない客が、（明あかりを直せ。）も殿様じみるから、同じメートルで光は三倍強という重宝な電球ね、あいつを寄附しようとなつて、……来ていた清葉が、」

「東西、黙って。」

と笑顔を お千世 に向けて、トわぎと睨にらんで見せる。

「私、何にも言やしませんわ。」

「いや、何とでもお言い、こうなれば意地で饒舌しやべる。」と呶ぐいと煽あおる。

「お酌。」

と自分でお孝が、ツツと銚子を向けて、

「それに限るの。貴郎あなたは気が弱いから可厭いやさ。」

「ところで、……清葉が下階したへ下りて、……近所だからね、自分の内へ電話を掛けて、婢おんなにいいつけて、通りへ買いに遣った、タングステンが、やがて紙包みになって顕れて、芝居の月の書割の

ように明るくなった。

そこが、お鹿（待合の名。）の上段の間さ。」

「あら、串じょうだん戯の間、可いいわねえ。」

「いや、その串戯じゃない、御本陣式、最上等の座敷の意味だ。

人の好いい、気の好いい、（お鹿。）の女房が喜んで、貴方の座敷だ——貴方の座敷だと云つて通す。まるで新座敷一ツ建増いきおいした勢だ。素ばらしいもんだね、こう見えても。」

「さすがはね。」

「串戯じゃない、……いや、その串戯ではない座敷の上段へ、今夜も通された——サの字の謎から、ずっと電車で此地こっちへ来てだよ。

……

平時いっもと違つて、妙に胸がどきつくのさ。頭の頂上てっぺんへ円鬚まるまげをちよんと乗せた罪の無いお鹿の女房が、寂寞ひっそりした中へお客だから、喜んで莞爾にこにこ々々するのさえ、どうやら意見でもしそうでならない。

飯は済んだ、と云うのは、上野から電車で此地へ来る前に、朋とも達もたち三人で、あの辺の西洋料理で夕飯を食べた。そこで飲んでね、もう大分酔つていたんです。可訝おかしくふらふらするくらい。その勢で、かつとなる目の颯さつと赤い中へ、稲妻と見たサの字なんだ。

考えれば、千鳥の知らせでもなく、恋の神のおつげでもない。酒のサの字だったかも知れないものを。……その酒さえ、弱身のある人が来て対向さしむかいになると、臆面の無いほてった顔を、一皮剥む

かれるように醒めるんだからの。お察しものです。」
 カチリと力無く猪口を置く。

梅ヶ枝の手水鉢

三十五

「座敷へ入ると間も無くさ、びりびり硝子戸がらすどなんざ叩破りそうな勢、がらん、どん、どたどたと豪い騒えらぎで、芸者交りに四五人の同勢が、鼻唄やら、高たかわらい笑わめ。喚くのが混多ごったになつてね。上り込むと、これが狭い廊下を一つ置いた隣座敷へ陣取つて、危いわ、

と女の声。どたんふすまと襖ぶに打つかる音。どしん、と寝転ぶ音。――
くすのまさしげ
 桶けの正成ちようずがーと梅ヶ枝えの手水鉢ちようずで唄ばい出す。

座敷を取替えて上げよう、こつちは一人だから。……第一寄進
 に着いた電燈に対してもお鹿の女房が辞退するのを、遠慮は要ら
 ない、で直ぐに、あの、前刻さつきのあれ、雛ひなの榮螺さざえと蛤はまぐりの新聞包みを
 振下ふるさげて出た。が、入交いれかわるのに、隣となの客と顔が合うから、私は
 裏梯うらばしご子を下りて、鉢前はちさきへちよつと立つた。……

ここに、朝顔形の瀬戸の手水鉢てが有るんです。これがまた清葉
 が寄進よしんに附いたのさ。お鹿の内には、まだ開業当時かいはんというので手
 水鉢ても柄杓ひしやくも無かつた。湯殿ゆどのの留桶とめおけに水を汲くんで、箕すの子この
 上に出してある。恐らく待合まちあの手水鉢てに柄杓ひしやくの無いのは、厠かわやに戸

の無いより始末が悪い。右は早速調ちようだつ達に及んだけれど、桶はそのままになつていたので、清葉が心付いて、いつか、女房が勘定を届けか何か、滝の家へ出向いた時、火事見舞に貰ったのが、まだ使わないで新しい、お役に立てば、と持たして返した。……知つての通り、清葉の家は、去年の火事に焼けたんだね。

何ですよ、奥庭に有つた手水鉢を見ましたがね、青銅のこんな形、とお鹿の女房は仕方をして、そして竜たつの口を捻ひねると、ザアです。焼けてもびくともなさらない。すっかり青苔を帯びた所が好いなんのツて、私に話した。

惚れた芸者の工面の可いのは、客たるもの、無心を言われるよりなお怯ひるむ、……ここでまた怯ひるまされた。

清葉の手水鉢、でいささか酔覚の気味。二階は梅ヶ枝の手水鉢。いや、楠の正成だ。……大将も惜い事に、懐中都合は悪かったね。

二階へ返つて、小座敷へ坐直る、と下階で電話を掛けます。また冷評すだろうが、待人の名が聞える。」

二人は黙つて微笑むのみ。

「ねえ、そうした電話が筒抜けに耳へ響くのは、事は違うが、鳥屋の二階で、軍鶏しやもの鳴声を聞くのと肖にている。故に君子は庖ほうちゆ厨うを遠ざく……こりや分るまいが、大尽だいじんは茶屋の構かまえの大からんことを望むのだとね。

(誰だ、誰だ、誰を掛けてるんだ。)(何、清葉だ、清葉とは誰

だ。一) 一座の芸者が小さな声で、(滝の家の姉さんよ。)(馬鹿、清葉が、こんな家へ来るもんか。)

と隣座敷で憚はばからない高話。」

「お酌つぎ……千世ちゃん、生意気だね。お孝なら飛んで来る、と言やしないか。」

「誰も、そんな事を言いはしませんよ。」とお千世が宥なだめるように優しく云つて内端うちわに酌しやくぐ。

「口惜くやしいねえ、……(清葉が来るもんか。)呼んで下すつた、それが私で、お孝が、こんな家へと云つて貰もらいたかつた。……私はそこへ手水鉢てみづばちなんぞじゃない、摺鉢すりばちと采配さいはいを両手に持つて、肌脱はだぎになつて駆込んで驚かしてやったものを。」

「でも、何だ、お前さんとは、今しがた逢ったばかりじゃないか。」

「ですから、今度つから、楠の正成で、梅ヶ枝をお呼びなさいよ、……その手水鉢へ、私なら三百円入れてやりたい、とこつちでも思うばかりだから、先方^{さき}さまでも、お孝がこんな家へ来るもんか、とは言わないわね。……貴方お盃を下さいな、……チョツ口惜いねえ、清葉さんは。……」

三十六

「少々加減が悪くって、内で寝ていた、と云って、黒の紋^{もんつき}着の

羽織で、清葉が座敷へ。

前後あとさき七年ばかりの間、内端に打解けたような、そんな風采なりをしていたのは初めてかと思う。もつともちよつとひく感冒かぜと、眩め暈まいは持病で、都合に因れば仮託かこつけでね——以前、私の朋達ともだちが一人、これは馴染なじみが有つて、別なある待合へ行つた頃——ちよいちよい誘われて出掛けた時分には、のべつに感冒と眩暈で、いくら待つても通つて見ても、一度も逢えた事は無かつたんだ。もう断あ念きこらめていた処、その後宴会があつて、あるお茶屋へ行くと、その時、しばらく振で顔を見た。何だか、打絶えていた親類に思掛けず出逢つたような可懐なつかしい気がしたつけ。それが縁で、……時々、と云つても月に二三度、そのお茶屋で呼ぶとね、三度に二度は来

てくれる。

その女中頭がしらをしていたんだ、お鹿の女房と云うのは。」

「知っていますわ。」

「気心は知ったり、遠慮は無しで、そこへ行くようになってから、余り月日を置かないで、顔だけでも見るのは、やつとおとし一昨年の夏からだと思う。……

ところで、よく、あんなで座敷が勤まるよ。……もつとも私なんぞは座敷の中へは入るまいが、あの人と来たら、煙草は喫のまず、酒は飲まず、」

「ただ、貯たまるばかり。」

「まあ、堪忍したまえ。猪口は唇へ点つけるくらいに過ぎますまい、

朝顔の花を噛むように、「

「敗軍まけいくさの鬱憤うっぶんばらしに、そのくらいな事は言つても可いのね。」

「堪忍したまえ。酒を飲まない芸妓げいしやぐらい口説き憎いものは無い。」

「じゃ、そつちこつち、当つて見たの。」

「いや、人はどうか私一人としてはなんだ。ところで今夜だ——御飯は済んだと云う、御粥おかゆを食べたんだとさ。」

「御養生でおいで遊ばすのね。……それから、」

「お鹿かみさんの女房も、暖るものが可かろうと云うんで、桶飩おけうどん。」

「おやおやおや。」とお孝は、がっかり、も一つうんざりしたら

しい。

「……ここに八やつがしら頭の甘煮うまにと云うのが有ります。」

と葛木は、小皿と猪口の間を、卓子台ちやぶだいの上で劃しきつて、

「一度讚ほめたが、以来お鹿の自慢でね、きつと通しものに乗つて
出ます。……今日あたり土曜から日曜で私が来そうだと思ふ日は、
煮て置くんだとお世辞を言つた。が、ああ、十とウに九ツこれも見
納めになろうも知れん、と云うのは（サの字。）の謎の事。……
一度口へ出して、ピシリと遣られる、二度とは面おもては向けられまい、
お鹿も今夜ぎりと思うと何となく胸が迫つて卓子台の上が暗かつ
た……」

お孝はポンと楊枝ようじをくべた、すうツと帯ゆすを揺つて焦じれたそう

に、

「ちよいと、まあ、待つて頂戴よ。お粥腹のお姫様ひいさまを饅頭で口説いて、八頭を見て泣いたつて、まるでお精霊様しょうろさまの濡場のようだね。よく、それでも生命いのちがあつて帰つて来たよ。しつかりして下さいよ、後生だから、お前さん、私が附ついてるから。」

で、するり卓子台の縁すべを這つて、葛木の膝すねに手を掛ける。

「ああ、痛い。」

そのまま、背中をトンと凭もたして、瞳を返すと、お千世を見て、「どうした、お爺さんは遅いじゃないか。」

「あら、姉さん、来るもんですか。」

「私は来るつもりで待つていたのに——その襖ふすまを開けて御覧よ、

居るかも知れない。」

「まあ、」と可愛く、目をぱちぱち。

「可いからちよいと御覧。」

と言う、香の煙こうに巻かれたように、跪ひざまずいて細目に開けると、
 帳紅いちようこうけい閨いに、枕が三つ。床の柱に桜の初花。翠す

口紅

三十七

「御維新ちつと前だつて、芝の大門通りの足袋屋に名代娘の美人

が有つた。

その時分、増上寺の坊さんは可恐おそろしく金を使ったそうでね、怪しからないのは居いまわり周囲の堅気の女房で、内々いづれ囲われていたのさえ有ると言うのさ。その増上寺に、年としわか少年美僧で道心堅固な俊才えらいのが一人あつた。夏の晩方、表町へ買物が有つて、麻あしの法衣ころもで、ごそごそと通掛ると、その足袋屋の小僧の、店みせ前まへへ水を打つていた奴、太粗いけぞんざい雑ざいだから、ぎつと刎はねて、坊さんが穿はきたての新しい白足袋を泥だらけにしたんだとね。……当時は電車で、毎々の事だが。

娘が夕化粧の結ゆい綿わたで駆出して、是非、と云つて腰を掛さして、そこは商売物です。直ぐに足袋を穿は替かえさせるとなつて、かねて

大切なお山の若旦那だから、打たての水に褌つまを取ると、お極きまりの緋縮緬ひぢりめんをちらりと挟んで、つくまつて坊さんの汚れた足袋を脱がそうとすると、紐なんです。……結んだやつが濡れたと来て、急には解けなかった為に口を添えた、皓齒しろはでその、足袋の紐に口紅の附いたのを見て、晩方の土の紺泥こんでいに、真紅の蓮花れんげが咲いたように迷出して、大墮落をしたと言う、いずれ墮落して還俗だらうさ。

こっちは悔悟かいごして、坊主にでもなろうと云うんだ。……いずれ精進には縁があります。自棄やけだから序ついでに言うが、……私は、はじめて逢った時、二十三の年、……高等学校を出ると、祝だと云つて連出して、村田屋で御飯おごを驕おごったものがある。酒は飲めずかしくま、畏

つて煙草たばこばかり吐ふかしていたので、愛想に一本、ちよつと吸つて、
歸りがけにくれたのが、」

「承知々々。」とまた笑う。

「でね、口紅がついていたんだ。」

「氣障きざだ。」とお孝は手酌である。

「坊主には縁があるつて事だよ。」

軽く清ゆすいで盃をさしながら、

「処をまた還俗さしてあげるから、もとツこだわね。可哀相に：

…そのかわり小鰭こはだの鰭を売りやしないか。」

と倦怠だるそうに居直つて、

「もし、その吸口はどう遊ばしたえ？……後学の為に承り置きた

い……ものでござるな。……よ。ほんとうに、」

「路傍みちばたでは踏つけよう、溝どぶも気になる……一石橋から流したよ

。」

「ああ、祟たたりますねえ。そんな男を、私も因果だ。」

「恐入ります、が聞いて下さい。」

「聞いて遣わす、お酌をおし……御免なさいよ。」といよいよ酔う。

「そうだ——ああお銚子が冷めました、とこう、清葉が、片手で持って、棲の深い、すんなりとした膝はすを斜はすつかいに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火かぎに翳かぎす、と節の長い紅宝ルビイ王イを嵌はめたその美しい白
い手が一つ。親か、姉か、見えない空から、手だけでおさ圧おさえて、毒

な酒はお飲みでない、と親身に言つてくれるように、トその片手だけ熟じゅつと見たんだ。……」

お孝が、ふと無意識の裡うちに、一種の暗示を与えられたように、
 掌てのひらを反らしながら片手の指を額あごに隠した。その指には、白金プラチナの
 小蛇こへびの目に、小さな黒金剛石くろダイヤモンドを象嵌ぞうがんしたのが、影の白魚のごと
 く絡まつわつていたのである。

後で知れた、——衣類の紋も、同じ白色の小蛇の卷いた渦巻であつた。

「時に、隣の間ささやの正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁ささやくように啼ないたものがある。声のしたのは、蛤かきです。動いたと見えて、ガサガサと新聞包が揺れたろうではないか。」

三十八

「(榮螺と蛤です。……)

思掛けない音に、ちよつと驚いた顔をした清葉にそう云つて、土産じゃない、汐干しおひでは時節が違ちがう。……雛ひなに供えたのを放生ほうじやう会うえ、汐入しおいりの川へ流ながしに來たので、雛は姉から預あづかりかつたのを祭まつつてゐる……先祖せんぞの位牌いはいは、妹いもうとが一人あつて、それが斉眉かしずく、と言いつたんだね。

そして御姉ごきようだい妹いもうとは、と清葉きよはが訊きくから、(実は。)と出でました。……実は、それに就ついて、と言いつたもんです。何なにに就ついてだが、自分自分にも分わらない。けれどもね……何なにに就ついたつて、あし掛あし七年

の間、ただ一度も、氣障きざな、可厭いやらしい、そんな事を、言出せそうな機会と云つては一度も無かつた。

いつも、座敷の服装なりで、きちんと芸者と云う鎧よろいを着ているのから見れば、羽織で櫛巻だけに、客に取つては馴れ易い。覺悟は有つたし、サの字の謎。……

実は、と目を瞑ねむつて切掛きっかけたが、からツきし二の太刀が続きません。酌をして下さい、と一口に飲んでまた飲んだ飲んだ。もう一つ、もう一つ酌ついで欲しい、また、と立続けに引掛ひっかけても、千萬無量の思が、まるで、早鐘のごとくになつて、ドキドキと胸へ撞つ上げるから、酒なざどこへ消えるやら。

口も濡れないどころか舌が乾く。……また、清葉が何にも言わ

ずに、あんなに煽切あおつきるのも道理だ、と断念あきらめたらしく見えて、黙つつて酌つぐんだよ。

ああ、酔よつた。」

と袖を擦並べたお孝の肩に、頭つむりを支たささえそうに頹然がっかりとなる。のお孝が向うへ、片手で邪慳じゃけんらしく、トンと突戻した、と思うと、その手を直ぐに、葛木の膝へ。敷いて重ねた腕枕うでまくらに、ころりと横よこになつて、爪先をすつと流す、と靡なびいた腰へ、男の寝々衣ねんねこの裾すそを曳ひいて、半ばを掛けた。……

「肝心な処、それから。」と自若しじやくとして言う。

「弱よわつた……」

「私わたくしを口説くわいく気で、可ようござんすか。まತ್ತたくは、あの御守殿よ

り、私の方が口説くには煩むずかしいんだから、その積つもりで、しつかりして
。」

「破れかぶれは初手からだ。構うもんか！……更あらたまつて（清葉さん）
）……」

「黙つて顔を見ましたかい。」

「惚ほれたと云うのが不ぶしつけ躰であるなら、可なつかし懐いんです、床ゆかしいんだ、慕したわしいんです。……私に一人の姉がある。姉は人の妾めかけだった。……恋ここがれた若い男が有ったのに、生いのち命にかえてある相場師の妾めかけになつた……それは弟の為だったんです。

私の父親は医師いしやだったんだよ。……と云うお医師も、築地、本郷、駿河台は本場だけれども、薬研堀やげんぼりの朝湯に行つて、二合半こなから

引掛けてから脈を取ったんだそうだから、医師の方では場違いだね。

どてら 広袖を着たまま亡くなると、看病やつれの結び髪を解きほぐす間も無しに、母親も後を追う。

姉は二十、はたち 私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母おばあさんが、あとに残った……私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母おばあさんをかかえて、裏長屋に、間借りをして、そこで、何か内職をして露命をつないでいる。私が小僧になったのは、赤坂台町の葉茶屋だった。」

膝に島田を乗せながら、葛木の色は白澄んだ。

チャランチャラン、と河岸通、五郎兵衛町を出番の金棒。

一重桜

三十九

「忘れもしない、ずっと以前——今夜で言えば昨夜ゆうべだね——雛の節句に大雪の降った事がある。その日、両国向うの得客とくい先へ配達する品があつて、それは一番後廻、途中方々へ届けながら箱車を曳いて、草鞋わらしじばき穿で、小僧で廻った。日が暮れたんです。両国の橋を引返した時の寒さしたら、骨まで透とおつて、今思出しても震えちまう。

何の事は無い、山から小僧が泣いて来たんだ。

人通りは全然無し、まるで大川端の吹雪の中を通魔のように駆けて通る郵便配達が、たった一人。……それが立停まって、チョツ可哀相にと云った。……声を出して泣きながら、声も涸かれて、やつと薬研堀の裏長屋の姉の内の台所口へ着いた、と思うと感おぼ覚が無い。浸々と降る雪の中に、ただどしんと云う音がしたって、姉が後で言い言いました。

ところがどうです……妹は妹で、その前夜から奉公先を病気で下つて、内で寝ている。

これがまた悲惨でね。……聞いて見ると、猫の小間使に行つていたんだ。主人夫婦が可おそ恐ろい猫好きで、その為に奉公人一人給金

を出して抱えるほどだから、その手数の掛る事と云つたら無い、お刺まけに御秘蔵が女猫と来て、産の時などは徹夜よっぴて、附つきりつき。生れた小猫に、すぐにまた色気が着くと、何とどうです、不潔物の始末なんざ人間なみにさせられる。……処へ、妹が女の子の癖に、かねて猫嫌いと来ていたんだものね。死ぬほどの思いで、辛抱はしたんだが、遣切れなくなつて煩いついた。(少し変だ、顔を洗うのに澄まして片手で撫でる、気を鎮めるように。)と言つて、主人から注意があつたんだとね。

祖母ばあさんは祖母で、目を煩つてほとんど見えない。二人の孫を手探りにして赤い涙を流すんじゃないか。

私は気が付くと、その夜よ、——後で妹の話を聞いて慄然ぞつとして飛

んで出たが、猫行火ねこあんかに噛着かじりついていて、豆煎まめいりを頬張ほつたが、余り腹はらが空すくいて口が乾かわいて咽喉のどへ通とらないから、番茶ばんちやをかけて搔か込んだつこつて。

内職うちやくの片手間に、近所の小女こむすめに、姉が阪東を少々、祖母さんが宵まちは待まちぐらいを教おえていたから、豆煎まめいりは到来とらいものです。

(白酒はくしゆをおあがり、晋しんちゃん、私が縁起直えんぎしに鉢はちの木を御馳走ごちそうしよう。)と、鉞落ブリキしの長火鉢ながひちの前まへへ、俎まないたと庖丁ばうていを持出もして、雛ひなに飾かつた栄螺さざえと蛤はまぐりをおろしたんだ。

重代ちゆうだいの雛ひなは、掛物かぶより良いい値ちがついて、疾とうに売うつた。有合あわせたのは土彩つちさい色いろの一いもん雛ひなです。中ちゆうにね、——潰島田つぶしまに水色みづいろの手柄てがまを掛かけた——年数ねんすうが経たつて、簪かんざしも抜ひけたり、その鬢びんの毛けも凄すげい

ような、白い顔に解れたが——一重桜の枝を持って、袖で抱くようにした京人形、私たち妹も、物心覚えてから、姉に肖にている、姉さんだ姉さんだと云い云いしたのが、寂しくその蜜柑箱みかんに立っていた。

それをね、姿見を見る形に、姉が顔を合せると、そこへ雪明りが映さして蒼あおくなるように思つたよ。姉が熟じゅつと視ながめていたが、何と思つたか、栄螺と蛤もとを旧へ直すと、入かわりに壇へ飾つたその人形を取つて、俎の上へ乗せたつけ……」

「千世ちいちゃん。」

と葛木の膝枕のまま、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻さつきそこを見せられ

た序ついでに、……（眠かろう先へお寝な。）と言われたのである。そして寂寞ひっそりして今しがた、ずるずると帯を解いた氣勢けはいがした。

四十

「寒くなつた、搔か卷まきをおくれ。」

とお孝は曲げた腕かひなを柔く畳に落して、手をかえた小袖の縞しまを、指に掛けつつ男の膝。

「姉さん、私、帯を解いてよ。」

「生意気お言いでないよ、当も無しに。可いから持つといで。」

「うまい装なりをして、」

と膚はだの摺すれる、幽きぬかな衣さばの捌さばきが聞えて、

「御免なさいまし。」と抱いて出た搔卷ひの、それも緋ひと浅黄あきの派は手てな段だん鹿かの子このであつたのを、萌黄もえぎと金茶きんの翁おきな格子なごうの伊達卷いで、ぐいと縊くびつた、白い乳房ちちうを夢ゆめのように覗のぞかせながら、卜ひざ跪ますいてお孝この胸むねへ。

襟足えり白く、起上たるようようにして、ずるりと咽喉のどまで引掛ひけながら、
「貴方あなた、同じ柄えらで頼母たのしいでしよう、清葉しみづさんの長襦ながじゆ袷ぼんと。」
学士がくしは黙もくつて額おきを圧おさえる。

「姉あねさん、枕まくらよ……」

「不ふ作法さくだわ、二人ふたりで居ゐる処ところへたつた一ひとツ。」

「知らない、姉あねさんは。」

「持ってお帰り。」

「はい。」

と立って、脛はぎをするすると次の室まへ。襖を閉めようとしてちよつと立姿で覗く。羽二重くれないの紅なるに、緋で渦巻を絞ったお千世のその長襦袢しぼりの絞しぼりが濃いので、乳の下、鳩尾みずおち、窪みに陰の映さすあたり、鮮紅からくれないに血汐が染むように見えた——俎に出刃を控えて、

潰島田の人形を取って据えたその話しの折のせいであろう。

凄すこさも凄いが、艶えんである。その緋の絞の胸に抱く蔽おおいの白紙しらかみ、

小枕の濃い浅黄。隅田川のさざ波に、桜の花の散敷おもかげく倂。

非ず、この時、両国の雪。

葛木は話したのである。

「姉の優しい眉が凜りんとなつて、顔の色が蠟ろうのように、人形と並んで蒼みを帯びた。余りの事に、気が違つたんじゃないかと思つた。顔の色が分つたら祖母おばあさんは姉を外へ出さなかつたらうと思うね。——兄弟が揃つた処、お祖母さんも、この方がお気に入るに違いない、父おとうさん上、母おつかさん上の供養の為に、活いきものだから大川へ放して来ようよ……

で、出たつきり、十二時過ぎまで帰らなかつた。

妹が涙ぐんで、（兄さん、姉さんは？ 見て来て下さい。）と言う。私も水へ飛込み兼ねない勢いきおいで、台所へ出ようとすると、姉は威勢よくそこへ歸つた。……

白はくちよう鳥を提げてね、景気よく飲むんだつて……当人すでに微ほ

酔よです。お待遠様と持込んだのが、天麩てんぷら蕎麦そばに、桶おけ餛飩うどん。

女二人が天麩羅てんぷらで、祖母おばあさんと私が餛飩うどんなんだよ。考えて見ると、その時分から意気地の無い江戸えど児こさ。

その晩、かねて口を利いた浜町の骨董屋こつとうやの内へ駈かけ込んで、

(あい。)と返事をしたんだって。

浅草、花川戸はながわの、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥べつこの鱈えび

甲うの花はな筭がし、当分は島田のままで、祖母さんと妹がそこへ引

取られて、私は奉公を止して、中学校の寄宿舍へ入る。続いて白筋の制帽おもしとなつて、姉あねの思おも一つなんだ。かみわぎで助けられるように、金きん釦ぼたんの制服と漕こぎつけた。」

伐木丁々

四十一

「……迄は、まあ可かつたんです。……ところが、その後おばあさ母の亡くなった時と、妹が婚礼をした時ぐらいなもので、可なつか懐しい姉は、毎晩夢に見るばかり。……私には逢つてくれない。二階の青あおすだれ簾、枝折戸しおりどの朝顔、夕顔、火の見の雁かりがね、忍返しの雪の夜。それこそ、鳴く虫か小鳥のように、どれだけ今戸のあたり姉の妾宅いまわりの居周囲いまわりを、あこがれて徘徊さまよつたらう、……人目を忍び、世間を兼ねる情婦いろでも有るように。——暗号あいずで出て来る

妹と手を取って、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れませんか。……
姉は恥かしいから逢わぬと歎く。女の身体からだの、切刻まれる処が見
たいか、と叱るんだね。

その弟の身になると、姉は隅田川の霞の中に、花に包まれた欄
干に立って、私を守っているようでもあるし、紅蓮ぐれん大紅蓮という
雪の地獄に、俎まないたに縛られて、胸に庖丁あを擬てられながら、救すくいを求
めて悶もだえるとも見える。……

死ものぐるいに勉強をしたよ。

大学へ入ると言う、その祝いだ、と云つて、私を村田屋へ連出
したのは、姉の旦那だ。

その時清葉を見ました。

心の迷いか、済まん事だが、せいかつこう脊恰好、たちい立居の容子が姉に肖そつく然り。

この方は手形さえあれば、曲りなりにも関所が通られると思うと、五度たびに一度、それさえ半年の間なんだ、……小遣を貯ためるんだからね。……また芸者の身になって見りや、迷惑な事は夥おびただ多しい。」

お孝は黙かぶりつて頭を掉ふつた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明処を隔つ、遠い昔のものがたりの中に住むか、目近に姿ばかりの錦絵を見るようだろう。同じ、娑婆しゃばに、おなじ時刻に、同じ檜物町の土地に、ただ町を離れて、本郷の学校の門と、格子戸を隔てただけで住んでいる筈の清葉さ

え、夢に見ても夢でさえ、遠出だったり、用達しだったり、病気
 だったりして逢えないんだものね。半年の間熟じっと目を塞いでいて、
 お茶屋の二階で目を開いて、ドキドキする胸をおさ圧えるのがその仕
 儀なんだ。

一度も夢で泣いたのは……」

天井を高く仰いで云った、学士の瞳は水のごとし。

「どこか……私の寄宿舎の二階と向合う、同じ高さに川が一筋……
 ……川が一筋。……で、夢だろう。水はその下を江戸川の（どんど
 ん）ぐらいな流れで通る。向う岸がしに二階がある。表だけ見えて、
 欄干が左右へ……真まんなか中えのきに榎の大樹があつて仕切る、その二階が
 ね、一段低くなつて流ながれに臨んで、も一つ高い座敷が裏に有りそう

なんだ、夢だからね、お聞き。……いや聞いておくれ。

その左右の欄干の、向つて右へ、嫋娜すずりと掛つて、美しい片袖が見える。ト頬ほおづえ杖か何か、物思わしい風情で、熟じつとこつちを視ながめ
るらしい、手首が雪のように、ちらりと見えるのに、顔は榎えに隠
れたんだ。榎えはどこか、深山みやまの崖か、遠い駅路うまやじの出入境でいりぎかいに有
る、繁おおきつた大な年経ふる樹らしい。

そこへね、むくむくと動いて葉を分けて、ざわざわと枝を踏きこり
で、樵夫きこりが出て来た。花咲爺えの画えにあるような、ああ、」

と横よこを向いて卓子台ちゃぶだいを幽かすかに拈うつて、

「前刻さつき、西河岸で逢つた植木屋……ね、ちよつと肖にていたよ。取
留めは無いのだけども。」

その爺さんが、コツンコツンと斧を入れる。が、斧の音は、あの、伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわざわと緑の水を浴びて落ちる。」

四十二

「三枝、五枝、裏搔いてその繁茂が透くに連れて、段々、欄干の女の胸が出て、帯が出て、寝着姿が見えて、頬が見えて、鼻筋の通る、瞳が澄んで、眉が、はつきりとなる。縋毛がはらはらと
かかって島田鬚が見えた。

川の水が少し渺として、月が出たのか、日が白いのか、夜だか

昼だか分らない。……間がおよそどのくらいか知れないまで遠くなる、とその一段高い女の背後うしろに、すつくと立つた、大な影法師おおきが出た。一段高いのに、突立つったったから胸から上は隠れたが、人けものも獣おおきとも、大な熊おおが蔽おほわれかかるように見えただがね。」

「ちよつと待って！」

お孝おびの怯おびえたらしい慌あわただしさ。が沈んで力ある声に、学士は夢うつつから現の世に引き戻されて、

「ええ、」と驚く。

「ここを抱かかいていて下さい。」

その声は、もう静しずかであつた。搔卷かきま越に、お孝は学士の手を我が胸むねに持添かきまえて、

「さあ、話しておくんなさいな、——身に染みるわねえ。」

「たわいは無いんだよ。……すがすがしいが、心細い、可哀な、
しかし可懐なつかしい、胸を絞るようなうまやし 駅路すずの鐸すずの音が、りんりんと
響いたので、胸がげっそりと窪んで目が覚めるとね、身体が溶け
るような涙が出たんだ。

その二階越の女が、どうしても姉なんだ。いや清葉だった。し
かもつい近頃の事なんだよ。」

「……………」

「話が前あとさき後さきになったんだがね、……夢を見たのは、姉がもう行
方知れずになってからです。」

「行方知れず?……」と手を支たく音。

「私がとにかく、今の学校を卒業すると、妹には代々の位牌を、私にはその一組の雛ひなと、人形を記念かたみに残して観音様の巡礼に、身は亡きものと思っておくれ、——妹に——達者でおくらし、——私に、晋さん御機嫌よう——

妹には夫がある。

この行方を探すには、私が巡礼に出なければならぬんだ。が、それは今出来兼ねる。

けれども、夢にも快く逢える事か、似た人にさえ思いのままには口も利けない。七年越し（私は姉が欲しい、……お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云った。

今夜思切つて言つたんだ。

ただ他人でありたくない！ が、いまこの二人は、きょうだいになり得る世界を持たん。夫婦になりたい。一所になりたい、ただ他人ではありたくない。しかし様子を見ても大抵分る、これはきさい肯入れてはくれないだろう、断然断らるるに違ない！

私は、お前さんから巡礼になる、少くとも行方知れずになる、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」とことば言は烈しく、搔卷はすらりとしてい

る。
「清葉は、すつと横を向いて、襦じゆばん袷の袖口をキリキリとか噛んだ

。」

「一件だね。」

「私は胸が迫つたよ。……清葉が、声を霞ませて言った。……」

（お察し申します。）

「へえ。」

「（貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおっしゃるでしょう。貴方は姉さんにお聞き下さいまし。私には母があります。養母です。）と俯向うつむいたが、起直つて、（母に聞かなければなりません。ト……また私には子があるんです。その子の父があるんです。一人極きまつた人があれば、果敢はかないながら芸者でも操を立てねばなりません。芸者の操、貴方お笑い下さいまし。私は泣いて、そのお別れの杯を頂きましょう。）……」

「ああ、言いそうなこつた。御守殿め、チョツ。」と膝を丁と支つ

くと、颯さつと搔卷かまの紅裏かえをかえす、お孝は獅子頭しがしらをは刎なねたように、美しく威勢よく、きちんと起きて、

「でも、さすがに土地の姉さんだねえ。」

空蝉

四十三

「もしもし、貴女様あなた、もし……」

ここに葛木に物語られつつある清葉は、町を隔て、屋根を隔て、かしこにただ一人、水に臨んで欄干らんだんに凭もたれてたたずゎむ。……男の

夢ながれの流ではない、一石橋の上なのである。が、姿も水もその夢よりは幻影まぼろしである。

と、小腰かがを屈めて差覗さしのぞき、頭ふを揺つて呼掛けたのは、願はちまき巻もまだ除とらないままの植木屋の甚平爺さん。

「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな処に……ははは、」

と底力の無い愛想笑で、

「いや、もう、人様の事をお案じ申すという効かい性しょうもござりません。……お助けを被りました御礼を先へ申さねばなりませんのでござりました。はい、先刻は何とも早や、お庇かげで助かりました。とんと生命いのち拾いでござります。それにまた、お情深い貴女様、種い

ろいろ 々と若衆たちまで、お優しいお心こころづけ附つけを下さしまして、お礼の申上げようもござりません。」

「ああ、植木屋さん。」

と云う……人を見た声も様子も、通りがかりに、その何となくしお悄れたのを見て、下に水ある橋の夜更よふけ、と爺おやじが案じたほどのものではない。

「今、お帰りなんですか。」

「はい、ええ、貴女からお心添え、と申されて、途中でまた待伏せでもされるような事があつてはならねえ。泊れ、世話をしよう、荷なりと預つてやろうと、こう云うて下さいましたが、何、前後の様子で、私てまえ、尺を取りました寸法では、一時かつ赫として手を上げ

ましたばかり。さして意趣遺恨の有る覚えとてもござりませず、
 ……何また、この上に重ねて乱暴をしますようなれば、一旦はち
 と遠慮がござりましてわざと控えましたようなものの、いざとな
 れば、何の貴女、ただ打たれておりますものか。向脛を搔
 払って、ぎやつと傾倒のめらしてくれますわ。」と影弁慶が橋の上。
 もとより好む天秤棒、真中まんなか取つて担ぎし有様、他の見る目も覚
 ぼつかかない。
 束つかない。

附け景氣の広言さえ、清葉は真面目まじめに憂慮きづかうらしく、

「でも、お年寄が、危いじゃありませんかね、喧嘩はただ当座の
 ものですよ。一晩明かしてお帰りなさると可かつたのにねえ。」

「はい、それに実は何でござります、……大分年数も経たちました

事ゆえ、一時ひととき半時では、誰方もお心こころづき付つの憂慮きづかいはござりませ
 んが。……貴女には、何をお秘かくし申しませう。私てまえはその、はい、
 以前はやはりこの土地に住いましたもので。」

「まあ、」

「ええ……せがれ忤がが相場づごとに掛りまして分散ぶんさん、と申すほど初手から
 さしたる身しんしょう上じやうでもござりませぬが、幽かすかには、御覚えがあらう
 も知れませぬ、……元数寄屋町すきやちやうの中程の、もし、へへへ、煎餅屋
 の、はい、その時分からの爺おやじでござりますよ。」

「あら、お店の前の袖垣なでしこに、朝顔の咲いた、撫子なでしこの綺麗だった、
 千草煎餅の、知っていますとも——まあ、お見それ申して済まな
 いことねえ。」

はずんだ声も夜とともに沈んで聞えて静である。

「滅相な、何の貴女。お忘れ下さるのが功德でござりますよ、はい、でも私はてまえざつとお見覚え申しております、たしか……滝の家

さんのお妹御……」

「ええ、小女ちいさい方よ、お爺さん、こんなになつて……お可なつかし懐いのね。」

四十四

「御主婦おかみさんは、」

「養母おふくろですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」

「てまえ私、陰ながら承つて存じております。姉さんが、お亡くなりにな

りましたそうで、あの方はお丈夫で。……貴女はお小さい時か

ら悪いたずら戯もなさらず、いつもお弱くつておいでなさりましたが、

しかし、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」

「いいえ、全盛それどころではござんせん。姉が達者でいてくれます

と、養母おふくろも力になるんですけど、私がこんなですからね。――

何ですよ、いつも身体が弱くつて困りますの。」

「お見受け申しました処でも、ちつと蒲柳ほっそりなさり過ぎますて。」

何やら、もの思わしげな清葉の容子を、もう一度凝ためて視みて、

「もつとも柳に雪折なし、かえつて御心配の無いものでござりま

す。でござりますが。」

爺さんは天秤を潜くぐるがごとく、腰を極きめて、一息寄る。

「そのお弱い貴女が、また……何で、今時分、こんな処に夜風は毒の、橋は冷えます。私なんぞ出過ぎましたようでござりますが、お案じ申すのでござりますよ。」

ありがと
「難有う、……身投げじゃないの、お爺さん。」

めっぽうけえ
「滅法界な、はッはッ。」

「でも、ほんとうは投げてても可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の気高いのが凄しみいように見える。

「滅相至極も無い。」

「親身に心配して下さいるのを私、じょうだん串戯を云つて済みません。

まったく身でも投げそうに、それは見えましたでしょうとも。一

人で、こんな処にぼんやりして。

実はね、お爺さん、宵からお目に掛っていた客が、帰りがけにこの橋から放生会ほうじょうえをなすつた品ものがあるんです。——昨日きのうはお雛様のお節句だわね——その蛤と榮螺ですつて。」

「はい、成程。」

「殿方ばかりでなさるんでは、わざとらしくも聞えますが、その方は御姉おあねえさんの御遺言。……まあね、……遺言と云つた訳なんですとき、私も姉が亡くなつたんです。」

何ですか、可懐なつかしくつて、身に染みてならないのに、少々仔細しさいが有りましてね、もうその方ともこれつきり、お目に掛られないかも知れなくなつたの。七年このかた以来、夢にまで、ほんとうに夢を見て

頂くまで、鼠^{ひいき}貞に……思つて……下すつた……のに。」

袖を落して悄^{しお}るる手に、鉄の欄干は痛々しい。

「私……もう御別離^{おわかれ}をお見送り申し旁々^{かたがた}、せめて、この橋まで

一所に来て、優しい事を二人でして、活きものの喜ぶのを見たか
つたんですけれども、二人ばかりの朧^{おぼろよ}夜は、軒^あ続きを歩^{ある}行くの

さえ謹まねばならないように、もう久しい間……私ねえ、躡^{しつ}けら
れているもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいじや

ありませんか。そのね、（二人で来る。）というのさえ、思出さ

ねば気が付かない迄、好^{すき}な事、嬉しい事、床しい事も忘れていて、

お暇^{いとまごい}乞^ごをしたあとで、何だかしきりに物たりなくつて、三^{はこ}絃

を前に、懐^{じつ}手で熟^{うつむ}と俯向^{うち}いている中に、やっと考え出したほどな

んですもの。

わたしんとこ

私許わたしんとこ

でも、

まねごと

真似事の節句をします。

その栄螺だの蛤だのは、

どうしたろうと、何年越かで、ふつと、それも思出すと、きつと

何かと突つ包くんで一所に食べたに違いない。菱餅も焼くのを知っ

て、それが草色でも、白でも、紅色でも、色の選より好このみは忘れて

いる、……ああ、何という空蟬ぬけがらの女になつたろう、と胸が一杯

になつたんですよ。」

四十五

「お地蔵様の縁日だし、序ついでと云つては失礼だけれど、その方と御

一所に、お参詣まいりをしながら、貝を流しに来られたら、どんなに嬉しかつたらうと思ひますとね、……それなり内へ帰る気になれなかつたもんですから、後を慕つたように見に来ました。

お爺さん、その方は、随分、私に思切つた、殿方の口からでは、さぞ仰おっしや有りにくかろうと思ふ事さえ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可い、言わねばならない……今、ただ、お前さんに話をした、一所にここまでお見送りがしたい、とそれだけさえ、口へは出せない身なんですもの。

大抵お察しなさいまし。……小児こどものような罪の無い、そしてそれより、酔いも甘いもよう知つて、浮世を悟つたお老人としよりは仏様、何にも隠す事は無い。……私には、小児の親の旦那があります。

どうせ女房さんや児があつて、浮気をなさるくらいな人、妾てかけは他にもある。珍らしくもない私を、若い妓に見かえないで滝の家一軒世帯の世話をしてくれますのは、棄てる言分が無いからです。落度があればそれツきり、まことに頃日の様子では、内々じや持扱つて、私の落度を搜しているかも知れませぬもの。大一座でももあるなら知らず、差向いでは、串戯も思切つては言えませぬわ。

そんなに、だらしなく意気地なく、色恋も、情も首尾も忘れたような空洞になつたも、燃立つ心を冷し冷し、家を大事と思つたかり。その家だつて私のじやない。……

ねえ、お爺さん。」

と面おもてを背けて、

「養母おふくろへ義理たつた一つばかりなのよ！……

亡くなった姉に、生命いのちがけの情人いろが有つて、火水の中でも添わ

ねばならない、けれど、借金のために身抜けが出来ず——以前盗ど

ろぼう

人が居直つて、白刃しらばを胸へ突きつけた時、小夜着こよぎを被かぶせて私を

庇かばつて、びくともしなかつた姉さんが、義理に堰せかれて逢うこと

さえ出来ない辛さに、私を抱いてほろほろ泣く。

生まれ

出生は私、東京でも、静岡で七つまで育つたから、田舎ものと

言われようけれど……その姉さんを持ったお庇かげに、意地も、張も、

達たて引ひきも、私は習つて知つている。

その時に覚悟をして、可厭いやで可厭いやでならなかつた、旦那の自由

になったんです。またそうして、後々までも引受ければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。……

ちやんと養母に約束した、その時の義理がありますから、自分じゃ、いのち生命も随意まにはなりやしない。

お爺さん、私や芸者のかざかみにも置かれぬ……意気な人には御守殿だ、……奥さんだ、お部屋だつて言われます。」

はなじろみながら眉の昂あがつた、清葉の声は凜りんとした。……途中でお孝の三人づれに行逢つたを爺おやじは知るまい。が、言う清葉より聞く方が、ものをも言わず、鼻をすすする。

「心に思う万分之一、その一言は云わなくても、姉の身ぬけにこうこうと、今云つた義理だけは、私はその人に言いたかつた、言い

たかつたんです。」

と思わずすが縋すがつて泣くように、声が迫つて、

「ですけど、他人は知らず、私たち、そうした人に、この事を打明けては、死んだ姉に恩を被きせる、と乗はつてる蓮はすの台うてなが裂ける……姉は私に泣いてましよう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、気の毒がられては、私は済まない。」

坊主になる、とまで真実に愚に返つて、小児のように言つた人に、……私は堪こらえて黙っていました。……」

彩ある雲

四十六

爺さんは、先刻打撲さつきくらわされた時怪飛けしとんだ、泥も払わない手拭てぬぐいで、目を拭ふくと、はツと染みるので、驚あわいて慌たしいまで引擦ひっこすって、
「他所よそめ目には大所おおどころの御新造ごしんぞさんのように見えます、その貴女が、
……やつぱり苦界、いずれ苦の娑婆しゃばでござります。それにつけま
しても孫が可愛うございますので、はい。」

沈めて、静に、

「お孫さん？……」

「ええ、女の子でござりまして。」

「まあ、私はちつとも知りません。」

「御ごもつとも尤もつともでござりますとも。……まだ胎内おなかに居おります内に、唯今の場末へ引込みひっこましてな。」

「では、私の静岡と同じだわね。それは、まあ、お楽しみ。」

「いえ、ところがどうして、ところがどうして。」

と頭かぶりを掉ふつて、下おろして有る天秤つかまに拵おろりながら、

「大おおくるし苦くるしみなわけでござりまして、貴女方おんなじと同おんなじ一おんなじと申すと口

幅あつたい、その数でもござりませんが、……稲葉家さんに、お世話になつておりますので、はい。」

「まあ、お孝さんの許とこに、……ちつとも私知らなかつた。」

「はい、あちらの姉さんも、あの御氣象で、よく可愛がつて下さいます、が、願えますものならば、貴女のお手許に、とその時も

思つた事でござります。いいえ、不足を言うではござりません。

芸者と一概に口では云い条、貴女は、それこそそれつきとした奥方様も同じ事。一人の旦那様にちゃんと操をお守りなされば、こりや天下一本筋の正しい道をお通りなさる、女の手本でござります。彼娘あれにもな、あやからせとう存じますので。」

「飛んでもない、お孝さんこそ可い姉さん。ああでなくては不可いけません。私は何も、曲ゆがんだり拗すねたりして、こう云うのではないんです。お爺さん、色でも恋でもない人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買われる玩弄品おもちゃです。大人の手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」

ふと言絶ことばえ、嘆息ためいきして、

「ここで榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乗つて、下に横にして供えられた左ひだりづま 褻ひだりづまの人形を、私とは御存じないの。」
と、半ば乱れた独ひとりごと言、聞かせぬつもりひたりごとの声が曇る。

「何も浮世でござりますよ。」

と分らぬながら身につまされて、爺さんはがっくりと蹲しゃがんで俯うつむ向き、もう一度目を引ひっこす擦つむつて、

「何の真似は出来ませいで、せめて芸ごとで、勤まるようになれば可いと存じますよ。貴女などは何が何でも、そこが強味でいらつしやいます。憂さも辛さも、糸に掛けて唄つておしまいなさりまし。芸ごと芸ごとも貴女ぐらいにおなりなさると、人の楽みより御自分のお気晴しになります。……中にも笛は御名誉で、お十二

三の頃でございましたらうか、お二階でなさいますのが、私どもてまえも一町隣、横町裏道寂しんとなつて、高い山から谷底に響くようでござりましたよ。」

「パイパイ笛の麦藁むぎわらですかえ、……あんな事を。」と、むら雲一重、薄衣うすぎぬの晴れたように、嬉しそうに打微笑む、月の眉の気高さよ。

「あの、時分の事を思いますと、夢のようでござります。この頃でも、御近所だと時々聞かれますのでござりましようがな。」

「可い塩梅あんばい。」

とやや元気に、

「幸しあわせと聞えやしませんよ。……でも笛だけは、もういつも、帯に

つけていますけれども、箱部屋の隅へ密として置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間じや誰も知らないのに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつくなつた。笛が動いて胸先へ！……：嬰児あかんぼのように乳に響く！ いつでも口を結えられて、袋に入っているんだから。」

と命を抱くいだ羽織の下に、きつと手を掛けた女の心は、錦の綾あやに、緋総ひふさの紐、身を引きしめた臍おぼろの顔に、彩いろある雲が、颯さつと通る。

眉を照らして、打仰ぎ、

「……世に出て月が見たいんでしょう。……吹きはしませんよ。」

とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

ああ、ななとせ七年の昔を今に、君が口紅流れしあたり。風も、貝寄

せに、おくれ毛をはらはらと水が戦ぐと、沈んだ栄螺の影も浮いて、青く澄むまで月が晴れた。と、西河岸橋、日本橋、呉服橋、鍛冶橋、数寄屋橋、松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋、二十の橋は一斉に面影を霞に映す。橋の名所の橋の上。九百九十九の電燈の、大路小路に残ったのが、星を散らして玉を飾って、その横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を驚掴みで、思わず肩を聳かした。

「吹奏まし、吹奏まし。何の貴女、誰、誰が咎めるもので。こんな時。……不忍の池あたりでお聞き遊ばすばかりでございます

。」

「勿体ないこと。……」

と笛を袖へ、またうつむいて悄しおれたのである。

河童かっぱの時計の蒼あおい浪、幽かすかな水音。どぶり一つ、……一時であ
ろう。

鴛鴦おしどり

四十七

稲葉家のお孝は冷くなつた、有合わせの猪口ちよこを呼吸いきつきに呷ぐい、
と一口。……で、薄ら寒いか両袖を身震いして引合わせたが、肩

が裂けるか、と振舞は激しく、風采は華奢とりなり きやしやに見えた。

が、すつきりと笑いながら、

「それじゃ、清葉さんばかり縹緞きりようがよくつて、貴方は、だらしが無いんだわね。」

「まあ、そうなんだ。」と葛木は、打傾いて頬に手を置く。

「まあじやないじやありませんか。立派に断られたに違いない。」

「そりや違いない。」

「振られたのね。」

「ふられました。」

「ポーンと。」

「何もそうまで凹ますには当るまい。」

「嬉しいねえ。」

小児らしいまで胸を揺つた、が、なぜか気が立って胸の騒ぐのを、そうして紛らしたようである。

葛木は、煙草の喫さしを火鉢に棄てた。

「それだがね……」

「まだ負惜み？」

「ただ話さ。」

と苦笑して、

「別れに献した盃を、清葉が、ちつと仰向くように、天井に目を閉いで飲んだ時、世間がもう三分間、もの音を立てないで、死んでいて欲しかった。私の胸が、この心が、どうなるかそれが試し

て見たかったが、ドシンばたん、と云う足音。隣室となりの酔客よっぱらいが総立ちになつて、寝るんだ、座敷は、なんて喚わめいて、留める芸者と折重ふすまなつて、こつちの襖ふすまへばたばたと当る。何を、と云つてね、その勢いきおいで、あー……開けるぞ、と思うと、清葉が、膝つきなを支直なおして、少し反身そりみで、ぴたりと圧おさえて、（お客様です。）

そう、屹きつとして言つたんだよ。（誰だ。）と怒鳴ると、（清葉がお附つきき申しております。）と手に触つた撥ぼちを握つて、すつと立つた——芸妓げいしやのひそめく声こゑがして、がたがたとそこらが鳴つて静しずまつたがね……私は何だか嬉うれしかったよ。」

「情人いひひとらしく扱あつかわれたような気がして？ そんな負惜おんじみをお言いいなさんなよ。」軽かろく卓子台ちゃぶだいを掌たなで当てて、

「卑怯な、男のようでもない。」

「いや、そんな意味じゃ決してないんだ。恥を秘かくして貰ったよう
 でき。不出来ふでかしをして女に振られた、恋の奴やつこの、醜だらしな体を人目か
 ら包んでくれた気がしたから。」

「人目がどうして、そんな事ぐらい芸者が貴下あなた、もしかそれが旦那
 だつたら、清葉さんはどうするだろう。……ちよいと、ここへ、
 もしか私の男が、出刃庖丁か抜身でも持って、蒼あおくなつて飛込ん
 だら、私がどうすると、貴下思つてるの？ いいえ、吃驚びっくりする
 事は無い。私だつてそのくらいな覚悟はしている。」

大丈夫、そうすりや貴下の上へ、屏風に倒れて背うしろになつて、私
 が突かれる、斬られて上げるわ。何の、嫉妬じんすけの刃物三昧さんまい、切き

つさき

尖が胸から背まで突通るもんですか。一人殺される内には貴下は助かる。両方遁げるから危いんだわ。ねえ、ちよいと、」

と、じりじりと膝で寄って来たが、目が覚めたように座をし、
「あら、何の話をしたんだろう、……ああ、そうそう。」

お孝は何気なく頷いて、

「清葉さんがお庇い遊ばして——まことに、お豪い芸者衆でいらつしやいます。」

「まったく、私は、しかし、」

「しかしどうしたのさ。」

「姉に、姉の袖で抱かれた気がした。」

「葛木さん。」

そのまま衝と膝を掛ける、と驚いて背後へ手を支く、葛木の瘦せた背に、片袖当てて裳を投げて、

「そんなに姉さんが恋しいの。人形のお話は、私も聞いて泣いていました。ほんとうに貴下、そんなじや情婦は出来ない。口説くのは下拙だし、お金子は無さそうだし、」

「謝罪る。」

「口説かれるのも下拙だし、気は利かないし、跋は合わず、機会は知らず、言う事は拙し、意気地は無し、」

「堪忍したまえ。」

「から、だらしは無いけれど、ただ一つ感心なのは惚れる事。お前さん、惚れ方は巧いのね。」

「……………」

「情婦いろが無くつて、寂しくつて、行方の知れない姉さんを尋ねるツてさ、坊主になんかならないように、私が姉さんになって上げましょう。」

「……………」

「御不足？ 清葉さんでなくつては。」

「そ……そんな事は。……ああ、息が塞ふさがるよ。」

「死んでおしまいよ。こんな男は国土くにの費ついでだ」

「酷ひどい。」

と云う時、とんと突飛ばして、すつくり立つ、と手足を残して燃ゆるように見えた。パチンと電燈を消したのである。

力の籠こもった、情なさけの聲。

「ちよいと、（サの字。）が見えなくって？ サの字よ、私、葛木さん。」

「お孝さん。」

とわずかに言う。

「暗い中でも、姉さんに見えませんか、姉さんにしてくださいませんか。自惚うぬぼれてて？ ちよいと自惚れだ、と思いますか。清葉さんでなくっては——不可いけないの、不可いの。」

「真ま暗くらだ。私は、真暗だ。……」

「まだ、まだまだあんな事を。清葉さんでなくっちゃ、不可いの、不可いかい。」

「顔が見たい、お孝さん。」

「贅ぜいたく沢たくだよ。」

と婀娜あだな声、暗やみ中に留とめ南奇めきがはつと立つ。衣きぬ摺ずれの音するする
と、しばらくして、隔ふすまての襖そに密と手を掛けた、ひらめく稲妻、
輝プラチナく白金、きらりと指環の小蛇を射る。

「ほんとうの、貴方の姉さんは私は知らない。清葉さんなら恐れ
はしない。芸でいけなきや、容きりよう色いろで、……容色でいけなけりや
芸事で、皆不可なけりや、気で負けないわ。生命いのちで勝つ。葛木さ
ん、見て頂戴。」

とすらりと開ける、と翠みどりの草に花の影を敷いて、霞あしに鴛鴦おしの翼
がただよ漾よう。

「ああ、お千世は？」

と葛木が言った。それは影も見えなんだ。

「枕を持って、下階したの女房おかみさんの中へ寝に行きました、……一度でも芸者と遊んで、そのくらいな事が分らない。——さあ、ちやんとして見て頂戴、サの字が見えない？ 姉さんに肖にない？……ええ、焦じれりたい。」

と襖すだに縫ぬって、暗い方へ退さがる男と、明あかるく浮いた枕を見交わす。

「姉さんで可愛がられるのに不足なら、妹にまけて可愛がられて上げましょう。従いとこ姉妹になつてなかよくしましょう。許いいなすけ嫁けでも、夫婦でも、情婦いろでも、私、まけるわ、サの字だから。鬼にでも、魔にでも、蛇体へびにでも、何にでもなつて見せてよ、芸人です

もの。」

と裳もすそを揺ゆつて拗すねたように云いながら、ふと、床の間の桜を見た時、酔つた肩はぐたりとしながら、キリリと腰帯が、端正しやんと緊しまる。

「何の、姉きょうだい妹いになるくらい、皮肉な踊はよりやさしい筈はずだ。」

搔卷なぎさの裾なぎさを渚なぎさのごとく、電燈に爪足白く、流れて通つて、花はない

活けのその桜の一枝、舞の構えに手に取ると、ひらりと直つて、

袖ひといきにうけつつ、一呼吸籠めた心の響、花ゆらゆらと胸へ取る。姉

の記念かたみにやわ劣るべき花柳の名取の上手が、思おものさす手を開きし

ぞや。

その枝ながら、袖を敷いた、花の霞を裳に包んで、夢の色濃き

萌黄もえぎの水に、鴛鴦の翼に肩を浮かせて、向うむきに潰島田。玉の緒ゆら揺ぐ手柄の色。

「葛木さん。」

「……………」

「人形が寂しい事よ。」

生理学教室

四十八

お孝は黒くろ繻じゆす子の襟、雪の膚はだ、冷たそうな寝衣ねまきの装なりで、裾ひを曳

いて、階子段はしごだんをするすると下りると、そこに店前みせさきの三和土たたきにすつくと立つた巡査に、ちよつと目礼をして、長火鉢の横手の扉ひらきを、すつと縁側へ出て行く。

そこが中庭になる、錦木の影の浅い濡縁で、合歡ねむの花をほんのりと、一輪立膝の口に含んだのは、五月初の遅い日に、じだらくに使う房楊枝ふさようじである。

その背後うしろに、座敷が見えて、花は庭よりもそこに咲いて、眉の緑の年増も交る。

と、下地子したじっこらしい十二三なのが、金盃かなだらいを置いて引返して来て、長火鉢の傍わきの腰窓をカタンと閉めたので、お孝の姿は見えなくなつた。

とばかりで、三和土に立つた警官は、お孝が降りて来た階子段ななめにらを斜ひげに睨ひねんで、髯もつぱらを捻もつぱらる事専しぱらくなり。で、少時ひっそり家中が寂然する。

一体、不断は千本格子を境にして、やけな奥女中の花見ぐらい陽気な処へ、巡查と見ると騒動さわぎが豪えらい。謹むのではない笑うので、キヤツキヤツクツクツ、各自てんでんがあつちこつち、中には奥へ駆込んで転がるまで、胡蝶ちようちようと鸚鵡おうむが笑う怪物ばけもの屋敷の奇観を呈する。

事の起因おこりを按あんずるに、去年秋雨の降くらす、奥の座敷に、女ばかり総勢九人、しかも二組になつて御法度の花骨牌はながるた。軒の玉水しとしとと鳴る時、格子戸がらり。

「御免。」と掛けた声おそろしいかつが可恐おそろしいかつく厳い蛮音。薩摩訛さつまなまりに、あれえ、と云うと、飛上るやら、くるくる舞うやら、ぺたんと坐つて動け

ぬやら。

座敷では袂たもとへ忍ばす金縁の度装どものの硝子がらすを光々さした、千鳥と云う、……女学生あがりやで稲葉家第一の口上いらい言が、ひさしがみ廂ひさしがみ髪がみの阿古あこ屋やと云う覚悟をして度胸を据えて腰を据えて、もう一つ近視ちかめ眼を据えて、かまち框へ出て、はツと悪く落着いた切口上。

「別にそのでございます。相変りました事はございませんです。」
と、戸籍係たてに立たてごかしの三ツ指きを極きめたと思え。

「羅らう宇が出来たけえ、……持つて来たですツ。」

「何だね、羅宇屋さん、裏へお廻り。」と、婆みづぐちやが水口みづぐちの障子で怒鳴ると、白磨竹しろみがきを突着つけられた千鳥の前は、拷問ごうもんの割竹で、胸えいぐを抉えられた体ていにぐなりとした。

鍋焼餛飩うどんは江戸兎えどつこでない、多くは信州の山男と聞く。……鹿兎島の猛者もさが羅宇の嵌替すげかえは無い筈でない。しかも着ていたのが巡查の古服、——家鳴震動やなり大笑おおわらい。

以来、戸籍検べしらべ、とさえ言えば、食いかけた箸を持って匆廻はねまわる埒らちの無さ。当区域受持の警官も、稲葉家では、（笑う。）と極きめて、その気で髯を捻るのであったが。

今日けさのは大おおきに勝手が違った。

「姉さんは内じやろうで。」

「はあ、あの……」

「是非、直接に逢いたいんじゃないや……取次を頼むです。」

小女こおんなが一度、右の千鳥女史ささやと囁き合つて、やがて巡查の顔を見

い見い、二階に寝ていたのを起した始末。笑い掛けたのは半途で
 圧え、噴出したのは嘔込んで、いやに静かな事よつて 如件。
 かすかじわぶき
 幽な咳してお孝が出た。輪曲ねて突込んだ婀娜な伊達巻の端ば
 かり、袖を這つて着流しの腰も見えないほどしなやかなものであ
 る。

「失礼をいたしました。」

「は、あんた覚えておられるかね。」

唐突に言うのがそれで、お孝はちよつと分り兼ねつつ、黄楊
 の横櫛を圧えたのである。

四十九

巡查は掌てのひらを向うへ扱しごいて、手袋を外して、片手に絞しぼつて、更あらためて会釈する。

「ちよつと分りますまい、じやろうがね、……先達さきだちで、三月四日の午後十二時の頃に逢うたのですが。」

「ああ、一石橋の、あの時の。」

お孝は軽く傾かたむいていたのが屹きつと見直す。

「多日しばらくでした、いや、その節は失敬しんけいじやった。」

「いいえ、私こそ失礼を。」

「むむ、いささかその失礼でないこともなかつたですね、ひやッ、ひやッ。」と壁に響くがごとき力ある笑声、笑うのに力が有つて、

あえて底意は無さそうである。

お孝は顔を洗ったばかりの、縁起棚より前へさきする挨拶とて、いつになく、もじもじして、

「ついね、お白酒の持越しで、酔っていたものですから、ほほほ。」

とつぼみ蒼ぐらいな内端うちわな声。

「お茶をよ、誰か。」

「そういう心配をされては困る。……官服の手前もある。お宅などで余り世話になっては不可いかんです。……けれども、ちよつとここを拝借します。」

「さあどうぞ、……貴官あなたお上り遊ばしては。」

「ここで結構です。」

小女が心得て手早く座蒲団ざぶとんと煙草盆たばこぼん。

「御免下さい。」と外套がいとうを抱えたまま、ガチリと佩劍はいけんの腰を捌さばいて、かまち框の板うしろに背後むきに、かしつと長靴の腰を掛ける、と帽子を脱いで仰向けにストンと置いて、

「何は、ちよいちよい来らるるかね。」と髯を捻る。

「誰方……でございますか。」

「何は、大学の国手せんせいは？」

「さつぱり……」と目が働いて、頬しほが緊る、お孝は注意深い色である。

「全然まるでお見えにならんですかね。」

「いいえ、時……たま偶。」と、膝で二つばかりてのひら掌を軽く合せる。

「今度お逢いでしたら、あんた貴方から、わし私に、ことづけ託を一つ頼まれて下さらんじやろうかね。」

「はあ、お目に懸りました節は。——ですが、いつまたお見えになりますか。」とみまも瞻らるる目を外して言う。

「別に急ぐという件ではないです。——今名刺を上げます。で、わし私が職務としてではない。一いっ個人として、私一人として、じゃね、……非常に先達ては失敬した、わび詫をします、とあんた貴方からよう言うて貰いたいのじゃ。実はそれを頼みとうて、今日は私用のみで出向いて来たです。……いやいや一石橋の事のみではないです。

実は、今週の金曜日、一昨日でした。私わしは非番だもんで、医科

大学へ葛木さんを訪問したです。可^ええですか。……と云うのはじやね、先夜、あの場合、貴方が不意に出て来られて、私が疑問的とした、不審を實際に示して、証明をされたもんで、それ以上追究は出来兼ねる都合で手を放した。

もつとも孰^{いざれ}にせい、私^{わし}が思うたほどの事件^{こと}でない、とだけは了解したのじゃけれども、医学士などは、出たら目じやろう。また、あの年配で、それが今日堂々たる最高の学府に氏名を列する一員であらるるものがじゃね、……学問上、蛙の腸や、モルモットの骨を新聞紙に包んで棄てるならば、幾分かいわれはある。それも必ずしもあるべき事実とは思わんのじゃがね。

榮螺と蛤、姉の志と云うて、雛にそなえたを汐に流す、——そ

んな事が。私は断じて信ぜんのじゃ。」

と今もなお且つ信じないように、澁に朱を加えた赤い顔で——
信ぜんのじゃ！——

五十

巡査はそこに注いで出した茶を、喫まず、じろりと見たばかり。
「事態、私も怪訝に堪えんもんで、早急とはなしに、本郷方面へ、同僚の筋を手繰って搜りを入れると、葛木晋三と云う医学士はいかにもあるじゃね、そしてです、それは医科に勤めておられるが、内科、外科、乃至婦人科、何でもないので。大学内の

その、生理学教室に居おつて研究をされつつある……」

と真顔にお孝に打傾いて、左の手の自脈を取りつつ、

「まるでこの方には関係ない。純粹のその学者じやとある。で、

なお怪あやしいですわい。その晩の挙動なり、……あの余り……貴方あんたの

前じゃけれどもが、風采の上らん、瘦やせた、薄髯のある、背の屈かが

んだ、こう、突くとひよろひよろつとしそうな、人に口を利くに

おどおどする、初心らしい、易やすっぽい、容子と云うのがじゃね、

人品備わらんですじやろうが、どうですかね、……きやツ、き

やツ、きやツ。」

空咳からせきに咳入るごとく、肩を揺ゆつて高笑たかしょういをする。

「さあ、」と云つたが、ほほほ、とばかり、この際困つたという

片頬笑みをして、ちよつと指先で畳をこすり状さまに、背後うしろを向いて、も一度ほほほ、と莞爾にっこりすると、腰窓のぞを覗のぞいていた、島田いちよと銀ぎん杏うがえし返かへが、ふつと消える。

巡査は、すなわち髻むすを捻ねつて、

「怪しいものではあるまい。後暗い事は、それは無いのじやろう。がです……あの晩の人間は名を騙かたつた者に相違無い、とどうしても疑われてならんもんで。好奇心にも駆らるるですわ。非常に思切つて、医科大学に刺を通じて面会を求めたです。そりや、貴方あんた、通常服で、そして小倉じやが袴はかまを着けて出向いたけえな。

どうか思うたが、取次いだ小使しやくどんが、やや暫時しばらくあつて引返して、お目に掛ろう言わるる、通れ、とあつて、廊下伝い方角を

教わつて、そしてそれから歩ある行き出したがね、——私わしは先年この
岐阜県下ですわ、飛驒ひだのある山家辺へんびに勤務した事があつて、深
い谷陰、高い崖に煙草の密造をする奴をしら検べに行つたのじゃね。
その節、路も無い処を、いわゆる、木の根いわかど巖角ですわい。時々
藤ふじづる蔓にぶら下つて、激流の空を綱渡などしたが、いや、見当の
着かぬ心細い事は、——門外漢が学校のその奥へ行く廊下伝いは、
奥山を歩ある行くどころではなかつたです。

日も西山に没して、前途なはるかお遙なりと云う、遠い向うの峠見た
ような処に、大な扉おおきドアの戸を、細う開けて、背うしろにして、すつくりと
立つて、こつちを出迎えておられた。峰の一本の松という姿に見
えたのが、何と驚いたねえ、あの晩の少わかい紳士じゃ、国手せんせいじゃ

つたで。

ぴたりと留まって、思わず、挙手の礼を施したですよ。常服ふだんぎでは可笑いおかしのじやが。

すぐにこれへ、と言われて、大な扉ドアを入ると、ズシンと閉ったと思われい。稲妻のように、目を射られたのは、室一杯へやに並んだ書架に、ぎつしりと並んだ、独逸語ドイツじやろうね、原書の背皮の金文字ですわ。

暮方の空に、これがどうですか。紺地に金泥こんでいのごとく、尊い処へ、も一つの室へやには名も知れない器械が、浄玻璃じようはりの鏡のように、まるで何です、人間の骨髓とほを透して、臟腑を射照らすかと思う、晃々こうこうたる光を放つ。

私は、よろよろとなったで。あの晩、国手が、私のために、よろよるとなられたごとくじゃ。何と、俗に云う餅屋は餅屋じゃ、職務は尊い。」

と沈着に、腕を拱く。

五十一

「その器械と、書架の有ると、国手両室を占領しておらるる様子じゃねえ——傍には寝台も有ったですよ。柱の電鈴を圧さると、小使どんが紅茶を持って来るのじやつた……」

私は卓子の向いに、椅子を勧められて真四角に掛けたのじ

やが、硝子窓がらすから筑波山の夕日が射さして、その生理学教室を※と輝ほかした中に、国手の少い姿わかが、神々しいまで見えた。

一応話を聞いたです。私もね、出来得る限り、行政官の一員たるその威厳を保つてからに。しかし、決して警官として訊問じんもんをするではありません。すでに一石橋当夜の紳士と、生理学教室における国手とが同一人である事を確めた上は、些少さしょうたりとも犯罪に対して何等その疑いは無いのでありますが、お話のごとき事が事実有り得るものかどうか、後学のため、一種人情に対する警官の経験の為に、云うて、その室で飾ると云われた、雛を見せて貰うたです。

国手、一個の書架しょだなの抽斗ひきだし、それには小説、伝奇の類が大分

帙ちつを揃えて置かれた——中から、金唐革きんからかわの手箱を、二個出して、それを開けると無造作に、莞爾にこにこ々々しながら卓子の上に並べられた。一錢雛いちもんびなじゃね、土人形五個なのです。が、白い手飾カフスの、あの綺麗な手で扱われると、数千の操糸を掛けたより、もつと微妙な、繊細な、人間のこの、あらゆる神経が、右の、嚴肅な、緻密ちみつな、雄大な、神聖な器械の種々から、清い、涼いすずし、芬ぶんと薬の香のする室へやの空間あきまを顫動せんどうさせつつつたわ伝つたって、雛の全身さつに颯さつと流込ながむように、その一個々々が活きて見える……

就なかんずく中、丈、約七寸許ばかりの美しい女の、袖には桜の枝をのせて、

ちよつとうつむいた、慄然ぞつとするような、京人形。……髪は、「
 と言みい掛けて、お孝の姿を更みめて視みて、

「貴方^{あんた}、貴方のその髪と同一に髪を結うた人形じゃがね。」

お孝は俯向^{うつむ}いて、しやんと手を支^つく。

「それは何と云う髪の結びかたですかね。」

「潰^{つぶ}し
潰^{つぶ}し……」

「はあ？……何ですかね、覚えて置くで失礼します。」と、手帳を出す。

お孝の上げた顔は、颯^{さつ}と瞼^{まぶた}が染つたのである。

「あの、潰島田でございます、お人形さんの方は結構でしょうけれども、これはまことにその潰しの利きませんお恥しいんですよ。」

「いいえ、潰しなんかきかんで可^ええです。貴方^{あんた}はすでに葛木さん

の。」

隅の階はしご子段だんを視て空みざまに髯しごを扱しごいた。見よ、下なる壁に、あの羆ひぐまの毛皮おおい、大なる筒袖おおいの、抱かか着いたごとく膠べた顔たりとして掛かりたるを——

巡査は心付いた目をお孝に返して、

「貴方あんた、大抵たいていの事は、ここで饒舌しゃべつて可べえですか。ある種の談話はばかは憚はばらんでも構かまわんですかい。」

「ええええ、」

と懐ふとをひざ広く、一ひと膝ひざ出でながら、

「ちつとも……お氣に入いりましたら、私わたしをすぐ、お口説くちきなすつても構かまいませんの。」

「きやツきやツきやツ。葛木さんの奥さん。どないしてかい？……」

「まあ、そんな事こそ、先方さまが御迷惑です。」

「いや、しかし、その積りで出向いて来たで。」

「羽織を。寒い。……そして私にも煙草をおくれな。」

美拳

五十二

「さあ……何の話じゃったかね、そこで。」

「貴方あなた、その濱島田に結ったお人形さんですわ。」

「さよう、……就なかんずく中、それが、葛木さんの目と一所にぱちぱちと瞬きするじゃね、——声を曇らして、姉と云う御婦人の事も

言われた——

私は別世間わしを見たです。異った宇宙を見たです。新しい世の中を発見してむしろ驚異の念に打たれた。……吃驚びっくりしたんじゃね、何の事はない。

かつて、その岐阜県の僻土へきど、辺鄙へんびに居た頃じやったね。三国峠を越す時です。只今、狼に食われたという女の検察をしたがね、……薄暮うすぐれです。日帰りに山家から麓ふもとの里へ通う機織はたおりの女工が七人づれ、可ええですか。……峠をもう一息で越そうという時、下

駄の端緒はなほが切れて、一足後れた女が一人キヤツと云う。先へ立つた連の六人が、ひよいと見ると、手にも足にも十四五足の、狼でおおいかぶ蔽被おおいかぶさった。——身体はまるで蜂の巣ですわ。

私は反対の方から上りのぼかかったんでね。峠から駆下りて来た郵便脚夫が一人、（旦那、女が狼に食われております。）と云い棄てて、すたすた行きゆおる。——あとで、その顔を覚えとつたで、（なぜ通りかかって助けんかい。）……叱つた処で、在郷軍人でもなし仕方が無い。そういう事も現在見た。

また、山の中に、山猫と云うのが居る、形はかつて見せん。見たものは無いと云うです。ただ深更に及んでその啼なきごえ声じゃね、これを聞くと百獸ことごと悉く声を潜むる。鳥がねぐら罫で騒ぐ。昔の※々へひ

ひゞじゃと云う。非常に淫猥いんわいな獣けものじゃそうでね、下宿した百姓の娘などは、その声を聞くと震えるですわい、——現在私も、それは知つとる。

炭焼の奴が、女を焼いて食つた事件もある。

そういう事は知つとるが、趣味と情愛の見聞が少かつたためじやろうか、医学士が生理学教室で、雛を祭る、と云うは信じなかつた。——吹く風はなこその関と思えどもですわ。」

と嘆息ためいきして、髯に掛けた指を忘れた。

「よろい鎧の袖に桜のちらちらとかかると云う趣も、私のその了りようけん簡かんでは嘘にせねばならんのじゃつけえ。

恥入るです——いっ一個人としてじゃが。」

巡查は、ずるりと靴をずらして、佩劍はいけんの鞞手つかに居直つたのである。

「で、国手せんせいに大に謝おおいそうと思ふ処へ、五六人、学生とは覚えな
い、年配の、堂々たる同僚らしいのが一斉に入つてござつたで、
機おりを考えて、それなりに歸つたです。

この意をじやね、願わくは貴方あんたから国手にお伝えのほどを偏ひとえに
希望します。私は職務上の過失であらば責せめを負うです。それは別
問題として、——私は、貴方から御挨拶を願うのが、もつともそ
の道を得たものと信ずるのじや。

就てはです。私わしは没分曉わからずや漢の一巡查であるが、生理学教室に雛
を祭ることにおいて、一石橋の朧おぼろづき月一片の情趣を会得した甲

妻に、ひおどし緋緘の鎧の袖に山桜の意気うらやまの羨しさに堪えんで。

十年勤務の間、唯一の美拳として、あんた貴方に差上げたいものがある。

……奥さん。」

「……………」

「言うても構いませんな、奥さん。」

「嬉しいんですよ。」

と声が迫って、涙が美しく輝いた。

「一生に一度ですわ。」

「葛木の奥さん、……学位年齢姓名と並べて、さい（同じく妻。）と認めた手帳の一枚です、お受取り下さい。」

出すのを取って、熟と俯向く、……潰島田の、水浅黄の手柄のはらはらと揺るるを視ながら、冷めた茶碗を不器用な手つきで、取って陰気に一口、かぶりと呑むと、ガチリと立って挙手したきり、ただの巡査になつて格子を出た。

この巡査が、本郷を訪問した時の光景は、彼がここに物語つた通りであつた。それさえ、神境に白き菊に水あるごとき言うべからざる科学の威厳と情緒の幽玄に打たれたのに——やがて仔細有つて、この日の午後、赤熊の毛皮をそのまま、爪を磨ぎ、牙を噛んで、喘ぐ猛獣のごとくになつて、生理学教室へ、日本橋から本郷を一飛びに躍り込んだ……海産商会の五十嵐伝吾は、それはまた思ひの外意気地の無いものであつた。——

大学の廊下を人立して、のさのさと推寄せた伝吾が、小使に導かれて、生理学教室の扉に臨んだ時、呀、恋の敵の葛木は、籐の肱つき椅子に柔く腕を投げて、仰向けに長くなって、寝ながら巻まきたばこ 蓆のを喫んでいた。……が、客来る、と無造作に身を起して、カタリと大床に靴を据えた。その音さえ、訝するまで、高い天井、大空に科学の神あつて彼を守護するごとくであるのに、かてて加えた学友が、五人の数、彼を取巻いて、あたかも迷宮の奇き灰色の柱のごとく、すすすくと居合わせたのが、希有な侵入者を見ると、一斉に伝吾に瞳を向けた。知らずや、その中に一人外科の俊才で、渾名を梟あだなふくろうと云う……顔が似たのではない。いかもの食の大腕白、かねて御殿山の梟を生捕って、雑巾くるに包んで、暖炉にくべ

て丸蒸を試みてから名が響く、猫を刻んでおしやます鍋、モルモツトの附焼、いささか苦いのは、試験用の蛙かわずの油揚だと云う、古今の豪傑、千場彦七君が真ま黒くろな服を着けて、高い鼻に、度の強いぎらぎらと輝く眼まなこで、ごさんなれ、好下品おさかなひぐま、鬻うの皮をじろりと視て、頭から塩を附けたそうにニヤリと笑った。——この威にや恐れけん。

伝吾は扉ドアの敷居口に、へたへたと腰を抜くと、鬻うの筒袖の前脚めいたやつを、もさりと支ついて、土下座して、

「途とまどい惑ごをいたしまして。」

とばかり、口も利き得ず、すごすごと逡巡しりごみして帰ったのである。

仔細は云うまでもない。……大概様子でも知れよう。前夜から、稲葉家へ泊り込んだのが、その二階を去らず、お孝に愛想づかしをされて突出されたのであつた。

却説……巡査が格子戸を出ると、やがて××署在勤笠原信八郎とある名刺にのせた、（おなじくつま同妻。）を熟と視ていた、稲葉家の

お孝は、片手の長煙管をばたりと落して、すつと立つと、頂いて、長火鉢の向う正面なる、朝燈明の清く輝く、縁起棚の端にのぼ上せた、が、黙つて伏拝んで、座蒲団に居直つた時、眉を上げつつながしめ流眄に、壁なる羆の毛皮を見た。

「千世ちゃんは？」

煙草盆を引きながら少女が、

「お稽古ですの。」

「春子さん、夏次さん、千鳥さん、萩代さん、居なさるか。皆ちよいと来ておくれと、そうお言い。……私、話したい事がある。」

おんりようびら
怨霊比羅

五十三

——「露地の細路、駒下駄で。」——

カタカタと鳴る吾妻下駄、お竹蔵向むこうの露地を、突袖して我家へ

帰る、お孝の棲つまは、幻の夜よが深かつた。

「姉さん。姉さん。」

と呼ぶ、可愛い声。

ひとしきり

一時、芸者の数が有あ余りつたため、隣家となりの平屋を出城にして、桔き

きよう

梗か、刈萱か、女郎花おみなえし、垣ゆいめの結目たまも玉章ざさで、乱らんぐい杣さ逆茂木取

廻まわし、本城てすりの欄あおすだれの青簾あおすだれは、枝葉えだの繁さかる二階を見せたが、近頃

いわれあつて世帯を詰めて、稲荷様向うの一軒につづめたので、

隣家はあたかも空屋である。

そこまで戻ると、我家の格子戸前まへの木戸を細こまめに開けて、差さしの

覗ぞく島田を見た。

「千世ちゃんかい。」

お孝は、ずっと来て、年上の女の落着いた声を沈めて、

「どうおしなの、お前さんもう寝ていたんじやないのかい。」

「ええ、寝ていたんですけれど、私、せんせい国手がお帰んなさるのを、姉さんが送って出て、この木戸で、何だか話していらつしやるのが寂しく聞えて、知っていたんですよ。カタカタと足音がして出ておいでなさいますから、あの、じゃ露地口までお送りなすつたんだ、そう思っていましたけれど、それにしてはあんまり遅いんですもの。

いつまでも、お帰んなさいませんし、それだし、あの、一度お寝ねまきつたんですから、姉さんは寝衣ねまきでしようのに、どうなすつたら。……私、心配で……ここまで起きて来て、あの、とおり通へ出て見

ようと思つたんですけれど、可こ恐わいでしょう。……それですから、あの、ここにつかまつて震えていましたの。」

「何だねえ、そんな弱虫が、それじゃ、来てくれたつて何にもなりやしないじゃないか。」

と口では笑いながら、嬉しい目で。その癖ひそもの案あじの眉まゆが顰ひそむ。……軒の柳に靄もやの有ある、瓦が斯すほの暗あき五月さつき闇やみ。浅黄あさぎの襟えりに頬ほ白はくう、………また雨あめ催もよの五位ご鷺さが啼なくのに、内うちへも入いらず、お孝たかずはイいむ。

「どうかしたの、姉さん。」

「いいえ、どうもしやしないがね、私わたしね、どうしようかと思つて
いるんだよ。千世ちゃん、ちよつとここへ来て御ご覧らん。」

「はあ。」と、お千世は何の気なし、木戸を内へギイと引く。

「静しずかによ、誰か目を覚すと面倒だから。」

「あい……何、姉さん。」

「ちよつと、木戸のこの柱に、こんなものが貼つて有るだろう。」

お千世は、薄気味悪そうに、お孝の袂たもとに掴つかまりながら、直ぐ目

の前まへなを、爪立つまだてつて覗くように、と見ると、比羅紙びらがみの、およそ二

枚まい舩だこぐらいな大ききの真ま中なかにぼつりぼつりと筆太ふでに、南無阿弥なむあみ

陀仏だぶつ、と書いたのが、じめじめとして、さながら、水から這上あつ

た流ながれ灌かん頂ちようのごとく、朦朧もうろうとして陰気に見える。

「可厭いや、姉さん、何？ ちよいと。」

お千世は息を切つて震え声。

「性が知れてるからちつとも気味の悪いことは無いんだよ。

お聞き、前刻さつき、国手せんせいが来なさりがけに、露地口を入ろうとし

て、ふつと、そら、その松家さんの羽目板を見なさるとね、こ

の紙が、ちようど、入口の取着とっつきの処に貼りつけて有ったとき。

巻煙草を買うのだつけ、とその拍子に気が付いて、表の小母さんとこの許へ行ったんだそうだけれど、もう寝ていたんだつて。

今夜は、来ようが遅かったわねえ。」

五十四

「国手せんせいはね、それから仲通まで買いに行つたんだとき。……そ

してねえ、一本喫かしながら入つて来ると、見たばかりで、もう忘れていたくらいだったのが、またふつと気が付いて、ああ、ここに有つたつけど、お思いの、それがお前、前の処には無くつてさ。同じ羽目板だけれども、足数七八つ、二間ばかり奥へ入つた処に、仇あだじろ白くなつて字が見える、……紙あが歩行あるいた勘定だねえ。」

「姉さん。」

「可こ恐わくはないんだつてばさ、この娘こは。」

とお千世の肩を抱込んで、

「何かお禁まじない厭いやでももあるかいツて、国手まじないがね、内で私にお話しなの。……何でしょう、月日も、堂寺てらも記かいてなければ、お開帳

の広告でもなからうし、別に、そんなお禁厭が有るツてことも聞
きません。変ですね、……そう云つていたんだがね。

お帰りなさるのを、かまち 框まで見送つた時、私何だか気になつてね、
行つて見ましようよツて、下駄を突掛つつかけて出ようとすると、（お
止し、密そつとあんなものを貼つて置いて、それを見たものに、肺病
か何か当の病人から ゆずりわた 譲渡して、荷を下そうなんのつて、よく
あるこつた。……お前は女だから神経を起すと不可いけない、私は工面
の悪い藪やぶのかわりにや、大地震の前兆だつて細露地を抜けるのは
気にならないから。）

じょうだん
串 戯

半分そう言つて、国手は平気なんだけれどもね。もし
か禁厭ならどうしよう、（貴方は担がないでも、荷を見せて可い

もんですかかってき、……災難ならせめて半分、私が背負しよいましよ
うよ。」とばたすた急いで格子をついで出ると、お前何んだらう

……

そらここへ来ているのさ。

羽目を伝わって、木戸へおいでなすつたんだわ。私も慄然ぞっと総
毛だった。

はてな、字が殖ふえて妙な事が書いてある。前刻さつき見たのは念仏ば
かりで、こんなものは無かつたつて、御覧。」

と云う、南無阿弥陀仏の両りよう傍わきに、あいあい傘の楽書なめくじのよう
に、（となえろとなえろとなえろとなえろ、）と蛙なめくじ蟪のごとく
のたくり廻る。

「国手がね、（何だ、浄土か真宗にも、救世軍が出来たんじやないか、）って笑ったけれどね、……私はドキリとしたんだよ。仮名の形を一目見ると分った。お念仏を（唱えろ唱えろ。）——覚悟をしろ——ツて謎じやないか。こりや、お前、赤熊の為業しわざだね、あの、鯁野郎にしんの。」

「まあ、熊兄さん。」

「止しておくれ。」

はたはたと袖をはた払いて、

「身ぶるいがする。いつかお巡査おまわりさんの来なすつた朝、覚悟が有つて長棹ながざおに掛けてから門かど傍そばへも寄せつけない。それを怨んで、未練も有つて、穴から出たり入ったり、ここいらつて廻して

いるに違いない。何の男のようでもない。のツそりの蝦夷アイヌなんか、私は何とも思わない。悪く形でも顕あらわして見たが可いい。象牙ばちの撥はたがあるものを、払はたき殺しても事は済む。——国手の身のまわりをつけ廻まわされるんだと、ね、千世ちゃんや、姉さんは本当に案じられる。

角の紀田屋きだやまで送って行つて、車をそう云つて帰して来たがね、獸は駆けるのが疾はやいやね、車にも乗れば乗るだろう。——泊めたかったが、お肯ききでなし、……」

とお孝は独ひとりごと言ことのように云つて、

「途中で、またそうでもない、新聞にお名前が出るような事なんぞ無ければ可いいが、」

と気を揉む頬の後おくれげ毛は、寝みだれてなお美しい、柳の糸より優しいのである。

「姉さん。」

お千世が顔を覗いて、

「縁起棚へお燈明をあげて、そしてお祈をしましょうよ。私も拝みますわ。」

「嬉しい娘こだね。」

と頬ほおずり摺すりしたが、襟を合せて凜りんとして、

「お待ち、私、考えた。……お稻荷様へお百度を上げよう。」

とて見返る祠ほこらは、瓦斯燈もやの靄ひを曳ひいて、空地はすに蓮あかの花の紅あかいがごとく、池があるかと浮いて見える。

「数取りにはね。」

と云うより早く、ぴりぴりと比羅紙を引剥がす……

「これを裂いて紙捻こよりにしようよ、——人を呪わば穴二つさ。見たが可い。」

気の立つたお孝は、褌を引上ぐるより前さきに、雨霽あめあがりの露地へ、
ぴたと脱いだ、雪の素足。

意気いきじ地も張も葉がくれの闇やみに、男を思うあわれさよ。鶴を折る
手と、中指に、白金プラチナの白蛇輝はくだく手と、合せた膝かに、三筋五筋か
世捻んぜより、柳の糸に、もつれ纏もつるる、鼓の緒にも染めてまし。

あわれ、かかる時は、あすの逢瀬を楽みに、帰途かえりを案ずるも心
ゆかし、寐ねられぬ夜半よわの待人掛ける、小さな犬こしらも拵え交せて、お

千世に背打たれて微笑みもしたが。

柳の葉の散る頃は、——続いて冬枯の二日月、鬢櫛の折れた
 る時は——

ひとふり
 一口か一挺か

五十五

——「露地の細路駒下駄で。」——

男が口の裡で、フト唄って、

「不可んぞ、これは心細い。」と、苦笑いをしながら立直って、

素直まつすぐに杖ステッキを支くと、そのまま渡り掛けたのは一石橋。月はないが、秋あかるく、銀河の青い夜の事。それは葛木晋三である。

露地に吾妻下駄カタカタの婀娜あだな女と因縁のある、唄の意味も心細いが、お孝が投遣りに唄うのは、勝気と胆勇を示すものと云つて可い。その口癖がつい乗つた男の方は、虚気うつけと惑溺わくできを顕あらわすものと、心付いた苦にが笑わらいも、大道さなか橋の上。思出し笑わらいと大差は無いので、これは国手せんせい我身ながら（心細い。）に相違ない。その虚つげいに憑入る、魔はこんな時に魅さす、とある。

今、橋の上を欄干に添つて、日本銀行の方へ半ば渡り掛けると、橋詰いづこの、あの一石餅うずくまの、早や門かどを鎖とぎした軒下おおきに、大な立ん坊まの迷いづこ児いづこのごとく蹲うずくまつていた男がむらむらと立つと、ざわざわと毛の音

を立てて、鼻息を前にハツハツけだもの獣の呼吸いきづかい。葛木の背後うしろに迫つて、のそつと前へ廻ると、両手を掉ふつた不器用な、意気地の無い叩頭おじぎをして、がくりと腰を折つて、

「せんせい国手、お願い！」

と喘あえいで云う。

はつと一歩ひとあしあとに退のいて、立停たちどまつて、見透みすかして、

「何だ、何ですか。」

彼の影の黒く大なるに對して、葛木の手のカウスは白く、杖ステッキは細かつた。

「直訴であります。国手。」

「直訴とは……？」

「直訴とは、……直訴とは、切、切羽詰ったです、生命いのちがけで、
 歎願あんたをするです。貴方を將軍家だ思つて、橋から青竹を差出し
 ます。俺は佐倉宗五ですのだから、ええ。この願ねがいを聞届け遣わされ
 りや、殺されても、俺はりつけ、磔はりつけになつても可ええのです。国手。」
 「何です。……唐突だしぬけに、と云うんだけれども、私はお前さんを
 知っています。また、お前さんも知らないとは言わせません。ま
 い。そしてお頼みと云うのは何です。」

「国手、御診察ごんざいが願ねがいいてえだな。」

と、粗ぞんざい雑ざいに太く云つた。が、口覚えに練習した、腹案の口上
 が途中で切れて、思わず地声を出したらしい。……で、頭を下げ
 て赤熊は橋の上に蹲る。

四五分では、話のけりは着ないつかと覺つたろう。葛木は巻煙草を点けた。燃えさしの燐寸マツチをト棄てようとして水に翳かぎすと、ちらちらと流れる水面の、他の点燈よそともしびに色を分けて、雛ひなの松明たいまつのごとく、軸白く桃色に、輝いた時、彼はそこに、姉を思つた。潰島田の人形を思つた、榮螺さざえはまぐりと蛤はまぐりを思つた、吸口の紅を思つて、火を投げるに忍びなくなつて、——橋に棄てた。

これと齊ひとしく、どろんとしつつも血走つた眼を、白眼勝まなこに仰向まなこいて、赤熊の筒袖の皮擦すれ、毛の落ち、処々ところどころ、大なる斑おおいまだらをなした蝦蟇がまのごときものの、ぎろぎろと睨にらむを見たのである。

が同時にまた、思出の多いこの頼母たのもしさを感じて、葛木は背う後に活路しろを求めるとを忘れつつ、橋の欄干に、ひた、とその背せなを

もた
凭もたせた。

五十六

葛木は従しよ容ようとして云った。

「お前さん、診察が頼みたい？……そうすりや死んでも可い。そんな解らない謎見たいな事を言わないで、判はつきり然と、石か、瓦か、当って砕けたら可いじゃないか。私も診察なら病院へ来たまえなどと廻りくどいことは言わないから。」

「実際、願いたい次第です。就てはで、御覽の通り、着のみ着のまま云ううちにも、擦切れた獣けものの皮一枚だ、国せんせい手せい。雨露しの凌

ぐ軒はまだしも、堂社やしろの縁の下、石材いしや、材木と一所にのたつて
いる宿なし同然な身の上で、御挨拶も手続も何も出来ねえです
で、そこでもって直訴だよね、生命がけで願ねげえてえだな。」

「本当の診察なら、私は不可いけない。まるで脈を一つ採つたことの無
い、自分の風邪をひいたのには葛根湯かっこんとうを飲んで、それで治る医
者なんだ。こつちも謎のようなことを云うんじゃない。事実だよ。
診察は、から駄目なんだよ。」

「決けしてそれは脈を取って貰うには当らんです。で、ただ国手の
口一つだなあ。」

「口一つかね。」

「そうですわ。」

「どうするんですか。」

「四の五の無いで、ただ一言、（お孝に切れる。）云うて下さりや可いのですのだい。」

「大方そんな事だろうと思つたよ、……この診察は当つたな。」

葛木は莞爾にっこりしながら、

「折角だ、が、君、頼まれないよ。」

「何で頼まれん、何で。ありや俺の生命いのちですが。」

「私の生命かも分らんのだ。」

「俺の女房にようぼだ事、知らんのかい。」

「私は芸者だと思つているがね。」

「何でも可えい。」

とドス声で忙込みながら、

「すっぱり切れてくれ、頼むだでな。」

「女に言え、女に、……先方で切れればそれ迄よ。人に掛合われて、自分の情婦を、退くも引くもあるものか。」

「……自分の情婦。……ええ堪らん、俺の前でお孝の事を。……うう、筋が引釣る、身体が震える。」

生命とも、女房とも思う女を引奪られた恋の敵に、俺の口から切れてくれ頼むと云うは、これ、よくよくの事だ思わんですだか。

女に云うて肯く程なら、遠くから影を見ても、上衣の熊の毛まですくすく立つお前んに、誰、誰が頼む、考えんかい。」

「私も同じことを言いたいな。女が肯かないほどのものを、男が掛合われて引退ひきさがる奴がありそうな事だと思うのかい。」

「俺を人間だと思うか、国手。」

赤熊はすつくと立った。

「悪魔だ、鬼だ、狂きちがい人だ、虎だ、狼だ。……為にならんぞ！」

「ああ、その上にまた熊でも可いよ。」

うぬっ
「汝！」

葛木は欄干ステッキに杖を倒して、柔やわらかに手を払はたいた。

「刃物を持つてるか。」

「むむ、持たんことがあるもんだか。」

ふたふり
「二ちよう口あるか、二挺ちよう持つてるか。」

「どうするだい。」

「^{ひとふり}一口渡せ、一挺貸せ。——持たんのか。一本しかない刃物なら、^{やみうち}暗撃にしろ。離れて狙え。遠くから打て。前に廻つて、^{なり}名告掛けて、生命の与^{やりとり}奪をすると云うに、敵の得^{かたき}ものを用意しない奴があるものか、はははは、馬鹿だな。」

艸冠

五十七

「ああ、言わっしやる。」

赤熊は身構、口吻、さて、急に七つ八つ年を取ったように
 老実に力なく言うのであつた。

「今言わしやつたは度胸でないで。胆玉でないですだ。学問の
 力だ。国手の見識ですわい。

詫入りますで、はい。

もとより將軍様に直訴する云うたほどです、はじめから国手
 の身体に向うて手を挙ぎようとは思わんですけれど、ものは発奮
 だで、赫としたでな。そりや刃物措け、棒切一本持たいでも、北
 海道釧路の荒土を捏ねた腕だで、この拳一つでな、頭ア胴へ滅込
 まそうと、……ひよいと抱上げて、ドブンと川に溺める事の造作
 ないも知つたれども、そりや、あれを見ぬ前だ。

あれよ、……あの、大学校の大教室でつけえへやに、椅子で煙草を喫のんでござった、人間離れのした神々しい豪えらい処を見ぬ前だで——あれを見た目にや、こんなその、土竜むぐら見たようになってしもうた俺が手で、危いことするは余り可あつたら惜ものだ思う気が、ふいと起つてどうにも出来ねえのですのだで。

それともに、な、国手、お前まんの生命を搔かっぱら払いさえすりや、お孝との振よりが戻つて、早い話が旧もともと々通り言うことを肯いて、女が自由になる見込さえあればですだ、それこそ、お前まんが国手でも、神でも、仏でも、容赦する気は微塵みじんも無いだ。

無いだ。が、お前まんに逢つて、機嫌の悪い事でもあつた日には、家中に八ツ当りで、十言とこと云うことに、一口も口を利かぬ。愚おろに返

つた苦勞女くろうとをどうするだね。お前んの身に異常がありや、女も一所に死ぬですだろうで、……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

国手、俺は、あの女は生命より大事です、死のうにも死に切れん。生きとるにも生きとられん。

国手、顔を見られないくらいなら、姿だけでも見るが可えし、姿さえ見られんなら声ばかりも聞くが増だし、その声さえも聞かれないなら、あしおと 躑音でも聞いていたい。その躑音にすらすらと衣服きものの触る音でもしようなら、魂に綱をつけて、ずるずる引摺り引ひきず廻わされて、胸ひつかを引搔ひつかいて、のた打廻るだ。

お前ん、誰たれも知るまいし、また知らせるようにもせんですが、俺はお前ん、二階から突出されて、お孝の内に出入りではいが出来なく

なつてからは、天に階子掛けるように逆せ上つて、極道、滅茶めっちゃ苦茶、死物狂いで、潰れかけた商会は煙けむにする、それがために媽か々かあは死ぬ。」

「女房が——死んだ。」と、学士は鋭く口早に言返す。

「二歳ふたつになつた小児こどもは棄てる。」

「……………」

「木賃泊りの天井裏に、昼は内に潜つて、夜よになると、雨でも、風でも、稲葉屋の周囲ぐるりを、胡乱うろつき廻つて、稲荷さんの空地しやがに蹲しゃがんでもいりや、突当りの黒堀くっつに附着くっついて立明たちあかす……そうして声を聞く、もの音を考えるですだい。

過日いつかじゅう来から、隣の家が空いたですで、この頃では、大概毎晩、

あの空屋で寝ているですだ。」

「空屋でかい。」

と、驚いて云う。

「国手、お前んはまた毎晩のように、蛇が蟠とぐろを巻いておる上で、お孝といちやついてござる勘定だ。」

が、俺の方は、おつけ晴ばれて、許して縁の下へ入れて置いて貰う方が、隠忍んで隣の空屋に潜るよりかも希望のぞみですだ。」

襟あたりの辺を引搔くと、爪くわを銜くわえる子供のように、含羞はにかむ体はにかに、ニヤリとした、が、そのまま、何を囓くちなむか、むしやむしやと口舐なめずる。

五十八

「まだ慾よくの言いえば、お前まんとお孝こと対さしむかい向かいで、一猪ひとちよこ口こ飲やる処ところをですだ、敷居しきいの外ほかからでも可えい、見みていたいたいものものですだ。

お孝こを俳やくしや優うで、舞ま台だいだ思おもえば、何なにとしてしていらいられても、顔かほを見みて声こゑを聞きく方かたが、木戸きどに立たつて考かんえとるより増まだからからな。」

俯うつむ向むいて半はんば泣なき、

「嫉ねたみ猜そねみは、まだここうまで惚おぼれない内うちだだと考かんえるで。

初はつ手てはね、お前まん、喧けん嘩わした事ことも、威おどした事こともあるあるですすだい。

現いまに国せんせい手て、お前まんの大だい学がく病びやう院いんの何なにとか教きやう室しつへ俺おしかが推おし掛かけて、

偉ゐい人ひとたたちちに吃びっくり驚おどろして遁にげげて返かえつた、ああの朝あさですすだ。忘わすれれんで

すがい。——稲葉家の格子へ巡查が来て、お孝にお前んの身の上話はないて、——何が嬉しい、……俺は二階で聞いて胆きもたま魂にえが煮くり返るに、きやつきやつきやつと笑うて、情事いろごとの免許状ようなものを渡いて帰った。お孝が、直ぐに内中の芸者を茶の室まへ集めて、ですだな、国手。

（私は今日からおかみさん、そう思つて附合つておくれ。そのかわり、私もその気で附合うから、借金なんか、まけて欲しい人には直ぐに目の前で帳消しに棒を引きますよ。）——だ、お前ん。その勢いきおいで二階へ帰つて来ると、まだ顔も洗わんでおる俺を捉とらまえて、さあ、突いきなり然帰つておくれです。……芸者なら旦那が有ろうが、何が来ていようが構わない。それが可い厭やならお止しだけ

れど、極きまつた人が出来た上は、片時も、寝衣ねまきで胡坐あぐらかいた獣なんぞ、備前焼の置物だつて身のまわり六尺四方は愚おろかなこと、一つ内へは置けないから、即座いま帰れ。……云うて生真面目きまじめですがい。

俺、はじめは笑つたです。が、怒つたです。愚痴言うた。……頼みもしたのです。

耳にも入れいで、（汚らわしい、こんな物を。）お前ん、お孝が蒲団を取つて向うへ匆はねると、その時ですわい。かねて国手の事を俺嗅かぎつけて知つとつたで、お孝を威しつけてくりようとな、前の夜さり、懐ふところ中に秘かくいておつたですれども、顔を見ると、だらけて、はや、腑ふが抜けて、そのまんま、蒲団の下へ突つ込んで置いた、白靴しらさやの短刀が転がって出たですが。

お孝が見たでな。天道時節ここだ思うて、（阿魔覚悟があるぞ！）睨にらんだですだ。ばたばたとお孝が立つで、占めた、遁にげる、恐れたぞ。俺が勝った、と乗掛つて、階はしご子段だんの下口おりくちで捉とらまえたは可かつたですれど、どうですかい。

お孝は遁げたでないですが。……あの階子は取外しが出来るだ
 でね、お孝が自分でドンと突いて、向うの壁へ階子をば突つぱずし
 たもんですだ。（短刀をお抜き、さあ、お殺し、殺しように註文
 がある。切つちや不可いけない、十の字を二つ両方へ艸冠くさかんむりとやらに
 目いをかいて。）とお前ん、……葛木と云う字に、突いて殺せ。

（名まで辛抱は出来まいが、一字や二字は堪こえて見せよう。さあ
 早く。）と洞爺湖どうやこの雪よか真白まっしろな肌を脱いで、背筋のつるつる

と朝日で溶けて、露の滴りそうな生々としたやつを、水浅黄ち
らめかいて、柔りと背向きに突着けたですだで。

豊艶と覗いた乳首が白い蛇の首に見えて、むらむらと鱗も

透く、あの指の、あの白金が、そのまま生きて出たらしいで、

俺はこの手足も、胴も、じなじなと巻緊められると、五臓六腑が

蒸上つて、肝まで溶融けて、蕩々に膏切つた身体な、――

気の消えそうな薫の佳い、湿つた暖い霞に、虚空遙に揺上げられ

て、天の果に、蛇の目玉の黒金剛石のような真黒な星が見えた、

と思うと、自然に、のさんと、二階から茶の間へ素直、棒立

ちに落ちたで、はあ。――

と五十嵐伝吾は腹を揺つて、肩を揉んで、溜息して言う。

河岸の浦島

五十九

「その足で、お前^まん、大学に押掛けてからは、御存じの通りだ。
さあ、後の、俺が身体どうなるだね。

天人に雲の上から投落されたも、お前ん、勿体ないだが、乙姫
様に海の底から突出されたも同^{おんなじ}一です。

また始めに、お孝が俺のものになった時は、知ったほどの誰も
彼も、不断云う、赤熊だことの、膾^{おつとせい}膈^だ臍^だことの、渾^{あだな}名^をを止^やめ

て、浦島だ、浦島だ、言うたもんで。俺も日本橋に竜宮が在る、
 と思うたですが。その筈はずですだね。鯨に乗つて泳ぎ込む程の不思議
 議ぎでのうて、熊がお孝と対さしむかい座いに、稲葉家の長火鉢の前に胡坐あぐら
 組めますまい。

見得は言わねえですぞ。国手せんせいの前だ。

死んだ媽かかあは家付きで、俺は北海道へ出稼中、堅気に見込みを付
 けられて、中ぐらいな身代へ養子に入つた身の上だがね。日の丸
 の旗を立てて大船一艘ぽい、海産物積んで、乗出いて、一花咲かせる
 目的もくろみでな、小舟町へ商會を開いた当座、比羅代びらりの附合で、客
 を呼ぶわ、呼ばれもしたので、一座に河岸の人が多かつたでな。
 土地の芸者も顔が揃うた。二三度、その中に、国手、お前も因

果は遁れぬ、御存じですだ、滝の家の清葉とな、別嬪が居たで
ねえですか。」

葛木は吃と見る。

「容色はもとより、中年増でも生娘のような、あの、優しい処

へ俺目を着けた。——睨、床の間から睨んだら、否応はあるま

いわい。ああ、ここが俺膺膺臍の悲しさだ。金になる男のぬくと

みにや、誰でも帯を解く、と奥州、雄鹿島の海女も、日本橋の芸

者も同じ女だと、北海道釧路国の学問だでな。

——吃驚したですだ、お前ん……ただ居りや袖も擦合うけれ

ども、手を出すと、富士の山の天辺あたりまで、スーと雲で退

かれたで、あつと云うと俺、尻餅を搗いたですが。

(御守殿め、男を振るなんて生意気な、可、清葉さんが嫌った人なら、私が情人いろにしてやろう。……)

これだで国手。それこそ悪く傍そばへよると、撥ばちで打ぶたれるぞ、と友達ともだちの衆しゆうに用心用心されたそのお孝たかが、俺おれの手を曳ひいて抱かか込んだでな。いや、お孝たかと来ては、対あいて手の清葉きよはを驚おどかすためには、裸はだか体かで本当ほんとうの罷ひぐまにも乗兼のりかみねえですが。——後あとで聞きくと、清葉きよはを口説くちせいて振ふるられたと云いうために、お孝たかの関かん係けいをつけたのが、一人二人でねえと云いうだでな。」

葛木かきは聴きいて、

「私も御多分ごたぶんには漏もれんのだぜ。」と、静しずかに衣兜かぶとに手てを入れる。

赤熊あかぐまは星ほしが痛いたそうに、額かぶを確しかと両手りょうてで蔽おおい、

「ところが、そうでない。調子が違うた。……誰もそのかわり、お孝の口から、（可厭いやになつたら、それツきり、御免なんだよ、可いいかい。）と初手に念を推おされておるで、突出されて謂いう理窟は無いいだね。

そりや、随分俺が身だけでは金も使つた。けれどもな、鯨や数の子の一ひと庫二庫、あれだけの女に掛けては、吹矢で孔くじやく雀だ。富とみ籤くじだ。マニラの富が当らんとつて、何国どこへも尻の持つて行きようは無いえのですもの。

が、人情は理窟でないで。

女房も生命も、その生命から二番目の一人の小児こどもを棄ててまでも……」

「ちよつと……」

葛木は急に遮りつつ、

「ただ聞いてはいられない、……お互に人の兇こだよ。お前、小兇を捨ちまったらと云うのは？ 構こいつけない、打うち棄ちつてあるという意味なのかい。」

「それでねえです。」

「人に遣やつたという事かね。」

「違う。」と、ぶつきらぼうに言う。

「棄すて子ごをしたか。」

と小さな声。

頭を釘

六十

赤熊は、まじまじとして、頹然ぐったりと俯向うつむいたが、太いたく恥かじたらしく毛皮の袖を引搜すと、何か探り当てた体で、むしやりと嚙かむ。

葛木は眉を顰ひそめて、

「ちよつと、小兒も小兒だし、……前刻さつきから、気になるが、とにかく、色事の達たて引中だ、なあ、まあ。……それに、そんな事をしてくれては不可いけないじゃないか。見ていられない、……何を食うんだ。」

「はあ、これかね。」

と、食った後の指を撮つまんで、けろりとした顔を上げて、気も無い様子で、

「虱しらみだと思つたかね、へへ、違うですが。大丈夫だで、国手。脂

の抜きようが足りんだつた処へ、寝るにも起きるにも脱だがねえもんで、こりや、雨な、埃ほこりな、日向な、汗な、膏あぶらで熊の皮に湧わいた蛆うじだよ。」

「え。」

「虫ですがい。豪えらく精分の強い、補おぎ剤ないになるやつで、なあ。」
伝吾は厚ぼつたい口をだらりと開けつつ、

「これが有るで、俺、この頃では、一日二日怠けて飯食わねえ事

あるですけれども、身体が弱らん。かえって、ほかほかあたたか温だね。取っちや食い、取っちや食いするだ。が、あとからあとから湧くですわい。二十間の毛皮を縫ぬいぐる包みにしておるで、形のある中うちは虫が湧くですだ。」

葛木は面かおを背けて、はつと吐こうとした唾つばを、清葉の口紅と、雛の思出、控えて手ハンケチ巾を口に当てた。

——やがて、お孝が狂気になったも、一つはこの虫もとが因である

六十一

「貴下、あなた何をしておられるかね。」

靴を忍んで唐突に、だしぬけずかずかと寄つて声を沈めたのは巡查であつた。

「ちよつと談話を。」

葛木はその時まで、虫に背けた面を向ける。と、星に照らして、

「や、せんせい国手ですか。」

「あなたおお貴官で。」

「この橋は妙な橋ですな。」

と莞爾しながら、にっこり角燈を衝と向ける。そこに背後むきにうしろ蹲ん

だやつ。

「こちらは、」

「旧友です。ふとここで出会ったんです。」

「お話しなさい……失礼しました。」

「ああ、貴官、いつぞやは——一度、更あらためてお目に掛りたいと思つています。」

「難ありがと有う。機おり会を待ちます。」

と銀河を仰ぎ、佩はい劍けんの秋蕭しゅうさつ殺ころとして、鵲かささぎのごとく黒く行く。橋冷やかに、水が白い。

「夜が更ける……おい、そして、そして小児は。」

「国手、臟腑えから餌えを吐くまで何事も打ぶまけたで、小児を棄すてた処を言うですれど、これだけは内分に願ねがいたいでね、極ごくねえ。……巡査にでも知れるとならんですだ。」

「余り、巡査に遠慮する風でもあるまいじゃないか。」

「そうでねえです。河岸の腸拾わたいや、立ん坊は大事無いですれど、棄子が分ると引っぱられるでね、獄へ入れられる。それも可えですが、ただ、そうなると、縁の下からも、お孝の声が聞かれんですだよ。」

葛木は思わず吐息した。

「無論言いはせん。」

「なら話すだがね、小児を棄てたのは、清葉の門かどだで。」

「何、清葉の。じゃ、あの滝の家で拾って、可愛がつてると云う

小児は、お前のかい。」

「小児は幸しあわせ福ですだ。」

「むむ、幸福だ。」

と引入れられて、気を取られた調子が高く、

「清葉が、頬摺りしたり、額を吸ったり、……抱いて寝るそうだ。

お前、女房は美しかったか、綺麗な児だつて。ああ、幸福な児

だ。可羨しいほど幸福だ。」

摺つて出るように水を覗く、と風が冷かに面を打つ。欄干に確

と両手を掛けた、が、熟と黙つて、やがて静に立直つた時、酔

覚の顔は蒼白い。

「私は馬鹿だよ。……もし私を、仮にお前の境遇に置いたとする

と、そのくらいな智慧も分別も決して無いのだ。お前は私より知

識がある、果断がある、……飯のかわりに、熊の毛の虫を食つて

も、それほど智慧があり、果敢もあれば、話は分ろう。

大分遅い、……今度の巡査はこのままには通らんぞ。さあ、早い処を言え。

お前の要求は肯入れられない、二人は断じて縁を切らない……」
半ば聞いて赤熊はまた頹然ぐたりとした。

「そう言ったら、お前は どうする、私を殺すか。」

「……………」

「お孝を殺すか。」

「ええ、あれを殺せますほどならです、お前まんに、手向いする
だい。殺したい、殺したい、殺して死にたい思うても、傍そばへ行き
や、ぼつと佳いい香においのするばかりで、筋も骨も萎なえなえ々々と、身体がは

や、湿った粘のりのようになりすだで。」

「チヨツ、しつかりしないのか。お孝に手出しが出来なかつたら、せめて私を殺す、私を狙う計画を立ててくれ。勇気を起せ、張合を附けろ。私が頼む。そして私にお前の言分を刎はねつけさせてくれないか。私も頼む、その様子じや霽もやを引ひき搦つかんで突返すようで、断るに断り切れない。……こんな弱つた事は無いのだ。」

おい、男がものを言掛けるには、もしそれが肯入れなかつたらどうする、と覚悟を極きめてかかるのが法だ。……恥を知れ、恥を知れ。氣を判は然きりして出直して、切きれ物ものか、刃物の齒こたえのあらゆるようにして、私に断き然ぱり、（女と切れない。）と言わしてくれ

。」

葛木が焦^じれて気色ともに激しくなるほど、はあはあと呼吸を内に引いて、大息で喘^{あえ}いだが、獸^{けもの}の背の、波打^うつ体^{てい}に、くなくなくなる、とんと橋の上へ、真俯^{まうつむ}向けに突伏^{つつぶ}してしまふ。

「お願いです、拝むです。……邪魔ならば、縁の下へ突込^{つっこ}まりよう。柱へうしろ手に縛られていながらも、お孝の顔を見ていたいで、便所の掃除でも何でもする。活動写真で見たですが、西洋^{うしやま}は羨^{うらやま}しい。女の足を舐^なめるだあもの。犬になつても大事ねえだ、香^{におい}が嗅^かぎたい、顔が見たい、この通り拝む、国手。恥も、外聞も、お孝があつての上です。よ。」

わつと云うと、声を上げて、ひくひく後を引いて泣く。

葛木は踵^{くびす}を刻んで、

「聞け、聞け。だが何にも言うことが出来ない。……では、お前、私がいれば、お孝は確にお前に戻るか、その、お前に、お孝が戻ると思ふのかよ。」

「そりや、そりや戻つても戻らいでも、国手があるより増だでね、声だけ聞くでも姿だけ見るでも、国手と二人の時と、お孝一人の時とでは、俺が心持がどう違ふか考えずとも分るだでね。拝むですだよ。何も言わんで。……こ、こ、この橋板に摺こすりつ付けて血を出して願いたいども、額の厚ぼつたい事だけが、我が身で分る外何にも分らん。血の出ないのが口惜くやしいですだ。」と頭を釘に、線路の露の鉄を敲たたく。

学士はフイと居なくなつた。銀河のあたり、星が流るる。

露霜

六十二

はツと声に出して、思わず歎息ためいきをすると、浸むにじ涙を、両の腕。

……おもて面をひしと蔽おおうていた。

くるま俵よなかの上で——もう夜半二時過。

この辻車が、西河岸へ又ツと出たと思うと、

「ああ。」

葛木あわただは慌しく声を掛けた。

「ちよつと待て、車夫。」

「へいへい。」

「忘れものをして来た、帰つてくれないか。」

「唯今、乗した処へ。」

「ああ。」

夜延仕でも、達者な車夫で、一もん字にその引返す時は、葛木は伏せた面を挙げて、肩を聳かすごとく瘦せた腕を組みながら、切に飛ぶ星を仰いだ。が、夜露に、痛いほど濡れたかして、顔の色が真蒼であつた。

「可し、ここで——ここで——ここで——」

と焦つて、圧えて云い云い、早や飛下りそうにしつつも駆戻る

発奮はずみにずかずかと引摺ひきずられるように町の角を曲つて、やつと下立つた処は、もう火の番を過ぎて、お竹蔵の前であつた。

直ぐに稲葉家の露地を、ものに襲われた体に、慌しく、その癖靴を浮かして、跫あしおと音を密ひそめて、したしたと入ると、門かどへ行つた身をかえ翻して、柳を透かしながら、声を忍んで、二階を呼んだ。

「お孝さん、……」

寂然ひっそりとしていたが、重ねて呼ぶのに気を兼ねる間も無く、雨戸が一枚、すつと開あいて、下から映さす蒼あおい瓦がす斯を、逆に細流せせらぎを浴びたごとく濡萎ぬれしおれた姿で、水際を立てて、そこへお孝が、露の垂りそうに艶麗あでやかに顕あらわれた。

が、それは浴びるばかりの涙なのである。

と、見る時、葛木も面かおにはらはらと柳しづくの雫が、押えあえず散乱する。

今宵は三度目である。宵に来て、例いづものごとく河岸まで送られて十二時過に帰った時は、夢にもこうとは知らなかった。——一石橋で赤熊に逢つて、浮世を思捨てるばかり、覚悟して取つて返した時は、もう世間もここも寐静ねしずまつていた上に、お孝は疲れた、そして酔つてもいた。……途中送る折も、送る女が、送らるる男の肩に、なよなよと顔を持たせて、

「邪慳じゃけんだね、帰るなんて。」

ぐつすり寐込んだに相違ない。ええ、決心は鈍ろうとも、ままよ、この次に、と一度引返そうとして、ただ、口ずさみのひとり

でに、思わず、

「お孝……」

と呼ぶと、

「あい。」と声の下で返事して、階子はしごを下りるのがトントンと引摺るばかり。日本の真中まんなかに、一人、この女が、と葛木は胸が切せまつたのであつたが。

暖いねや闇も、石のごとく、砥とのごとく、冷たく堅く代るまで、身を冷して涙で別れて……三たび取つて返したのがこの時である。

お孝は、乱みだれ書がきの仮名に靡なびく秋風の夜更けの柳にのみ、ものを言わせて、瞳も頬も玉を洗つたように、よろよるとただ俯向うつむいて見た。

「済まないがね、——人形を忘れたから。」

「はい。」

と清く潔い返事とともに、すつと入ると、向直つて出た。乳の下を裂いたか、とハツと思う、鮮血を滴らすばかり胸に据えたは、宵に着て寝た、緋の長襦袢ながじゆばんに、葛木が姉の記念かたみの、あの人形を包んだのである。

ト片手ついたが、欄干てすりに、雪の輝く美しい白い蛇の絡んだおもかげ俤。
「お怪我の無いよう……御機嫌よう。」

とはらりと落すと、袖で受けたが、さらりと音して、縮緬ちりめんの緋のしぼは、鱗が鳴るか、と地にすべにすべたつて、潰島田の人形は二ふた片ひら三片花を散ちらして、枝も折れず、柳の葉末に手に留とまんぬ。

「清葉さん、——さようなら。」

カタリと一幅ひとはば、黒雲の鎖とぎしたような雨戸が閉つて、……

——露地の細路、駒下駄で——

と心うらかな悲しい、が冴えた声。鈴を振るごとく、白銀しろがねの、あの

光、あけの明星か、星に響く。

葛木は五体が窘すくんだ。

稲荷堂の、背裏うしろから、もぞもぞと這出して、落ちた長襦袢に掛

つて、両手に掴つかんだ、葛木を仰ぎ見て、夥多あまたたび押頂いたのは赤

熊である。

車夫の提灯ちようちんが露地口を、薄黄色に覗のぞくに引かれて、葛木は

つかつかと出て、翻然ひらりと乗ると、楫かじを上げる、背に重量おもしが掛つて、

前へ突伏すがごとく、胸に抱いた人形の顔を熟と視た。

彗星
ほうきぼし

六十二

その翌年の春である。日本橋三丁目の通の角で、電車の印を結んで、小児演技の忠臣義士を煙に巻いて、姿を消した旅僧が、胸に掛けた箱の中には、同じ島田の人形が入っていたのである。生理学教室三昧の学士も、一年ばかりお孝に馴染んで、その仕込みで、ちよつと大高源吾ぐらいは遊ぶことが出来たのである。

却説さて、葛木法師の旅僧は遠くも行かず、どこで電車を下りて迂まわりみち廻わしたか、多時しばらくすると西河岸へ、船から上つたごとく飄ひよう然ぜんとして顕あらわれて、延命地藏尊の御堂みどうに詣もでて礼拝らいはいして、飲酒さけ家の伯父のみさんに叱なられたような形で、あの賓頭廬びんずるの前に立つて、葉山繁山、繁きが中に、分けのぼる峰の、月と花。清葉とお孝の名しるしを記しにした納手おさめてぬぐい拭ぬぐの、一つは白く、一つは青く、春風ながら秋の野に葛くずの裏葉ひるがえの翻ひるがえる、寂しき色に出いでて戦そよぐを見つづ、去るに忍しのびぬ風情であつた。

茶を振舞つた世話人の問に答えて、法ほつたい体たいは去年の大晦日おおみそかからだ、と洒落しやれでなく真顔で云うよう、

「いや、夜遁よにげ同然どうぜんな俄にわか発心ほつしん。心よりか形だけを代えました

青道心でございます。面目の無い男ですから笠は御免を蒙ります。
 ……どこと申して行く処に当は無いので、法衣ころもを着て草鞋わらじを穿く
 と、直ぐに両国から江戸を離れて、安房上総あわかずさを諸所経歴へめぐりました。
 ……今日こんにちは、薬研堀を通つてこつちへ。——今度は日本橋を振
 出しに、徒歩かちで東海道に向いますつもり。——以来は知らず、ど
 こへ参つても、このあたりぐらい、名所古蹟はございませんな。」
 と云つて、ほろりとして、手を挙げて茶盆を頂いて出て行く。
 人足繁き夕暮の河岸を、影のように、すたすたと抜けて、それ
 からなぞえに橋になる、向つて取附とつつきの袂たもとの、一石餅とある浅黄
 染のれんの暖簾くぐくを潜つて、土間の縁台の薄暗い処で、折敷装おしきもりの赤飯を
 一盆だけ。

その癖、新しい銀貨で釣銭を取つて一石橋へ出た。もう日が暮れたのである。

半ば渡つた処、御城に向いた、欄干に、松を遠く、船を近くたたずいで、凭もたれ掛かつたが、熟じつとして頼杖を支ついて、人の往来ゆききも世を隔てたごとく、我を忘れた体であつた。

「さようなら。」

と一言掛けて、発奮はげむばかりに身を翻ひるすと、そこへ、ズンと来た電車が一輛だい。目め前まへカラカラと打ぶつかりそうなのに、あとじさりにお圧おされ、圧おされ、煽あおられ気味に蹠よ踵ろ々々となつた途端である。

「火事だ、火事だ。」

ハンドル把と手を控えて、反身そりみになつた車掌が言つた。その帽ひさしの、鹿も

顔も真赤まつかである。

黒い水の、箱を溢あふるるばかり、乗客は総立ちに硝子がらすに犇ひしめく。

驚おどいて法師が、笠かさに手を掛け、振返ると、亀甲形きっこうがたに空を劃くぎつた都会みやこを装よろいう、鎧よろいのごとき屋根を貫くいて、檜物町ひなものまちの空に※と立つ、偉大なる慧ほうきぼし星ほしのごとき火の柱が上あつて、倒さかしに迸とばしる。

「滝の家だい。」

その見当とは言わず、……ほとんど直覚的に、清葉の家を、耳はたの傍はたで叫こんで、——前刻さつきから橋の際に腰を板いに附しいて蹲しゃがんでいた、土方体の大男の、電車も橋も搔退かきのけるがごとく、両手を振ふつて駆出したのがある。

旅僧は、その声を、聞いたようだ、と思つたろう。しかしその

時、熊の皮は着ていなかった。

これは、清葉とお千世が、この日、稲葉家へ入ろうとして、その露地から出て、二人を見て逃げるのを知った、のツそりほおかぶ頬ほおかぶ被りをした昼の影法師と同じ風体の男である。

綺麗な花

六十四

「あぶね
危えツ！」

危え、と蔵の屋根から、結束した消防夫が一人しごとし、棟はずれに乗

出すようにして、四番組の纏まとを片手に絶叫する。

その下に、前と後うしろを、おなじ消防夫に遮られつつ、口紅の色も白きまで顔色をかえながら、かかげた片褌かたづま、跣足はだしのまま、宙へ乗つて、前へ出ようと身をあせるのは清葉であつた。

「放して、放して。」

この土蔵一つ、細い横町の表から引込んだ処に、不思議なばかり、白磨しろみがきの千本格子がぴたりと閉つて、寢静ねしずまつたように音もしないで、ただ軒に掛けた滝の家の磨硝子すりガラスの燈ばかり、瓦斯ガスの音が轟々と、物凄い音を立てた。

「蔵は大丈夫だ。姉さん、危い。」とまた屋根から呼ばれる。

取巻く、人数にんずが、

「退のいた、退どいた、退いた。」と叫ぶ。

薄藤色の出の衣服きものの、肩を揉んで身をあせる、火の粉は紅梅のごとく衣紋を切つて散るのである。

「蔵じゃない、蔵の事なんかじゃないんだよ。」

「箆たんす筒は出したい。出来るだけ出した。」

「内の人たち。」と、清葉はもう声が涸かれる。

「乳母ばあやは、湯に入っていた処だ、裸はだか体で遁にげた。」

「娘さんも小婢こおんなも遁にがした。下女おさんどんは一所に手伝った。」

「何しろ火が疾はやい。しかも火元が裏家の二階だ。」

と口々にがやがや言う。

「その二階におつかさんが。」

「何、阿母が。」

「坊やが、坊やが。放して、放して。」

と云うと、思わずおさ压えたのが手を放す。

「了しまった。」と屋根で喚わめく。

二人ばかりドンと出て格子戸に立ったのは、飛込もうとしたのではない。血迷うばかりの、清葉を遮って、突戻すためであった。

清葉は、向うから突戻されてよろよろと、退しきると、唧筒ポンプの護ご謨む管かんに裳もすそを取られてぼったり膝を、その消えそうな雪の頸うなじへ、火の粉がばらばらとかかるので、一人が水びたしの半纏はんでんを脱いで掛けた。

この折から、ここの横町を河岸へ出る、角の電信柱の根を攀よじ

て、そこに積んだ材木の上へ、すつくと立って頭あれた、旅僧の櫓ひのきがさ
木笠は、両側の屋根より高く、小山のごとき松明の炎に照され
たが、群集の肩を踏まないでは、水管の通った他に、一足も踏込
む隙間は無かつたのである。

「筒先ウ向ける。」

「手向たむけの水だい。」

そこに絶望の声を放つと、二ふた条すじばかり、筒先を格子に向けた。

どどどツと鳴る音と共に、軒の瓦斯は、人魂のごとく屋根へ飛
ぶ。格子が前へどんと倒れる。地獄の口の開あいた中から、水と炎
の渦巻を浴びて、黒くろけむり煙けむりを空脛からすねに踏んで火の粉を泳いで、背
には清葉まの継ましい母を、胸には捨てた（坊や。）の我わがこ児こを、大おおは

肌脱だぬぎの胴中へ、お孝が……葛木に人形を包んで投げたを拾って持った、緋の長襦袢を縄からげにぐい、と結んで、

「おう！」

とばかり呻うなって出たのは赤熊である。

「助かった。」

「助けた。」

錦の帯は煙を払って、竜のごとく素直まっすぐに立つ。母はその手に抱寄せられた。

「坊や。」

と清葉が手を伸した時、炎ながれの流は格子戸かじらの倒れた穴を、堰せきを切った堤のごとく、九ツかじらの頭みなぎを立てて漲り流るる。

「まあ、綺麗に花が咲いた事。」

ひとまち

一町、中を置いた稲葉家の二階の欄てすりに、お孝は、段だん鹿子かのこの麻の葉の、膝もしどけなく頬杖して、宵よい暗やみの顔ほの白う、柳涼しく、この火の手を視ながめていた。……

振向く処を

六十五

「この勢いきおいだ、この勢だ。」

なだれ
人雪頬打つ中を、まるで夢中で、

「人一人助けて下さい。この勢いきおいなら殺せる下さい。お孝、畜生。」
 眼まなこは火のごとく血走りながら、厚い唇は泥のごとく緊しまりなく緩ゆるんで、ニタニタと笑いながら、足許ふらふらと虚空を睨にらんで、夜具包み背負しよつて、ト転倒ころがる女を踏ふん跨またぎ、硝子戸がらすどを立てて飛ぶ男を突飛ばして、ばたばたと破つて通る。

「この勢だ、殺せる下さい。」

火の盛なる頃なれば、大膚脱おおはだぬぎを誰たれ一人目に留とめる者も無く、のさのさと墓がまの歩行あゆみに一町隣りの元大工町へ、ずつと入ると、火の番小屋が、あつけに取られた体に口を開けてポカンとして、散敷いた桜の路を、人の影は流るるよう。……半鐘の響、太鼓の音、ぱつぱつと燃ゆる音、べらべらと煙の響、もの音ばかり凄すさまじ

く、両側の家はただ、黒い墓のごとく、寂しいまでにひそまり返
 っつて、ただ^{ところどころ} 処々、^{ひさし} 廂に^{まっか} 真赤な影は、そこへ火を呼ぶか、と凄
 いのである。

洪^{ごう}と鳴つて新しい火の手が上ると、魔が知らすような激しい人
 声。わツと喚^{わめ}いてこの町も危^{あやう}くなつたが、片側の二階からドシド
 シ投出す、衣類、調度。

ト諸君はお竹蔵と云うのを御存じの筈^{はず}と思う。あの屋根から、
 誰が投げて、どのがらくたに交つたか、二尺ばかりの蟬^{せみや}鞆^{ひとふ}が一
 口^り。蛇のごとく空に躍つて、ちようどそこへ来た、赤熊の額を
 尾でたたいて、ハタと落ちた。

発奮^{はずみ}で打つたか。前刻^{さつき}滝の家の二階で受けた怪我の、気^{いき}の勢^{おい}で

留まっていたか。この時、額から垂々と血が流れたが、それには構わないで、ほとんど本能的に、胸へ抱いた年弱の三歳の子を両手で抱えた。

が、慌しく刀を拾うと、何を思う隙も無さそうに、ギラリと冷かに抜いて、鞘を棄てて提げたのである。

そのまま襲入った、向うの露地口には、八九人人立したが、真中をずつと通るのに、誰も咎めたものが無い。

柳に片手を、柄下りに、抜刀を刃尖上りに背に隠して、腰をずいと伸して、木戸口から格子を透かすと、ちようど梯子段を錦絵の抜出したように下りて、今、長火鉢の処に背後向きに、すつと立った、段染の麻の葉鹿の子の長襦袢ばかりの姿がある。

がらりと開けると、ずかずかと入るが否や、

「畜生！」

振向く処を ひとかたな 一刀、向うづきに、グサと突いたが脇腹で、アツとほとんど無意識に手で疵を きず 抑えざまに、弱腰を横に落す処を、引なぐりにもう ひとたち 一刀、肩さきをかツと当てた、が、それは ひき 引かき疵に きず 過ぎなかつた。刃物の鍛は きたえ 生鉄で、刃は一度で、中じやくれに曲つたのである。

「姉さん、——」

虫が知らしたか、もう一度、

「お爺さん。」と呼ぶと ひと 齊しく、立って逃げもあえず、真白な腕を かいな あわれ、あかんぼ 嬰兒のように虚空に投げて、身を もた 悶えたのは、お

千世ではないか。

赤熊は今日も附狙つて、清葉が下に着た段鹿子を目的に刃を当てた。

このお千世の着ていたのは、しかしそれではなく、……清葉が自分の持して寄越したのであることを、ここで言いたい。

「ちよつと、お茶を頂きに。」――

清葉の眉の上つたのを見て、茶の缶をたたく叔母なるものは、にぼな香煎でもてなすことも出来ないで、陰気な茶の間が白けたのであったが。

あわせかがみ

六十六

「これは、いらつしやいまし。」

そこへ、お千世に介抱されつつ、二階から下りて来たお孝が、儀式正しく、ぴたりと手を支ついて挨拶をした。肩の位に、大客を恐れない品格が備わって、取乱した人とは思われなかった、が、清葉も改めて会釈をする時、それは誰にするのやら分らないことを悟った。

「いらつしやいまし。」

今度は澄まして在らぬ方かたの、店を向いて手を支いたのである。

「お孝さん、分りますか。」

清葉は声を曇らしながら、二階で弄もてあそんで欄干越てすり、柳がくれに落したのを、袖で受けて膝に持った、銀地の舞扇を開いて立つて、長火鉢の向う正面に、縁起棚の前にきらりと翳かざすと、お孝が、肩を落して、仰向いて見つづ。

「お月様でしょう。——大事のお月様雲めがかくす。——とても隠すなら金屏風で、」

と唄うかと思えば、

「おお、寒い、おお寒い、もう寝ようよ。」と身ぶるいをする。

お千世が、その膝を抱くように附添つきぞつて、はだけて、乳ちのすくお孝の襟を、搔かきあわ合せ、搔合せするのを見て、清葉は座にと着き

あえず、扇子おうぎで顔を隠して泣いた。

背後うしろへ廻つて、肩を抱いて、

「お大事になさいよ、静しずかにお寝やすみなさいまし、お孝さん、ちよいとお千世さんを借りますよ。——お座敷にして。」

と顧みて、あとは阿婆おばあに云つた。

「から、意気地も、だらしも有りませんやね、我ままの罰ごうだ、業ごうだ。」

と時々刻つぶやんで呟つぶやいた阿婆が、お座敷と聞くと笑えみかたむ傾むけ、

「そらよ、お千世や、天から降つたような口が掛つた。さあ、着換えて、」

直ぐに連れて出ると心得た阿婆が、他ほかには無い、お孝みだれごの乱

心こころにゆかしがって着ていた、その段鹿子を脱がせようと、お千世が遮る手を払って、いきなりお孝の帯に手を掛けて、かなぐり取ろうとしたのである。

「叔母さん、まあ、」

とお千世はおろおろ。……

「失礼をいたします。」と、何の事やらまた慇懃いんぎんに、お孝が、清葉に手を支いたしたのは涙ならずや。

「これが可厭いやなら、よく稼いで、可い旦那を取ってな、貴女方を、」

と、清葉を頤あご、

「見習って幾枚でも拵こしらえろ、そこを退どかぬかい。」と突退つきのける。

「お待ちなさいまし。」

凜りんと留めて、

「切火を打って、座敷へ出ます、芸者の衣物きものを着せるには作法があるんです。……お素人方には分りません、手が違うと怪我をします。貴方、お控えなさいまし。——千世ちいちゃん、今（箱さん。）を寄越すから、着換えないでいらつしやいよ。姉さんを気をつけて。お孝さん、」

何も知らず横を向いたお孝に、端正ちやんと手を支いて、

「さようなら。——二人で、一度あわせものをしましうね。」

と目を手巾ハンケチで押えて帰った。……

襦袢はわざと、膚馴はだなれたけれど、同一おなじその段鹿子を、別に一組、

縞しまもの物だったが、対ついに揃そろえて、それは小女こおんなが定紋の藤の葉の風呂敷で届けて来た。

箱屋が来て、薄べりに、紅裏香におう、衣紋いもんを揃そろえて、長襦袢じゆばんで立つた、お千世のうしろへ、と構かまえた時が、摺半鐘すりばんで。

「木の臭においがしますぜ、近い。」

と云うと、箱三の喜平はひよいと一飛。阿婆おばあも続いて駆出した。お千世の斬きられた時、衣物きものはそこにそのままである。

振袖

六十七

「違った、お千世だい。」

と、やっぱりニタニタと笑いながら、目を据えて階子段はしごだんを見上げた時。……ああ、一足遅い。

お千世の祖父じいの甚平が台所口から草鞋穿わらしじばきの土足である。――

これが玄関口から入ったら、あるいはこうはなかつたらう。――

爺さんは、当夜植木店だなのお薬師様の縁日ついでに出た序ついでに、孫が好きだ、

と草餅の風呂敷包しよを首しよに背負かかえぬしつて、病中ながらかねて抱かかえぬし主しの

お孝ひなげしが好いた、雛芥子ひなげしの早咲ひなげし、念入ひなげしに土鉢ひなげしながら育てたのを丁寧

に両手に抱いて、来て、途中頭の上の火事に慌すわてながら、驚破すわや

見舞すわ、と駆込んで、台所口へ廻ったのが、赤熊と一足違い。

泥鉢は一ひとたま堪りもなく踏ふみつぶ潰された。あたかも甚平の魂のごとくに挫くじけて、真紅の雛芥子は処女の血のごとく、めらめらと颯さっと散る。

熊は山へ帰る体に、のさのさと格子を出た。

ト、敵あいてを追つて捕えよう擬勢も無く、お千世を抱いて、爺さんの腰を抜いた、その時、山鳥の翼を弓に番つがえて射るごとく、颯さっと裳もすそひを曳いて、お孝が矢のように二階を下りると思うと、

「熊の蛆うじめ、畜生。」と追おいすが縋つつて衝と露地を出た。

が、矢玉と馳はせちが違ちがい折かさなる、人混ひとごみ雑の町へ出る、と何しに来たか忘れたらしく、ここに降かかる雨のごとき火の粉の中。袖でうけつつ、手で招きつつ、

「花が散るよ、散るよ。」

と蹴出しの浅黄を踏ふみくぐみ、その紅を捌くれないさばきながら、ずるずると着衣きものを曳いて、

「おお、冷い、おお、冷い。……雪やこんこ、霰あられやこんこ。……

おお綺麗だ。花が散るよ、花が散るよ。」

仲通の小紅屋の小僧は、張子の木兔みみずくのごとく、目を光らして一すくみになつた。

火の影ならず、血だらけの抜刀ひっさを提げた、半裸体の大漢おおのこが、途惑とまどいした幟のぼりの絵に似て、店頭みせさきへすつくと立つと、会釈も無く、持しらはつた白刃を取直して、切尖きつさきで、ずぶりとそこにあつた林檎かざぐるまを突刺し、敵将こうべの首を挙げたるごとく、ずい、と掲げて、風車

でも廻す気か、肌につけた小児しょうにの上で、くるりくるりとかざして見せたが、

「あはは。」と笑うと、ドシンと縁台へ腰を掛ける、と風に落ちて来る燃えさしが人よりも多い火の下の店頭みせさきで、澄まして林檎の皮を剥むきはじめた。

小僧は土間の隅にさながらのからくり。お世辞ものの女房が居たらば何と云おう。それは見えぬ。

「坊主、咽喉のどが乾いたろうで、水のかわりに、好すきなものを遣るぞ。おお、女房おっかに肖そっくり如ごとだい。」

ニヤニヤとまた笑ったが、胡瓜きゅうりの化けたらしい曲った刀が、剥きづらかったか、あわれ血迷って、足で白刃を、土間へ圧おしあ当て

踏延ふみのばして、反そりを直して、瞳に照らして、持直す。目の前へ、すつと来て立ったのはお孝である。

「刀をお貸し。」

黙さまつて袖口を、なぞえに出した手に、はつと、女神の命に従う状さまに、赤熊は黙つてその刀を渡した。

「おお、嬉しい、剃かみそり刀一挺持たせなかつた。」

と、手遊物おもちゃのように二つ三つ、睫まつげを放して、ひらひらと振つた。まなじり
 眦まなじりを返す、と乱るる黒髪。

「覚悟をおし。」と、澄まして一言ひとこと。

何か言いそうにした口の、ただまたニヤニヤとなつて、大な涎おおまだれ
 の滴たら々と垂るる中へ、素直まっすぐにすぎんと刺した。が、齒にカツ

と^{すべ}に^{くちびる}つて、^{あけび}脣を^{あけび}決明果のごとく裂きながら、咽喉へはずれる、その真^{まんなか}中、我と我が手に赤熊が両手に握つて、

「ううう、うう！……^{えぐ}抉れ、抉れ、抉れ。」

懐^{ふところ}中を^{こども}ころがる小児より前に、小僧はべたべたと土間を這う。

「^{しま}了つた。」

手を^{おさ}压えたのは旅僧である。葛木は、人に揉まれて、脱け落ちた笠のかわりに、^{ころも}法衣の片袖頭巾めいて^{おもて}面を包んだ。

「お孝さん。」

「先生。」

と、忘れたように柄^{つか}を離すと、刀は落ちて、赤熊は真仰向けに、腹^{あらわ}を露骨に、のつと^{かえ}反る。

お孝の彼を抉った手は、ここにただ天地一つ、白き蛇のごとく美しく、葛木の腕に絡つて、漣々と泣く。

葛木はなお継る袖をお孝に預けたまま、跪いて悶絶した小児を抱いた。

駆着けた警官の中に笠原信八郎氏が有つた。

「葛木……更めてお目にかかります。……見苦しくなく支度をさせます。この女の内までお見免しが願いたい。」

「諸君。」

信八郎氏は言下に云つた。

「わたくしせめ
私が責を負います。」

警官は二隊に分れた。

お孝は法衣ころもの葛木に手を曳かれて、静々と火事場を通つた。裂けた袂たもとも、さながら振袖を着たごとくであつた。

火の番の曲り角で、坊やに撞れて来た清葉に逢つた。

「ああ、お地藏様。」

夢かとはばかり、旅僧の手から、坊やを抱取つた清葉は、一度、継母とともに立退たちのいて出直したので、凜々りりしく腰帯で端折はしよつていた。

お孝は、離さじ、とただ黙つて葛木に縋る。

「や、ここにも一人。」

警官は驚いた。露地の出口の溝どぶの中、さして深くもない中に、横倒れに陥はまつて死んでいたのは茶缶ちやかんばばあで、胸つぎきに突疵きずがある。

さては赤熊が片附けた。

これが為に、護送の警官の足が留つて、お孝は旅僧と二人、可な懐つかしそうに、葉が差さ覗しのぞく柳の下もとの我家に帰る。

清葉の途中で立停たちどまつたのを見て、お孝が判然はつきりした声で云つた。

「姉さん、遺言を聞いて下さい。」

「はい。」

と答えた。二人は柳の軒燈に、清葉はその時、羽目について暗く立つた。

「お孝さん、蔵も今しがた落ちました。」

と云つて、実際目ぬりが届かないで、助つたつもりの蔵、中に

は能衣装までであると伝えた。が開いたのであった。

坊やを胸に、すつと出て、

「身に代えまして、清葉が、貴女になりかわつて。」

その時三人が皆泣いた。

「お千世さんは、」

「ああ、お千世。」

余りの事に呆果てて、三人は茫然とした。中にも旅僧は何をトツチたか、膝で這廻つて、雛芥子の散つた花片の、あおり煽で動くのを、美しい魂を散らすまいとか、胸の箱へ、拾い込み拾い込みしたのである。

信八郎氏が先ず一人で入つて来た。

お孝は胸いだに抱いだいて仰向けに接吻キッスしていた、自分のよりは色のま
だ濡々と紅くれないな、お千世の唇を放して、

「お湯を頂きましても可ようござんすか、旦那。」

と信八郎氏に手をついて言う。

渠かれは拳手の礼を返して、

「御随意に、盃をなすつて可い。」

茶棚うしろに背後向きになつた肩を拊うつばかり、ハタとそこへ、縁起
棚から輝いて落ちたのは、清葉が、前さきに翳かざしたままそこにさし置
いた舞扇で。

ふとここに心付いたらしく、立つて頂いて、同じ縁起棚から取
つた小さな紙包み、（同妻。）の手巾ハンケチの端を、湯呑に落して素さ

湯を注いだ、が、なにも言わず、かぶりと飲むと、茶碗酒が得意の意気や、吻ほっと小さな息をした。その中に黒子ほくろを抜いた時の硝酸が入っていた。

「姉さん、遺言を聞いて下さいな。」

「生命いのちに掛けます、お孝さん。」

その時、舞扇を開いた面おもては、銀しろがねよりも白ずんだ。

お千世は玉の緒つなを繋ぎとめた。

葛木が、生理学教室に帰ったのは言うまでもない。留学して当時独逸にあり。

滝の家は、建つれば建てられた家を、わざと稲葉家のあとに引移った。一家の美人十三人。

清葉が盃を挙げて唄う、あれ聞け横笛を。

——露地の細路駒下駄で——

大正三（一九一四）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成¹²」ちくま文庫、筑摩書房

1997（平成9）年1月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

初出：「日本橋」千章館

1914（大正3）年9月

※「千世」に対するルビの「ちせ」と「ちい」、「三昧」に対するルビの「さんまい」と「ざんまい」の混在は、底本通りです。

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

※編者による注釈は削除しました。

入力：門田裕志

校正：酔いどれ狸

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本橋

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>